

# 長 表 遺 跡

## 発 挖 調 査 報 告 書

2001

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

なが おもて

# 長 表 遺 跡

## 発掘調査報告書

平成 13 年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



調査区近景(↑ N)



S B 300棟持柱建物跡完掘状況(↑ E)

## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査した、長表遺跡の調査結果をまとめたものです。

長表遺跡は、山形市街北部、今塚地区に位置しています。水田の広がる農業地帯であったこの地域も、流通センターの建設に始まって山形県立保険医療短期大学の開校、更には県立中央病院の移転等と大きくその様相を変えつつあります。

この度、主要地方道山形羽入線道路改良事業に伴い、工事に先立って長表遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、古墳時代の竪穴住居跡、中世の堀跡、掘立柱建物跡などが検出され、当時の生活を物語る貴重な資料を得ることができました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い、事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、わたしたちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが調査において御協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成13年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 木場 清耕

## 例　　言

- 1 本書は平成12年度主要地方道山形羽入線地方特定道路整備事業に係る「長表遺跡発掘調査報告書」である。
- 2 調査は山形県土木部の委託により財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名	長表遺跡 (CYGNO)	遺跡番号	平成3年度新規登録
所　在　地	山形県山形市大字今坂字長表		
調　査　主　体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
受　託　期　間	平成12年4月1日～平成13年3月31日		
現　地　調　査	平成12年5月8日～平成12年9月8日		
調　査　担　当　者	調　査　第　二　課　長	尾　形　與　典	
	主　任　調　査　研　究　員	伊　藤　邦　弘	
	調　査　研　究　員	植　松　曉　彦　(調査主任)	
	副　調　査　員	高　柳　健　一	
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県山形建設事務所道路課、山形市教育委員会、東南村山教育事務所等の関係諸機関の協力を得た。
- 5 本書の作成・執筆は、植松曉彦・高柳健一が担当した。編集は須賀井新人・菅原哲文・豊野潤子が担当し、全体については尾形與典が監修した。
- 6 委託業務は下記の通りである。

遺構の写真測量・実測	(株)日本テクニカルセンター
資料の理化学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
木製品の保存処理(樹種同定)	吉田生物研究所
- 7 出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

S T 竪穴住居跡	S B 挖立柱建物跡	S A 柱列	S K 土坑
S D 堀跡・溝跡	S P ピット	S X 性格不明の落ち込み	
E K 遺構内土坑	E P 遺構内柱穴	E L 遺構内炉跡	
R P 土器・土製品	R Q 石製品	P 土器	S 石

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆基準は下記の通りである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N - 5°00' - W を測る。
- (3) 遺構実測図は1/80~1/200他の縮図で採録し、各々スケールを付した。なお、実測図中の焼土・炭化層は砂目のスクリーントーンで表す。
- (4) 遺物実測図・拓影図は、原則的に1/3、1/6で採録し、各々スケールを付した。なお、古墳～古代の土師器は断面白抜き、須恵器は黒ドットを各々断面右下に付した。
- (5) 遺物観察表中の計測値欄は現存値を示す。括弧は推定値、器高では残存高さを表す。出土地点欄の層位では「F」は遺構覆土内出土、「Y」は遺構底面出土を各示し、ローマ数字「I～IV」等は遺構を覆う土層（基本層序）を表している。
- (6) 遺物図版については、縮尺等は任意とした。
- (7) 遺物番号は、遺物実測図を基に遺物観察表に共通したものである。遺構挿図中に図示している遺物も同様である。
- (8) 遺構覆土の色調の記載については、1987年度農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に掲った。

# 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 遺跡の概観	
1 調査区と層序	7
2 遺構と遺物の分布	7
IV 検出遺構	
1 棟持柱建物跡	8
2 堅穴住居跡	8
3 河川跡	11
4 堀跡	11
5 掘立柱建物跡	11
6 溝跡	12
7 土坑・井戸跡	12
8 周溝跡	12
V 出土遺物	
1 古墳時代の遺物	41
2 木製品	43
3 中世の土器・陶磁器	44
4 漆器	44
5 木製品	44
6 石製品	44
VI まとめ	60
報告書抄録	63
付編 「長表遺跡の自然科学分析」	卷末

## 表

表1	豎穴住居跡観察表(1).....	27
表2	豎穴住居跡観察表(2).....	28
表3	豎穴住居跡観察表(3).....	29
表4	豎穴住居跡観察表(4).....	30
表5	豎穴住居跡観察表(5).....	31
表6	豎穴住居跡観察表(6).....	32
表7	豎穴住居跡観察表(7).....	33
表8	C・E区主要土坑・井戸跡観察表.....	34
表9	遺物観察表(1).....	58
表10	遺物観察表(2).....	59

## 挿 図

第1図	遺跡位置図.....	2
第2図	遺跡概要図.....	3
第3図	地形面区分図.....	3
第4図	遺構配置図.....	5
第5図	基本層序.....	7
第6図	S T 8・9 豊穴住居跡.....	13
第7図	S T 10・12 豊穴住居跡.....	14
第8図	S T 11・19・20・39 豊穴住居跡.....	15
第9図	S B 300・301 棟持柱建物跡.....	17
第10図	S T 14・15・16・41・42・286 豊穴住居跡 .....	19
第11図	S T 27 a・b 豊穴住居跡.....	20
第12図	S T 21~25・37 豊穴住居跡.....	21
第13図	S T 28・71 豊穴住居跡・S G 34 河川跡.....	23
第14図	S T 241・291 豊穴住居跡.....	24
第15図	S T 246・247・270・271 豊穴住居跡.....	25
第16図	S T 274・275・278 豊穴住居跡 .....	26
第17図	S D 1 堀跡・S D 5・6 溝跡・S P 114~122 ピット群.....	35
第18図	S B 302 掘立柱建物跡・S A 303 穴列.....	36
第19図	S D 7・104 区画溝跡・S K 91・102 土坑跡.....	37

第20図	S K89井戸跡・90土坑跡・S D193周溝跡	39
第21図	S K 2・75・78・81・82・85・86・94・97・210井戸・土坑跡	40
第22図	遺物実測図(1)	45
第23図	遺物実測図(2)	46
第24図	遺物実測図(3)	47
第25図	遺物実測図(4)	48
第26図	遺物実測図(5)	49
第27図	遺物実測図(6)	50
第28図	遺物実測図(7)	51
第29図	遺物実測図(8)	52
第30図	遺物実測図(9)	53
第31図	遺物実測図(10)	54
第32図	遺物実測図(11)	55
第33図	遺物実測図(12)	56
第34図	遺物実測図(13)	57
第35図	今堀地区字切概要図	62

## 図 版

卷頭図版 1	調査区近景他	図版15	C区遺構検出状況他
図版 1	A区遺構検出状況他	図版16	C区完掘状況他
図版 2	S T 8床面検出状況他	図版17	S A304・305・306完掘状況他
図版 3	S T 11床面・炭化層検出状況他	図版18	S E89土層断面他
図版 4	S T 12床面検出状況他	図版19	E区遺構検出状況他
図版 5	S T 19床面・炭化層検出状況他	図版20	出土遺物(1)
図版 6	S T 19E K 9土層断面他	図版21	出土遺物(2)
図版 7	S T 21古・新・22完掘状況他	図版22	出土遺物(3)
図版 8	S T 22炭化層土層断面他	図版23	出土遺物(4)
図版 9	S T 28貼床土層断面他	図版24	出土遺物(5)
図版10	S T 278 E P 1・遺物出土状況他	図版25	出土遺物(6)
図版11	S T 291炭化層検出状況他	図版26	出土遺物(7)
図版12	S B 300完掘状況他	図版27	出土遺物(8)
図版13	S B 300 E P 237下層礎板出土状況他	図版28	出土遺物(9)
図版14	S B 301完掘状況他		

## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経緯

長表遺跡は山形市街北部の今塚地区の集落の西北に位置し、馬見ヶ崎川の自然堤防上の水田地帯に立地する。周辺には国指定の史跡となっている鳩遺跡や平成5年度に発掘調査が実施された古墳～平安時代の今塚遺跡が位置し、遺跡の多い地域として知られている。

今回の発掘調査は、主要地方道山形羽入線地方特定道路整備事業に伴って実施されたものである。

本遺跡は平成3年度に山形県教育委員会が実施した山形北部地区基礎調査により遺跡の存在が確認され、新規発見遺跡として登録した。本調査に先立ち平成11年9月21・22日に県教育委員会による路線区内の試掘調査が行われた。

試掘調査では古墳時代と考えられる竪穴住居跡・柱穴・土坑・溝跡等の遺構や土師器・中世陶磁器片などの遺物が検出された。その結果、長表遺跡は遺跡中央部～南半の一部が破壊を受けているが、南北約400mの分布範囲を呈する集落跡であることが推定された。

調査結果をもとに関係機関による協議が行われた結果、主要地方道山形羽入線地方特定道路改良事業区内について緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることになり、財団法人山形県埋蔵文化財センターが県の委託を受けて長表遺跡の発掘調査を実施することになったものである。

### 2 調査の方法と経過

発掘調査は、平成12年5月18日から9月8日までの期間で実施した。調査面積は主要地方道山形羽入線道路改良事業に係る5,340m<sup>2</sup>である。

5月8日に発掘器材の搬入、鋤入れ式を行う。環境整備等を行った上で、調査区の設定を行った。調査区は調査の便宜上、北側から南側へA～E区とした。C・D区の間は試掘調査の結果により調査区から除外された。

遺構検出面の深さ等を確認するために試掘を行い、重機を用いて表土を除去し、A区より面整理を行った。

調査区を覆う座標は、調査区の中央を南北に走る主要地方道山形羽入線の建設予定道路内の中央を南北に走るセンター用測量杭（N°34・38）を南北の基準とし、それと直交する線を東西軸とした。これを起点として5m四方の方眼（グリッド）を設定した。

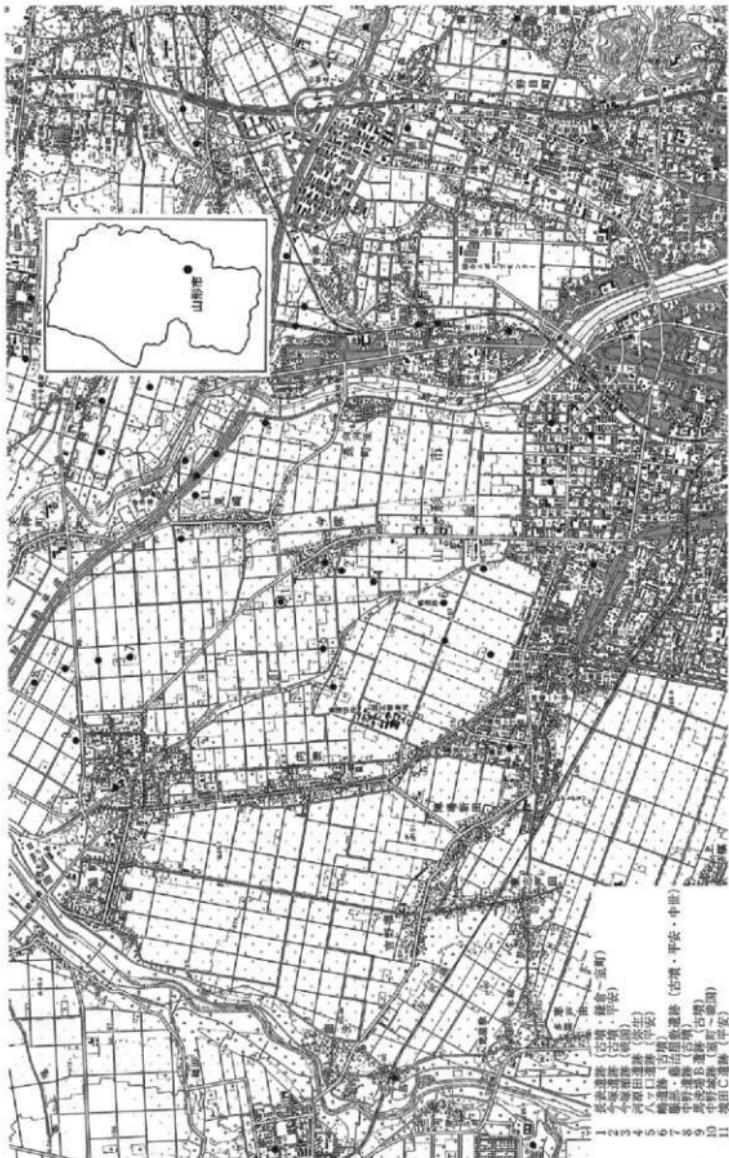
東西軸は西から東にA～Eまで、南北軸は南から北に0～78まで付番して「A-1」のように表記した。方眼の南北軸はN-5°00' -Wを測る。

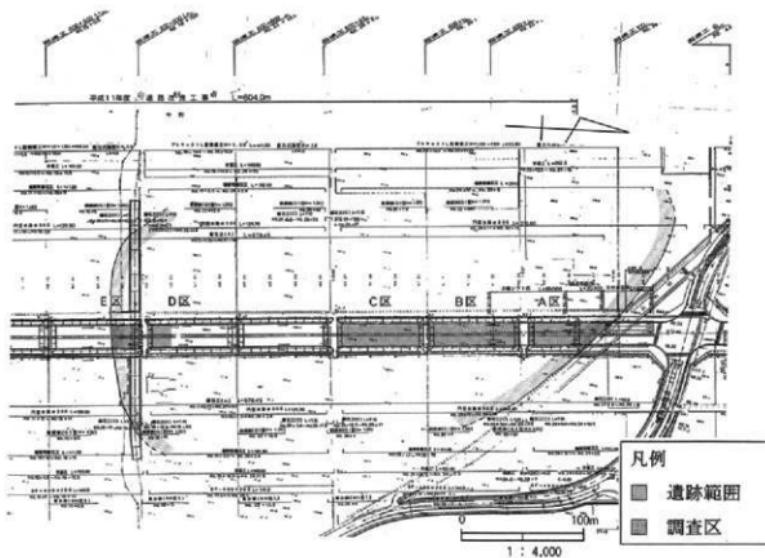
調査は表土除去終了後、南側から開始し、面整理を繰り返しながら遺構検出・マーキング・遺構登録・遺構精査を行った。

遺構の精査に合わせ、遺構の平面図・断面図の作成・遺物の検出および登録、写真撮影、土層注記等記録作業、遺物取り上げ等を行った。その後、空撮による写真測量を行った。

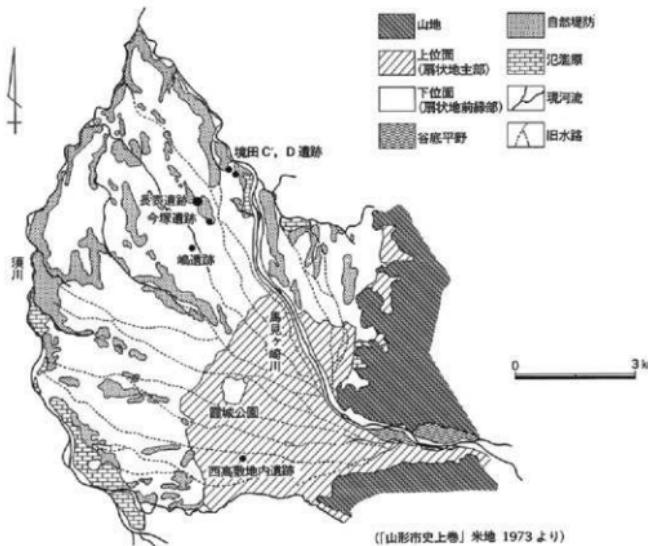
8月11日、関係者を含め多数の市民の参加を得て現地説明会を開催し、9月8日現地事務所の撤収を行って、現場における調査を終了した。

第1図 遷跡位置図  
 $S=1:50,000$





第2図 遺跡概要図



第3図 地形面区分図

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

長表遺跡は、山形市街の北方約3km、山形市大字今塚地区に所在する。遺跡範囲は今塚地区北西部を一部含み、南西の水田地帯に広がる。

地形的には馬見ヶ崎扇状地の前縁帯にあたり、湧水帯に位置する。本遺跡周辺の遺跡群も同様に湧水帯上に立地する。標高は103m前後を測る。

また、長表遺跡は遺跡の東側を北流する馬見ヶ崎川や、調査区内にも見られる馬見ヶ崎川の支流等の氾濫によって形成された自然堤防上に立地する。これは調査区内でも、旧河川の自然堤防の安定した堆積土壤の上に集中して集落が形成される事から理解される。そして、調査区の北側に向かって地山が低くなる泥炭層の低湿地は、自然堤防の後背湿地と推定できる。

自然堤防がどの程度安定していたかは、長表遺跡が古墳時代前期（4世紀）、中世（13～15世紀）の複合遺跡にも拘らず、地表下50cm未満で各生活面が、ほぼ同じレベルで確認される事から4世紀以降、自然堤防を埋没させるような自然堆積ではなく、C区の旧河川跡の土層から洪水等はあるものの、居住地となった自然堤防上は、かなり安定していたと考えられる。これは、馬見ヶ崎川が運ぶ砂礫が扇状地扇端部で止まり、本遺跡の扇状地前縁帶では堆積が少なかったからで、近接する境田遺跡でも同様な事が窺える。

本遺跡は馬見ヶ崎川扇状地の扇端・前縁部の豊富な湧水と河川によって成因された自然堤防に居住域を形成し、後背湿地を利用した水田経営によって成り立っていた集落と考えられる。

### 2 歴史的環境

本遺跡の周辺の遺跡は、馬見ヶ崎川扇状地が形成する沖積平野の自然堤防上の微高地に多く立地し、繩文終末期～弥生時代に集落の展開が始まり、古墳時代に集落が増加する傾向がある。

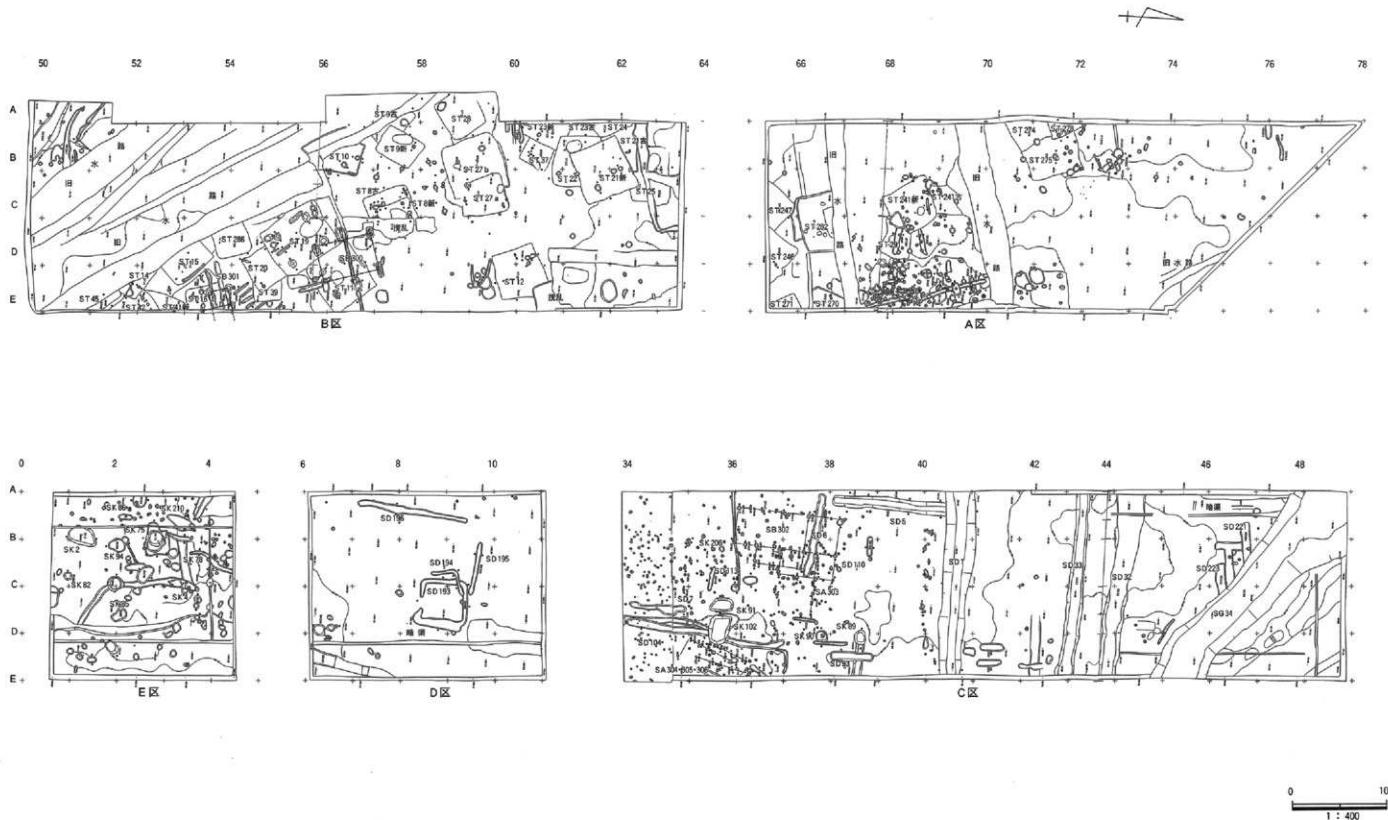
本遺跡の南側約500mには弥生時代中期の河原田遺跡がある。山形市教育委員会が平成12年に調査を行い、本時期では希少な木棺墓5基、土器棺墓1基等の墓域と柱穴群等が検出された。

古墳時代では、本遺跡の300mに南接する今塚遺跡があり、前期後半の焼失家屋を含む多数の竪穴住居跡が確認され、床面等から一括土器群が出土し、当概期の基準的な資料といえる。

更に、本遺跡の約1km南には国指定史跡の鳴遺跡がある。この遺跡は後～終末期が主体の低湿地遺跡で、掘立柱建物跡や倉庫の柱根や鼠返し、弓矢や鞍等の武具、櫛等の生活品、農具等の多量の木製品が出土した。

他に平成11年度に調査が行われた本遺跡から北に約1kmに近接すると服部・藤治屋敷遺跡と馬洗場B遺跡が上げられる。両者とも前期の河川跡が確認され多くの土器群と木製品が出土した。特に服部・藤治屋敷遺跡では当時の農具を中心とする木製品が多量に出土し、馬洗場B遺跡では破鏡が出土した。

中～近世では現今塚地区南西部に、天正年間に丹野与惣右衛門が築城した今塚城が伝承され、城内には藤田道という山形市街より北への直進道があり、元和8年に高源寺が建立されたと伝えられる。

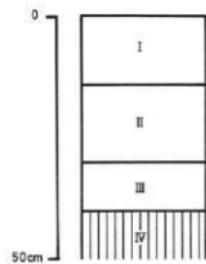


第4図 遺構配置図

### III 遺跡の概観

#### 1 調査区と層序

長表遺跡の調査区は、南北400m以上にわたる遺跡範囲を幅約20mにわたって縦断するように設定された。調査区は東西に延びる農道等をさけて、北から5つの調査区に分けられた。調査区は北からA・B・C・D・E区とし、CとD区間の低地部分は県文化財課が、試掘による地山の削平や遺跡の破壊を確認し、約150mの間隔をあけ、調査区が設定された経緯がある。また、B区西側の56~60グリッド部分は地権者の土取りにより遺構検出面が既に削平を受けており、一部調査区を拡張した。調査区の地山は、遺跡の中央部であるB・C区が高く安定し、南北の両端に向けて低くなる。



第5図 基本層序

C区北側では旧河川跡が確認された。川幅15~20m前後にわたって調査区を分断しており、旧河川跡を境に北は古墳時代前期、南は中世の遺構が分布する。特に南側のC~E区の中世の遺構や遺物は、当初は古墳時代の集落跡として調査計画が立てられたが、調査区西側に広がる方形の高台である周辺の地形や「元屋敷」等の小字名との関連も推定され、中世の所謂「方形城館」の一部と判断された。

基本層序はI層が黒色の耕作土、II層が黒褐色粘質シルト層、III層が暗褐色微砂層、IV層がにぶい黄褐色微砂層（地山）である。III層下部から遺物の包蔵が認められ、遺構の検出面はIV層直上面であった。

#### 2 遺構と遺物の分布

調査区で検出された主な遺構は、C区の旧河川の北側、A・B区から古墳時代前期の竪穴住居跡41棟、棟持柱を有する建物跡（以下、棟持柱建物跡と仮称する）2棟と、南側のC・D・E区の中世の堀跡1条、掘立柱建物跡1棟、柱穴列4列、溝跡17条、土坑や井戸跡17基、周溝跡1条、ピット群等である。以下に調査区毎に遺構と遺物の分布の概略を述べる。

A・B区では古墳時代前期の竪穴住居跡41棟、棟持柱建物跡2棟が検出され、重複関係から最大で4時期以上の変遷が認められる。B区を中心に竪穴住居跡が認められるが、北側の遺跡縁辺にかけて遺構の分布は希薄になる。棟持柱建物跡もB区中央部で検出され、1棟は更に調査区外に延びる様相を示す。遺物の面では竪穴住居の大半が上部を削平されており、S T19・21等の竪穴住居跡の一括遺物や床面の出土遺物を除き、全体に少ない。

C~E区は中世の遺構群で、C区中央部に調査区にはば直交して東西に幅約2.5mの堀跡が東西に検出された。その南側の39~40グリッドでは土層断面や遺構分布の希薄な事等から土塁の存在が想定された。土塁の南側の多数のピット群の中で建物跡が構成され、建て替えのある1×5間の張り出しのある小規模な建物が考えられた。更にC区南側に3列の柱穴列やピット群も確認されたが、建物とするまでには至らなかった。周辺には溝跡や土坑跡が検出された。D区では長軸5m内外を測る方形に廻る溝跡が検出され、塚跡の周溝等と考えられる。E区では12基以上の多様な形態の土坑群が密集して確認され、井戸跡の可能性が窺えた。

一方、遺物は溝跡や土坑を主に土器、漆器、青磁等が出土し、破片資料が多い。

## IV 検出遺構

長表遺跡では調査区北側のA・B区から古墳時代の棟持建物跡2棟、竪穴住居跡41棟と、南側のC・D・E区の中世の堀跡1条、掘立柱建物跡1棟、溝跡17条、土坑・井戸跡17基、周溝跡1基等の遺構が確認された。以下に古墳時代から遺構の種別毎に列記する。

**1 棟持柱建物跡** 古墳時代の竪穴住居の下層から2棟検出された。2棟とも6本柱を基調とし、中央部の柱がやや外側に張り出し、棟持柱を有する構造と考えられた。梁行よりも桁行が短い特殊な形態を示し、ほぼ全ての柱穴底面から柱の沈下を防ぐ礎板が認められた。

**S B 300棟持柱建物跡（第9図）** B区中央部C～D-56～57グリッドに位置し、S T11・19の貼床土の下で検出された。南北約6.0m、東西約3.85mの1×1間の棟持柱建物跡で、主軸方向はN-21°-Wを測る。柱間距離が南北梁間が北から290cm（約9.5尺）、310cm（約10尺）、東西桁間が385cm（約13尺）である。

柱穴は、平面形が全て隅丸長方形を呈し、西側北からE P 237・287・288、東側北から289・295・290で構成される。柱穴規模は長軸が117・152・135、160・128・150cm、短軸がそれぞれ、70・100・77、60・77・73cm、検出面からの深さが38～62cmを測る。

全ての柱穴底面から礎板が検出されたが、土層断面や覆土からも柱の抜き取った状況が推測された。礎板は全て面取り等の加工を施し、鼠返しを転用したものがE K 237・289・290で認められ、E P 237では礎板が2枚重なって出土した。E P 287・288・295の礎板は板材で、表面中央部に凹部を作り出す。鼠返し転用のE P 237・289も内弯した面を表面に使用しており、両者とも柱の設置や荷重を考慮したものであろう。出土遺物はない。

**S B 301棟持柱建物跡（第9図）** S B 300の南東約10m離れ、ほぼ主軸を直交させB区中央C～D-53～54グリッドで、S T 16の貼床下等で検出された。東半部は調査区外で不明であるが、南面梁のE P 296が南側に張り出す形態や、全ての柱穴から礎板や板材片が出土する事等から棟持柱建物と判断した。南北約2.1m、東西1.9m以上の1×1間以上で東西に長く、S B 300同様に桁より梁が長い建物跡と推測された。主軸方向はN-16°-Wを測る。柱間距離が南北が桁間210cm（7尺）、東西梁間190cm（約6.5尺）である。柱穴は、平面形が円形や精円形を呈する。E K 234・292・293・296で構成される。直径はそれぞれ72・80・57・50cm前後を測る。検出面からの深さが38～62cmを測る。底面から礎板（E P 293・296）や板材片（E P 234・292）が出土した。E P 296では柱痕跡も確認されたが、他柱穴では土層断面や板材細片の出土状況から柱の抜き取りが推定された。E P 296より古相の土師器壺片が出土した。

**2 竪穴住居跡** 本調査区では竪穴住居跡が41棟確認されたが、上部削平が著しく大半が床面直上や、貼床と地山との差異でプランを検出した。以下に炉跡や貯蔵穴、柱穴等が検出された竪穴住居を主に取りあげ、個別の竪穴住居跡や遺存状況について別に観察表を示す。

**S T 8新一竪穴住居跡（第6図）** B区、A-56グリッドに位置する。S T 8古を切り、東半部が搅乱を受ける。床面直上で検出され、平面形は方形で、南北3.8m、東西2.4m以上を測る。E Lは床面中央西寄りに地床炉が検出された。南北約40cm、東西約30cmの精円形で、炉跡の焼けは床面下厚さ2cmを測る。E Lに接して北側に炭化層が広く薄く堆積する。平面形が精

円形で南北軸約160cm、東西軸約100cm、床面から約1cm弱堆積する。炭化層周縁を主に土師器壺等が倒壊して出土した。小規模の小ピットE P 1～3を確認した。

**S T 9古—竪穴住居跡（第6図）** B区、B-56グリッドに位置する。暗渠、S T 9新に切られる。ほぼ床面での検出で、平面形は概ね方形と推測され、検出長は東西で2.3m以上を測る。東壁北寄りにE Kが検出された。平面形が円形を呈し、南北90cm、東西80cmを測り、床面からの深さは約20cmを測る。底面から炭化層が検出される。当初、浅い掘り方や底面炭化層等から掘込炉も考えたが、設置位置等から床面前削平による上部削平された貯藏穴と判断した。埴片が出土した。S T 9古を切るS T 9新では、西壁中央の床面に、平面形が梢円形の長軸220cmを測る床面から約1cm弱の薄い炭化層が堆積する。床面で壺や鉢片、壺口縁部が逆位で出土した。

**S T 11竪穴住居跡（第8図）** B区、D-56～57グリッドに位置する。S T 19を切り、S D 29や一部旧水路に切られる。上部削平のため床面直上で検出した。平面形は方形で南北5.6m、東西6.0mを測る。床面はほぼ平坦で、貼床を施す。床面中央に炭化層が不整円形に薄く広がって検出され、南北130cm、東西146cmを測り、床面から1cm弱堆積する。

貯藏穴は南壁西隅にE K 5・6である。E K 5はE K 6東側に近接して南壁際に検出され、南北62cm、東西50cm、深さ約20cmを測り、覆土下層から管玉が出土した。E K 6は平面形が円形を呈し、南北54cm、東西64cmを測り、床面からの深さは約15cm前後を測る。底面に炭化粒を含む黒褐色粘質土が堆積し、高壺片が出土した。当初、炭化粒の影響による黒褐色土の堆積から炉跡下部の可能性も考えたが、明瞭な焼土や炭化層が未検出である事から貯藏穴と判断した。主柱穴はE P 1～4で、直径30～70cm、床面からの深さ32～44cmを測る。E P 1・4から柱根が出土した。E P 4は、旧水路により貼床の一部が削平され、S B 300 E P 289と共に検出した。土層等からS T 11 E P 4がS B 300 E P 289を切る事が判った。

**S T 19竪穴住居跡（第8図）** B区、C-55グリッドで検出された。床面直上で検出され、平面形は長方形で、南北6.7m、東西5.8mを測る。床面は平坦で、貼床が施される。床面中央北寄りに炭化層が薄く検出され、平面形は梢円形を呈し、南北260cm、東西170cmを測り、床面から約1cm堆積する。貯藏穴は南壁西寄りE K 9・12と推測され、E K 9は円形を呈し南北70cm、東西66cm、床面からの深さ16cmを測る。底面にS T 11同様に炭化粒を含む黒褐色粘質土が堆積する。E K 12はE K 9西側に近接して南壁間に検出され、南北100cm、東西70cm、深さ約48cmを測り、覆土上・下層から壺片が出土した。主柱穴はE P 1～4で、直径70～100cm、床面からの深さ42～92cmを測る。E P 2から柱根が出土した。

周溝等は南壁に直交する間仕切りと推測されるE D 8や、西壁中央部で検出されたE D 6が上げられ、特にE D 6底面からは炭化層に混じって炭化材も出土した。他にE P 5・10の小ピットが確認された。特に北壁際に集中して倒壊した状態で、壺・器台・壺・壺・瓶が出土した。

**S T 12竪穴住居跡（第7図）** B区、D-59グリッドで検出された。北西隅が攪乱を受ける。床面での検出で、平面形は方形をなし、南北5.0m、東西5.0mを測る。貯藏穴は、北壁西寄りにE K新、その南側にE K古が確認され、前者が後者を切る。E K新は平面形が梢円形で、南北68cm、東西42cmを測り、床面から深さ約4cmを測る。覆土上層は焼土層、下層は炭化層で、

当初、地床炉とも考えたが、下層に炭化層が堆積する事等から貯蔵穴の下部と判断した。E K 古は南北50cm、東西42cm、深さは8cmを測る。底面に黒褐色粘質土と壺片が出土した。貯蔵穴東側のE P 1 から壺や甕が倒壊した状態で出土し、E K や周囲床面から坩や坏が出土した。

**S T 14**竪穴住居跡（第10図） B区、D-59グリッドで検出された。S T 42・45を切り、南半は調査区外となる。規模は検出長で南北2.1m以上、東西3.9m以上を測る。南壁東隅に貯蔵穴が検出された。E Kは不整梢円形を呈し、南北70cm、東西110cm、床面からの深さは40cmを測る。覆土は床面から5cm程掘り下げた部分でS T 12同様に焼土が堆積し、下面から床面に炭化層が広がる。炭化層下に、炭化物や底面に甕を含む褐灰色シルトが堆積し、貯蔵穴が埋没する過程で炉等への再利用も窺える。主柱穴は未検出で、E K周辺に小規模のE P 1・2が検出され、特にE P 1は底面に炭化層を含む。遺物はE Kや周囲の床面から坩、坏、壺、甕片が出土する。また、S T 14と東側で重複するS T 42の北壁付近の床面にも不明瞭だが薄く炭化層が分布する。

**S T 21新一竪穴住居跡（第12図）** B区、A-61~62グリッドで検出された。S T 22・25を切り、床面で検出され、土取りにより中央部の削平が著しい。平面形は方形で南北5.5m、東西5.7mを測る。炉跡は、E L 2とした地床炉がほぼ床面中央で確認され、南北60cm、東西50cm、床面からの深さは約4cmを測る。焼土上面の凹部に薄い炭化層（南北4.2m×東西1.8m）や竪穴住居の覆土が堆積しプランを検出できた。炭化層はE L 2の周辺の西側でやや厚く2cm弱堆積し、徐々に薄くなる傾向が窺えた。E L 1とした焼土塊は北壁東寄りに連続して小範囲で確認され、当初地床炉の下部等と推測したが、厚く堆積する炭化層等からも焼失家屋等の可能性もある。

貯蔵穴はE K 3で、E L 2に北接し円形を呈し、直径30cm内外を測り、深さは40cmを測り、内部に炭化層が充満する。他にE P 4を検出し、E L 1周辺から対で壺や甕が完形で出土した。

また、S T 21新に切られるS T 22・25では床面中央～壁際で薄く細かい炭化層が検出された。S T 22は西壁際に平面梢円形の長軸約150cmを測り、S T 25は中央北西寄りに梢円形で長軸190cm以上を測る。更にS T 22は北側に炭化層が落ち込む小ピットが確認された。

**S T 23新一竪穴住居跡（第12図）** B区、A-61グリッドで検出される。S T 22に切れられ、S T 23古・S T 37を切る。西側は調査区外に延び床面直上の検出である。平面形は方形と推測され、南北4.9m以上、東西3.0m以上を測る。東壁南寄りで貯蔵穴が確認された。南北48cm、東西は調査区外のため不明で、平面形は円形であろう。床面から20cm弱掘り込み、覆土下位に炭化物を含む黒褐色粘質土層が堆積する。他に小規模なE P 1～3を検出し、E P 3で壺片が出土した。

**S T 27 b -竪穴住居跡（第12図）** B区、B-59~60グリッドで検出された。S T 27 aに東側を切られる。土取りのため南側一帯の床面が削平を受ける。平面形は方形で南北6.3m、東西6.0mを測る。貯蔵穴は中央部南寄りで確認され、底面に炭化層が薄く堆積する。平面形は梢円形で、南北72cm、東西52cmを測る。西側を主柱穴E P 2に切られる。主柱穴はE P 1～4と推定され、直径40～70cm、確認面からの深さは22～52cmを測る。S T 27 a貼床下から検出されたE P 4の覆土からほぼ完形の器台が出土した。また、S T 27 bを切るS T 27 aでは、北壁

中央部床面に平面形がほぼ円形の炭化層が薄く広がり、南北64cm以上、東西90cmを測る。

S T 241新一竪穴住居跡（第15図） A区、B-69グリッドで検出された。S T 241古・291を切る。上部削平のため床面で検出し、平面形は方形で南北5.1m、東西4.8mを測る。貯蔵穴は床面中央部東寄りで、南北70cm、東西86cm、床面からの深さは10cmを測る。底面縁に部分的に薄く炭化層が分布する。E Kの北側に北壁に沿って検出された周溝の一部と考えられたE Dも底面に部分的に炭化層が堆積する。また、S T 241新に切られるS T 291は床面中央から西壁にかけて、平面形が不整形の南北180cm、東西260cmの範囲で薄い炭化層が広がっている。

S T 282竪穴住居跡（第15図） A区、C-67グリッドで検出された。北側を旧水路に壞される。平面形は方形で、南北5.4m、東西6.0mを測る。E Lは北壁東寄りに地床炉が位置し、平面形が東西に細長い梢円形を呈し、南北30cm、東西90cm、床面からの焼土の厚さは2cmを測る。E L下は貼床土で、その下層に炭化層（南北2.6m、東西3.2m）が南側に広く薄く堆積する。炭化層の中には炭化材もあり焼失家屋等の可能性がある。E L下の貼床が焼失時の壁の崩落土とも考えられたが、平面や土層断面からは明確に判断できなかった。他に小規模のE Pを検出した。炭化層の周縁や床面から高壠の脚部が出土した。

S T 278竪穴住居跡（第16図） A区、A-72グリッドで検出された。S T 274・275を切っている。西側の大半が調査区外となる。規模は検出長で南北4.0m以上、東西1.9m以上を測り、方形と推測される。E Lは東壁南寄りに地床炉が検出された。炉跡は円形で南北32cm、東西30cm、床面から焼土の厚さは約2cmを測る。E P 1とした主柱穴は直径65cm前後で、確認面からの深さは50cmを測り、柱痕跡が土層断面で確認され、柱穴覆土から大型の砥石が出土した。E L南側の床面から壺が正位で出土し、土層から柱穴が埋没後に設置されたと判断できた。

3 河川跡 SG 34河川跡（第13図） C区北部A-E-44~49グリッドで、北西から南東に延びる河川跡である。幅約5.5m、検出面からの深さは76~190cmを測り、西から東へ急激に深くなる。覆土は下層が自然木や有機物を含む粘質土層で、下層を稿状に含む間層を挟み、上層は洪水等が要因の粗砂層が厚く堆積する。上層から土師器片、下層で木製品が出土した。

4 堀跡 C区中央に東西軸の堀跡が確認され、南側内部に掘立柱建物跡等が検出された。

S D 1 堀跡（第17図） C区中央部、A-E-41グリッドに位置する。東西に延び、調査区外の東側の延長線上に堀跡の名残りと推測される畠地の凹みから東西約140m以上と推定される。幅約2.5~3m、検出面からの深さ1.2m以上で断面形は台形状を呈する。覆土は下層が泥炭で、上層は地山粒を多く含む。覆土上層から株洲系陶器片や砥石が出土した。

堀跡の南側約10mの範囲は遺構が希薄で、C区東壁の土層からも土壘痕跡が認められた。堀跡と土壘の間にはS P 114~122の小ピットが検出され、土留め等の杭跡と推測された。

5 掘立柱建物跡・柱列跡 C区南半で小規模な建物や柱列が概ね堀跡と直交、並行して検出された。この他にもピット群が確認されたが積極的に建物とするまでには至らなかった。

S B 302掘立柱建物跡・S A 303柱列跡（第18図） C区南部、A-B-36~38グリッドで、1×5間の細長い南北棟の建物で東側に1間の張り出し部を持つ。梁行3.0m（約10尺）、桁行8.6m（約29尺）を測る。柱間距離は2.8~1.0mで、主軸は磁北とはほぼ同一である。柱穴の平面形は円形か梢円形を呈し、概ね径20~40cmを主とし、確認面からの深さは約16~40cmを測る。

柱穴の配置や重複等から当初  $1 \times 4$  間の東側に 1 間の張り出し部を持つ建物で、北側の S D 6 が雨落ち溝、並行する S A 303 柱列跡が目隠し塀等に相当すると推測された。その後北側に平行を 1 間拡張し、東側の張り出しも外側に建て替えたと判断された。S B 302 E P 184・S A 303 E P 165 から柱根が出土した。

S A 304・305・306 柱列跡（第19図） C 区南部、D-36~37グリッドで、上部削平が著しいが、S D 104 溝跡等と主軸がほぼ並行し、柱穴列が 3 列並ぶ。東側から S A 304・305・306 とした。調査区外に延びるが、3~4 間以上が確認され、長さは 4.2~5.6m 以上を測る。

6 溝跡 溝跡は十数条確認されたが、概ね堀跡と直交又は平行する。主な溝跡を記す。

S D 5 溝跡（第17図） C 区中央部、A-39~41グリッドで、直交する S D 1 堀跡に切られる。長さは 6.4m、溝幅は 70cm 前後である。堀跡に向かい深くなり、検出面からの深さは 44~68cm を測る。断面形は逆台形状で、覆土は堀跡と類似し、下層が泥炭層、上層は埋土様である。

S D 104 溝跡（第19図） C 区南部、C-34~37グリッドに位置する南北に延びる溝跡で、S D 7・S K 102 を切る。長さは検出長で 17m、溝幅は 54~78cm、検出面からの深さは 24~52cm を測り北側で急に浅くなる。覆土は下層が粘質土で、上層は埋土様である。底面で茶臼等が出土する。並行する同規模の S D 7 も北側で浅くなる傾向で、上層から漆器が出土した。

7 土坑・井戸跡 土坑跡や井戸跡は C-E 区で 17 基以上が確認され、上部が削平されるものが多く、規模の大きいものを一括する。C 区は土坑が東半に集中し、S D 7・104 等の溝跡との関連性が窺える。E 区は垂直な掘り方の井戸跡群が検出された。主なものを記す。

S E 89 井戸跡（第20図） C 区南半、C-39グリッドで、平面形は楕円形で長軸 156cm、短軸 118cm を測る。床面は平坦で、壁はほぼ垂直、確認面からの深さは 87cm 程を測る。覆土は粘質土である。東側に延びる砂礫を含む溝跡と重複し、規模等から素掘りの井戸跡と推測された。

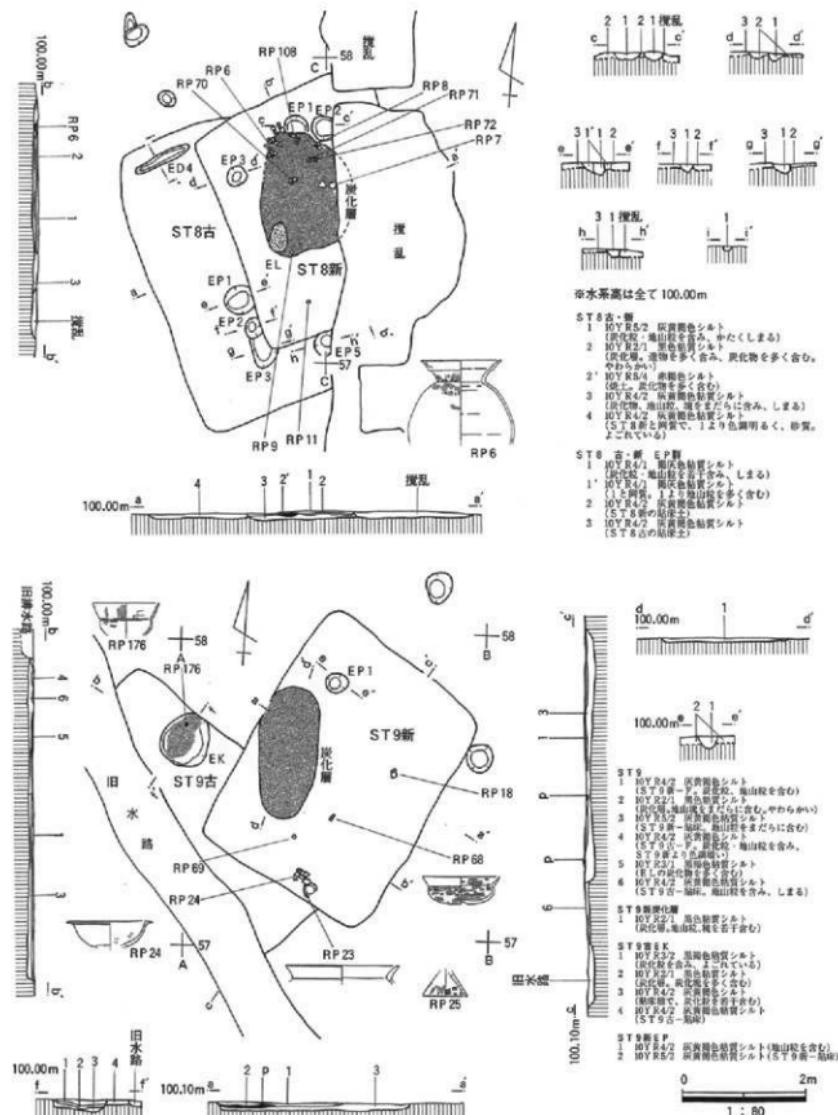
近接する S K 90 は隅丸方形の直径 1m 前後で、浅い埋土様の覆土より漆器椀や碟が出土した。

S K 91 土坑跡（第19図） C 区南半部、C-36グリッドに位置し、平面形は不整方形で長軸 254cm、短軸 144cm を測る。床面は凹凸があり壁は急斜する。確認面からの深さは約 42cm を測り、覆土下層は泥炭様、上層は埋土様である。上下層の間から青磁片や柄杓底板が出土する。

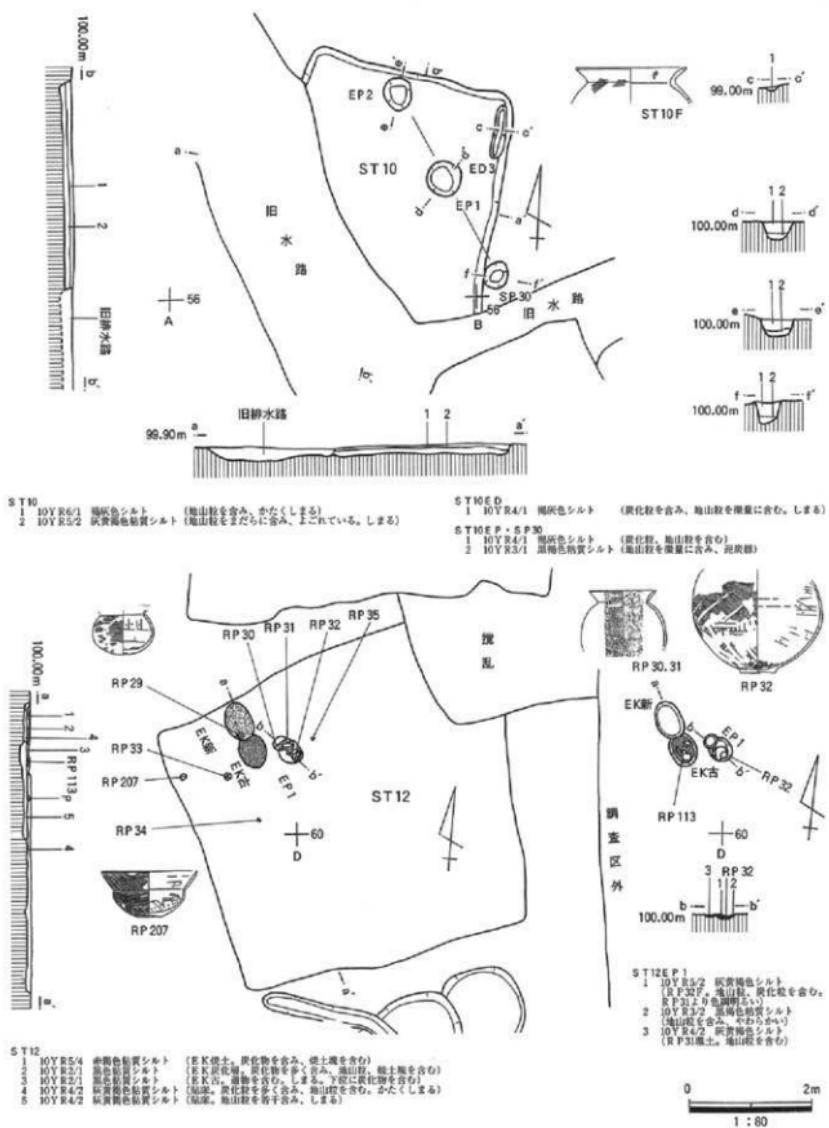
東接する S K 102 は平面形が不整長方形で、長軸 324cm、短軸 220cm を測る大形で、深さは 56cm を測る。覆土は S K 91 と同様で、砥石や古代の須恵器片が出土した。

S E 75 井戸跡（第21図） E 区中央部、B-3 グリッドで検出され、平面形は大形の円形で径が 140~162cm、確認面からの深さ 54cm を測る。底面は平坦で壁はほぼ垂直である。覆土は基本的には単層の粘質土で、下層よりかわらけや珠洲系陶器片、木製品等が出土した。近接する S K 76・81 等が同類で、規模や形状等から井戸跡群と推定された。S K 76 覆土中でかわらけ等が出土した。他に E 区では大形の円形や楕円形で掘り方が浅いもの（S K 2・78・85・86・94）と小形の円形で掘り方が垂直なもの（S K 82・97・210）等が検出された。

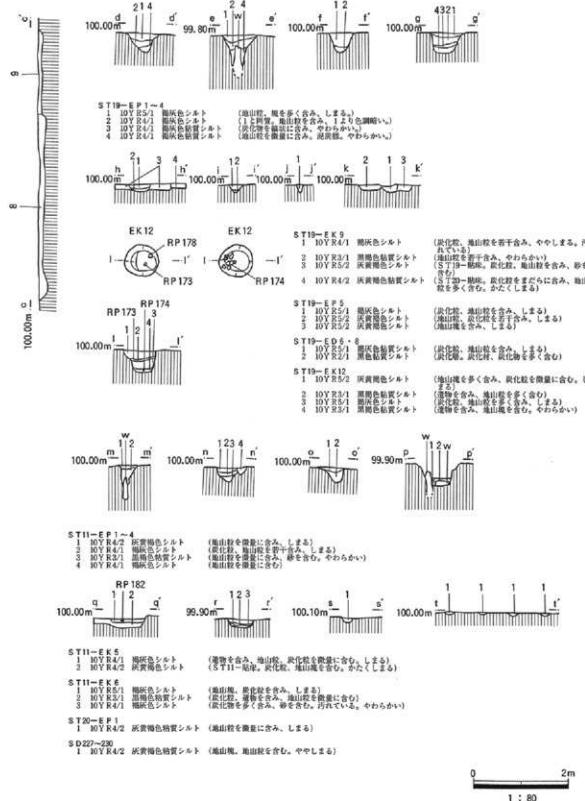
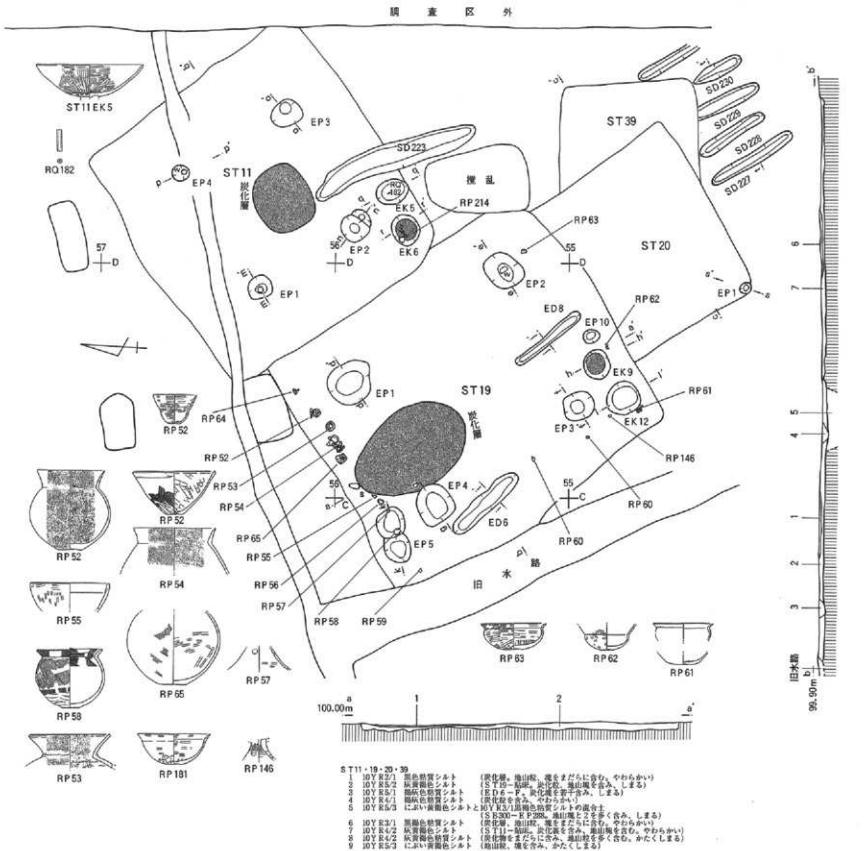
8 周溝跡 S D 193（第21図） D 区中央、C-9 グリッドで、方形状に廻り南面中央が途切れる周溝跡で、南北 5.0m、東西 5.4m を測り、主軸はほぼ磁北である。溝幅は約 45~110cm、検出面からの深さ 5~10cm で、緩やかな U 字状を呈する。底面から中世青磁が出土し、東南に塹跡が現存し、関連性も窺える。



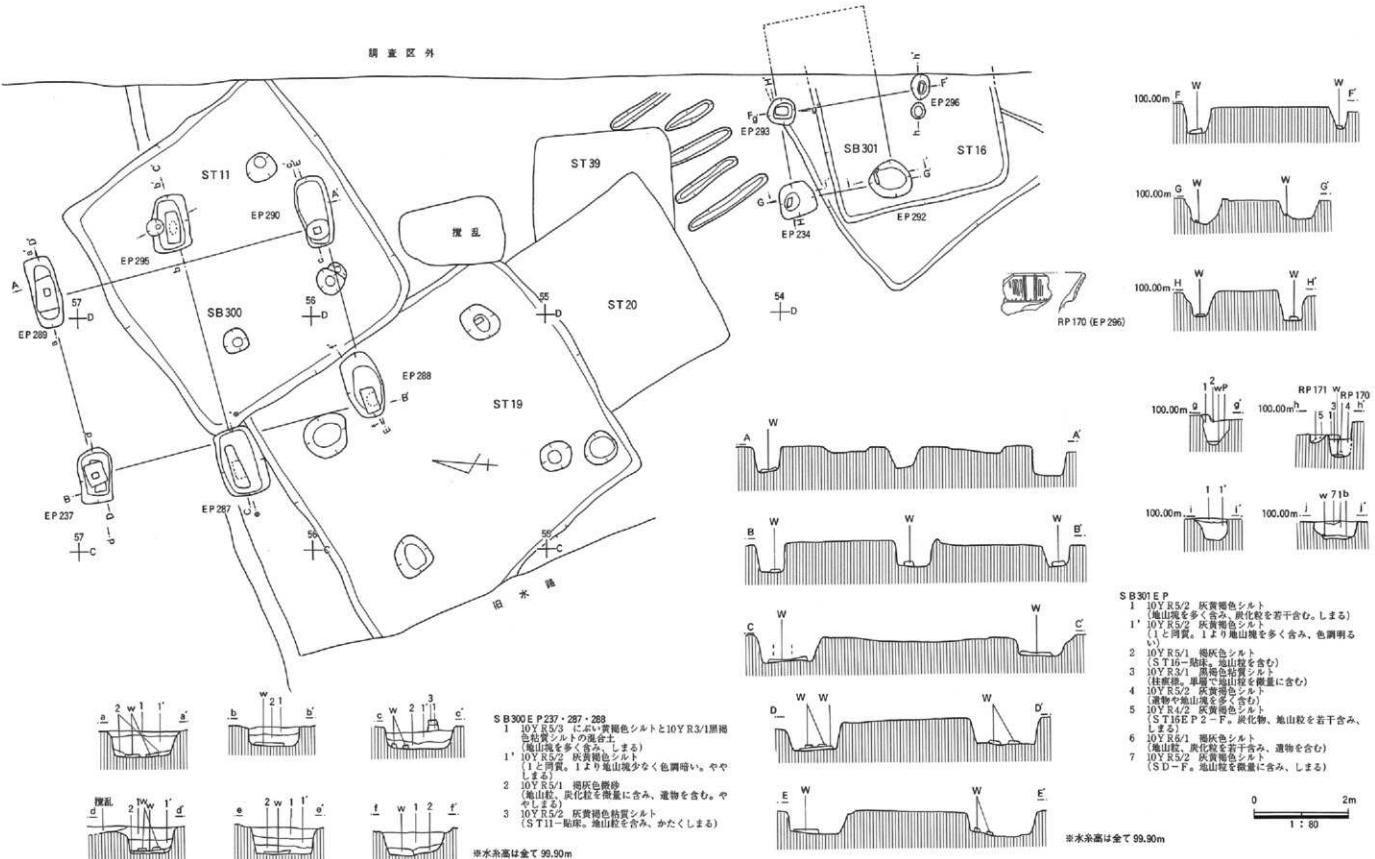
第6図 ST 8・9 竪穴住居跡



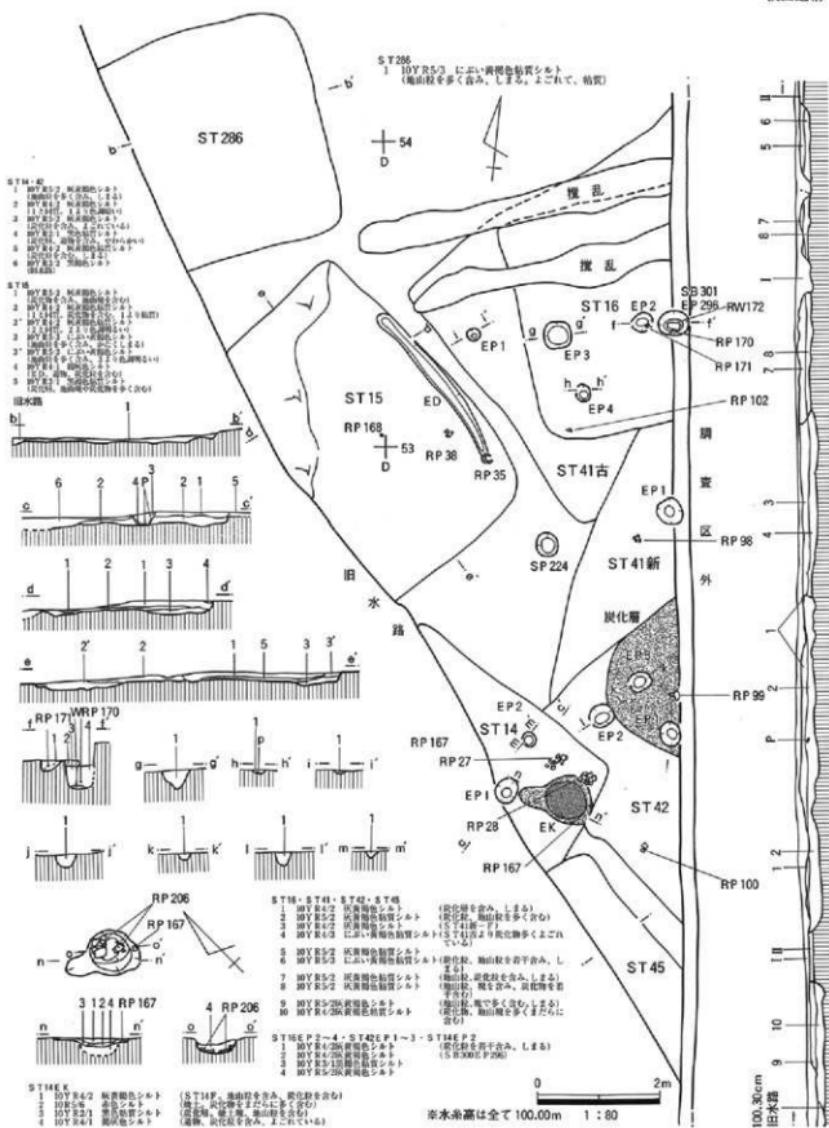
第7図 ST10・12竪穴住居跡



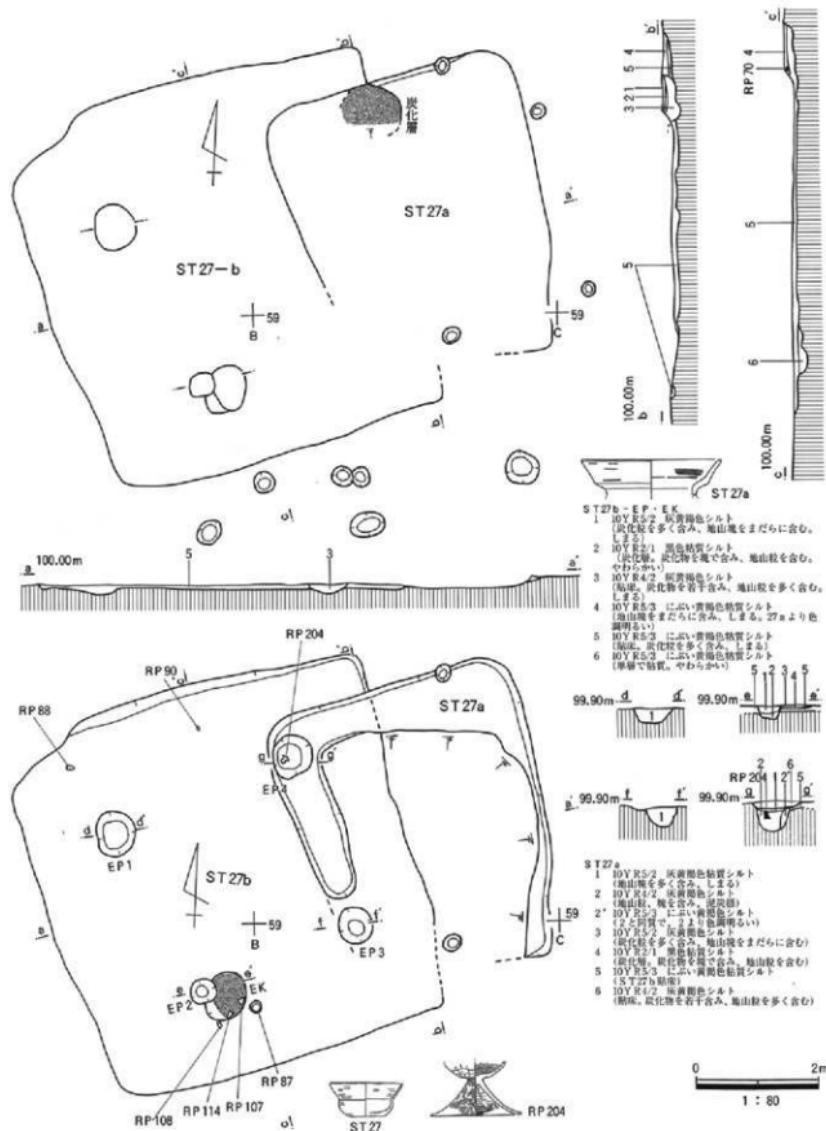
第8図 ST11・19・20・39竪穴住居跡



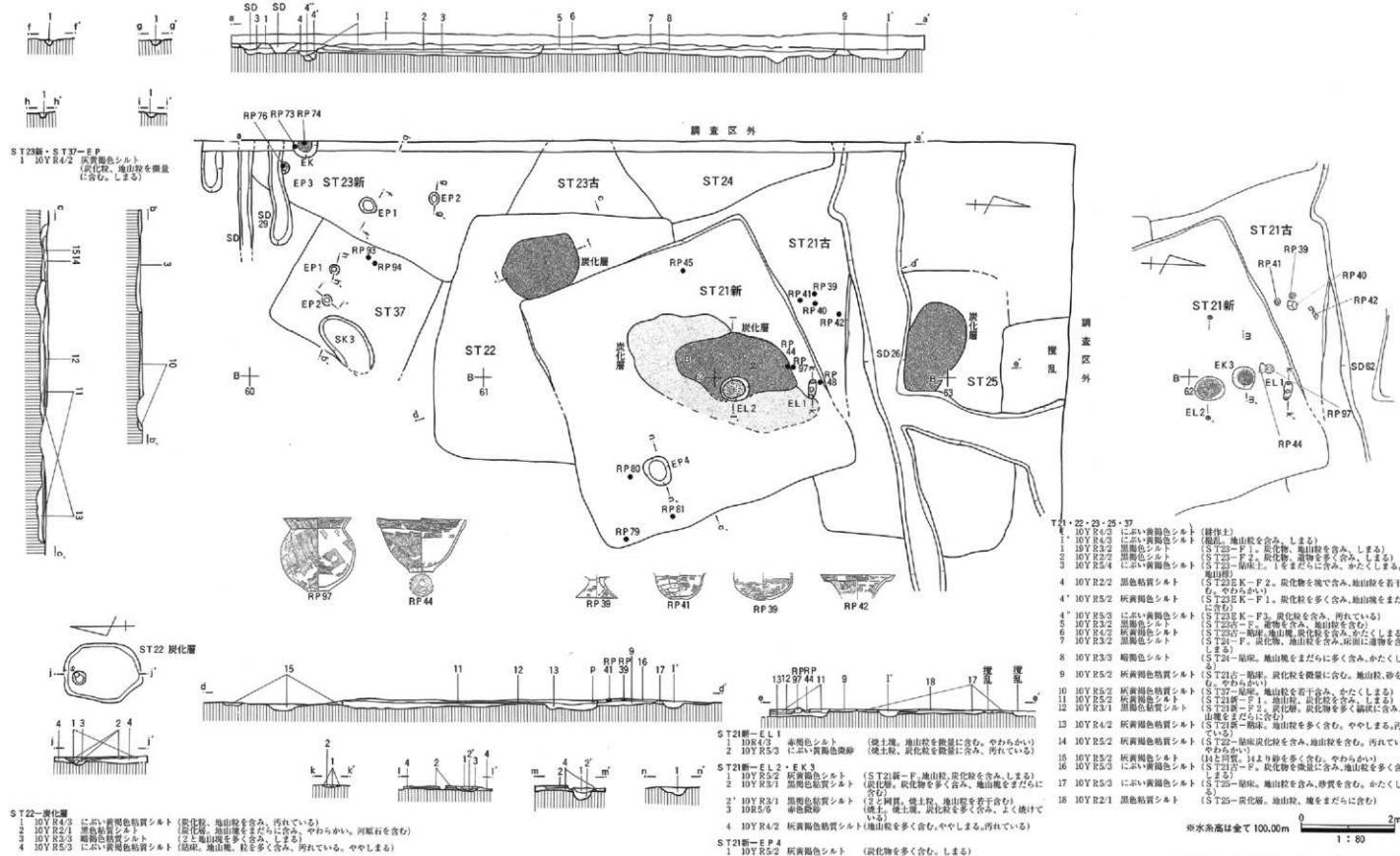
第9図 SB300・301棟持柱建物跡



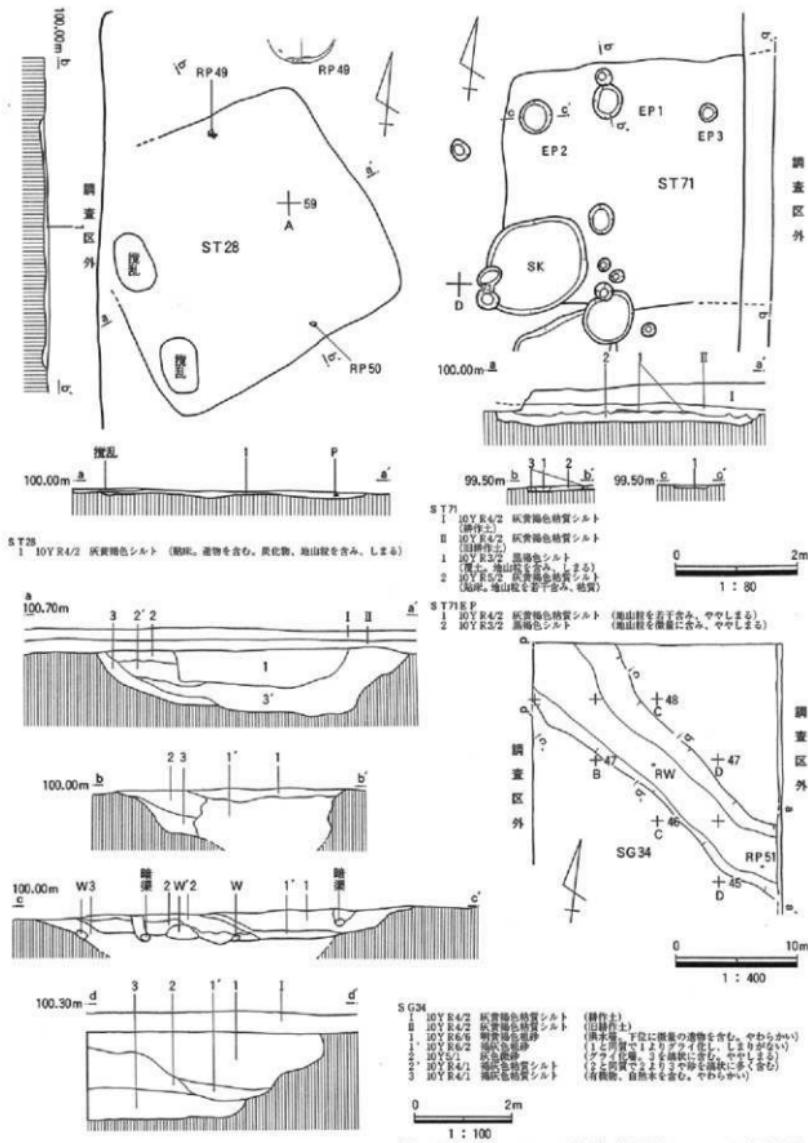
第10図 S T 14・15・16・41・42・286竪穴住居跡



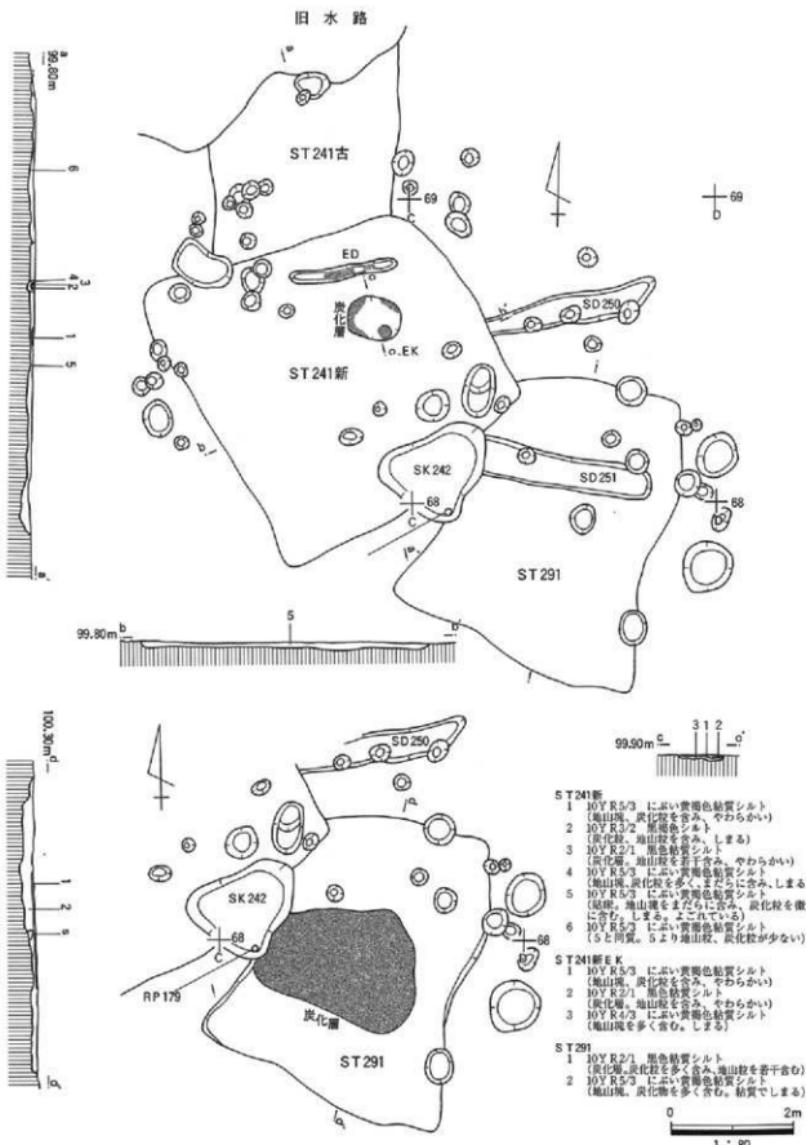
第11図 S T 27 a・b 竪穴住居跡



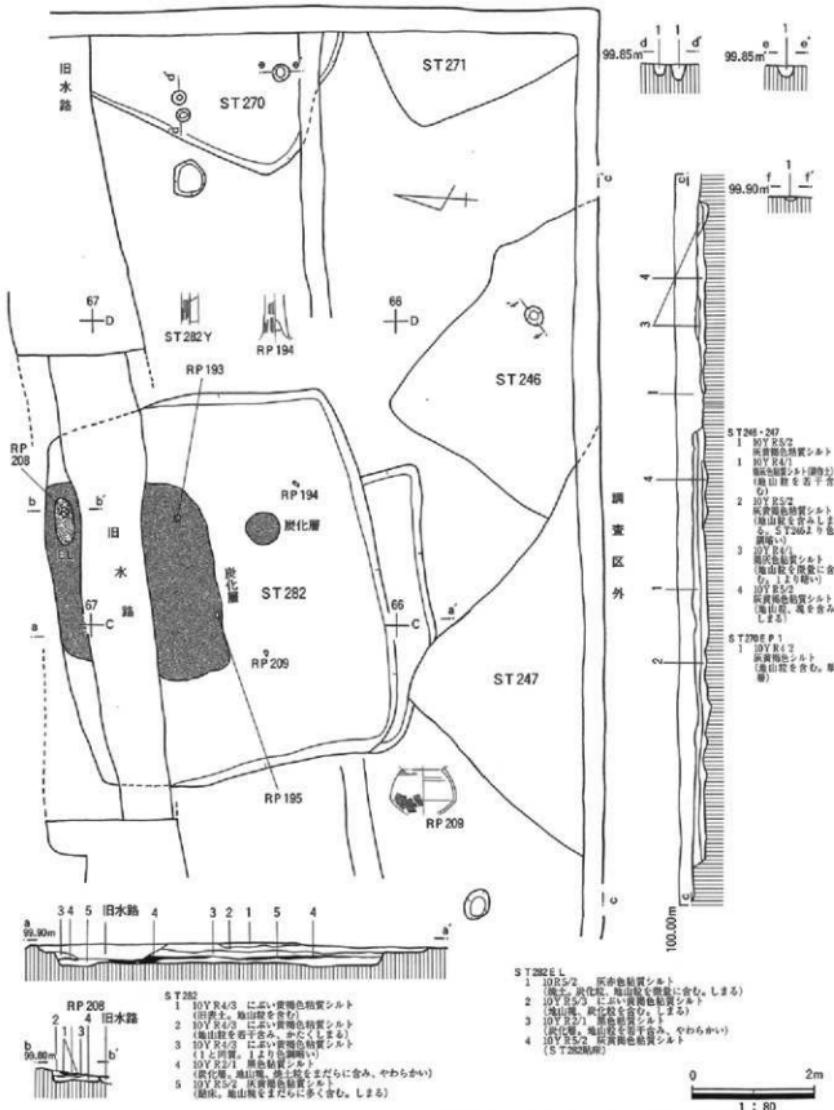
第12図 S T21~25・37竪穴住居跡



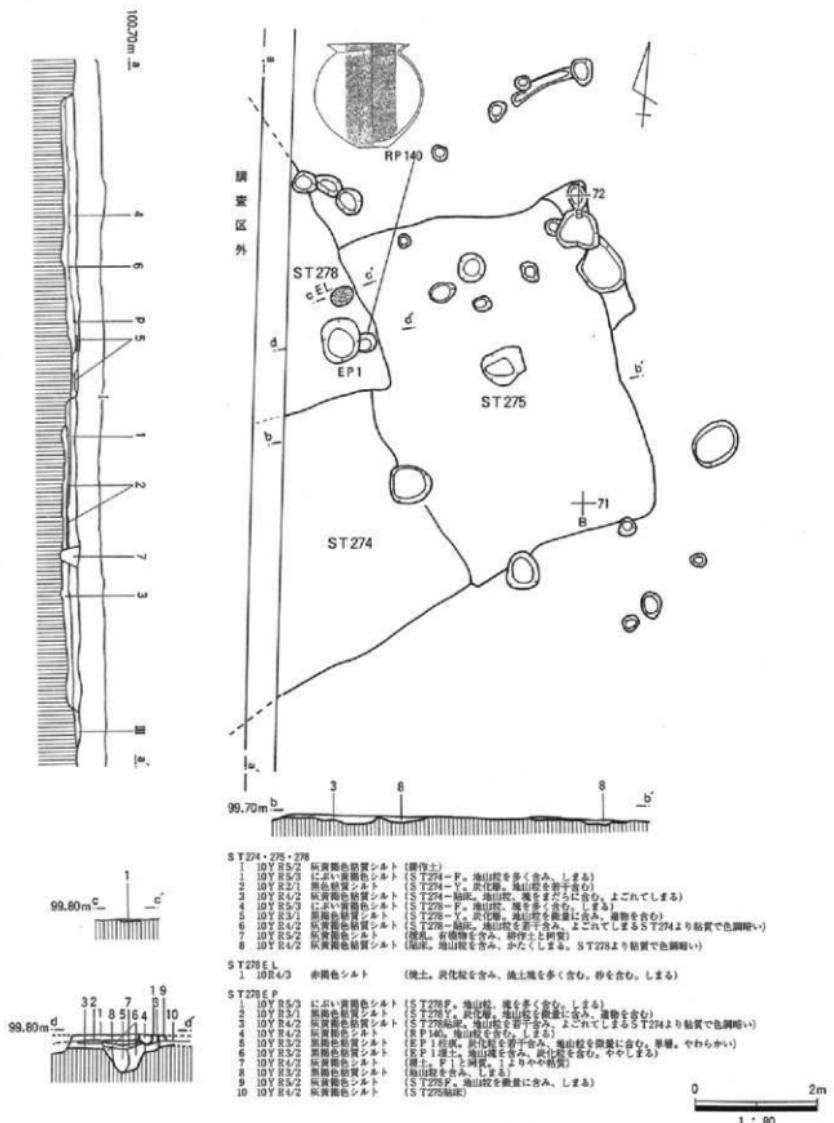
第13図 S T 28・71竪穴住居跡・S G 34河川跡



第14図 S T241・291竪穴住居跡



第15図 S T 246・247・270・271竪穴住居跡



第16図 S T 274・275・278堅穴住居跡

表1 積穴住居跡観察表(1)

S T番号	S T 8新	S T 8古	S T 9新	S T 9古	S T 10	S T 12
検出位置	B区C-57-58	B区C-57-58	B区B-57-58	B区A-58	B区B-56	B区D-60
重複関係	S T 8古→ S T 8新 東側に擾乱	S T 8古→ S T 8新 東側に擾乱	S T 9古→ S T 9新	S T 9古→ S T 9新 西側に旧水路	南西に旧水路	北京隅に擾乱
遺存状況	上部削平 はば床面検出	上部削平 一部床面検出	上部削平 一部床面検出	上部削平 一部床面検出	良好	上部削平 床面検出
平面形	長方形	方形	長方形	方形	長方形	不整方形
規模(cm)	南北380×東西240~	南北490×東西230~	南北430×東西320	南北480×東西160~	南北400~×東西350	南北520×東西530
主軸方向	N-27°-W	N-25°-W	N-27°-E	N-35°-E	N-7°-E	N-23°-W
覆土	灰黃褐色シルト		灰黃褐色シルト	灰黃褐色シルト	褐色シルト	
盤(確認面からの深さ)	未検出		未検出	未検出	急斜	
床	平坦 確認面から2cm	未検出	平坦 確認面から2cm	平坦 確認面から2cm	平坦 確認面から4cm	
貼床土	灰黃褐色 粘質シルト	灰黃褐色 粘質シルト	灰黃褐色 粘質シルト	灰黃褐色 粘質シルト	灰黃褐色 粘質シルト	灰黃褐色 粘質シルト
炉跡化層(cm): E L	中央部 E L(地床炉) 南北40×東西30×深さ1 中央部炭化層 南北60×東西100~× 深さ1		北壁中央部 炭化層 南北220× 東西100× 深さ1			
貯藏穴(cm): E K				東壁北隅 E K(底面:炭化層) 南北90× 東西80× 深さ20		北壁西隅 E K(底面:土器土:炭化層) 南北30×東西40×深さ5 E K古(底面:黒褐色土) 南北60×東西40× 深さ5
主柱穴・ 小ヒット (cm): E P	E P 1~3 南北30× 東西32× 深さ10~20	E P 1~5 南北36~45× 東西24~44× 深さ16	E P 1 南北30× 東西36× 深さ20			E P 1 (R P 31-32) 南北30× 東西30× 深さ4
周溝(cm): E D		E D 4 長さ96× 幅16× 深さ5			E D 長さ84× 幅16× 深さ3	
床面出土遺物	炭化層周辺の床面: R P 1-6-7- 12-13-178		床面: R P 18-19-23- 68	E K: R P 176	覆土: 土器壺	E K新: R P 28 E K古: R P 113 E P 1: R P 30- 31-E K周辺床面: R P 33-34- 35-20
備考	床面中央部に薄く炭化層や焼土分布。		北壁際に薄く炭化層分布。	北壁際にE K、 底面に炭化層を含む。	E P 1-2はS P 30と等間隔の 柱列跡と推定され る。	E K古→E K新 へ壁際に移動。 E K新は焼土層 から炉跡の可能性 有り。
挿図	第6図	第6図	第6図	第6図	第7図	第7図

表2 穴住居跡観察表(2)

S T番号	S T14	S T15	S T16	S T41古	S T41新	S T42
検出位置	B区D-52	B区D-53	B区D-53	B区D-53	B区D-53	B区D-52
重複関係	S T42→S T14 西側に旧水路	S T41古→ S T15 西側に旧水路	S T41・41新→ S T16 S B301→S T16	S T41古→ S T41新 東側、調査区外	S T41古→ S T41新 S T41新→S T14	S T41新→ S T42→S T14 東側、調査区外
遺存状況	上部削平 ほぼ床面検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出	上部削平 ほぼ床面検出
平面形	方形	方形	方形	方形	方形	方形
規模(cm)	南北210~× 東西390	南北500× 東西300~	南北350× 東西290~	南北180~× 東西480~	南北460~× 東西170~	南北320~× 東西280~
主軸方向	N-57°-W	N-37°-E	N-19°-W	N-33°-W	N-22°-W	N-43°-E
覆土	灰黄褐色シルト					
壁	未検出					
床(確認面からの深さ)	平坦	平坦		平坦	平坦	平坦
貼床土	灰黄褐色 粘質シルト	灰黄褐色 粘質シルト	灰黄褐色 粘質シルト	灰黄褐色 粘質シルト	灰黄褐色 粘質シルト	灰黄褐色 粘質シルト
炉 炭化層 (cm) : E L						北壁際 炭化層 南北220× 東西120× 深さ0.5
貯藏穴 (cm) : E K	南壁東隅 E K(覆土:焼土・ 炭化層) 南北64× 東西64× 深さ27					
主柱穴・ 小ピット (cm) : E P	E P 1 南北32× 東西40× 深さ22		E P 2~4 南北24~40× 東西20~40× 深さ4~26	E P 1 南北20× 東西20× 深さ3	E P 1 南北38× 東西42× 深さ8	E P 1~3 南北30~32 東西30~32 深さ12~22
周溝 (cm) : E D		E D 長さ290× 幅28× 深さ8				
床面 出土遺物	E K: R P 167- 206 E K周辺: R P 24・27	床面: R P 35	E P 2: R P 71 床面: R P 102		床面: R P 98	床面: R P 99
備考	E K焼土下に炭化層と甕(R P 206)が出土。 E Kの再利用による炉跡の可能性有り。		当初 S T16 E P 1は土層断面から S B301 E P 296に変更。			北壁際には薄く炭化層分布。
挿図	第10図	第10図	第10図	第10図	第10図	第10図

表3 竪穴住居跡観察表(3)

S T番号	S T45	S T286	S T27 a	S T27 b	S T28	S T71
検出位置	B区D-51	B区C-54	B区B-60	B区B-59	B区A-59	A区D-71
重複関係	S T41古→ S T15 西側に旧水路	西側に旧水路	S T27 b→ S T27 a	S T27 b→ S T27 a	西側が調査区外	東側が調査区外
遺存状況	上部削平 床面検出	上部削平 床面・貼床検出	上部削平 床面・貼床検出	上部削平 床面・貼床検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出
平面形	方形	方形	方形	方形	方形	方形
規模(cm)	南北390×東西80~	南北380×東西320~	南北500×東西400~	南北630×東西600	南北420×東西420	南北405×東西400~
主軸方向	N-32°-E	N-20°-W	N-24°-W	N-23°-W	N-38°-W	N-10°-E
覆土			灰黄褐色 粘質シルト			黒褐色シルト
壁			未検出			急斜
床(確認面からの深さ)	平坦		平坦 確認面から3cm	平坦	未検出	平坦 確認面から6cm
貼床土	灰黄褐色シルト	にぶい黄褐色 粘質シルト	灰黄褐色シルト	にぶい黄褐色 粘質シルト	灰黄褐色シルト	灰黄褐色 粘質シルト
炉跡炭化層(cm) : E L			北壁中央際 炭化層 南北64×東西90× 深さ1			
貯藏穴(cm) : E K				中央部 E K(底面:炭化層) 南北72×東西52× 深さ1		
主柱穴: 小ピット (cm) : E P				E P 1~4 (主柱穴) 南北40~70× 東西44~65× 深さ22~52		E P 1~2 南北32~56× 東西28~52× 深さ4~6
周溝(cm) : E D						
床面 出土遺物		床面: R P98	床面: R P99	E P : R P204 E K : R P87· 88·107·108	貼床: R P49-50	
備考			土取りにより、 床面削平。一部 貼床検出。 北壁際には薄く炭 化層分布。	同左。E KがE P 2に切られる。		
挿図	第10図	第10図	第11図	第11図	第13図	第13図

表4 深穴住居跡観察表(4)

S T番号	S T241新	S T241古	S T291	S T246	S T247	S T270
検出位置	A区B-69	A区B-70	A区C-68	A区C-66	A区B-66	A区D-67
重複関係	S T241古・S T29→S T241新 北側に旧水路	S T241古 →S T241新	S T291→ →S T241新	S T246→ S T247 南側に調査区外	S T246→ S T247 南側に調査区外	東側が調査区外
遺存状況	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出
平面形	方形	方形	不整形	方形	方形	方形
規模(cm)	南北510×東西480	南北280×東西300	南北380×東西320~	南北400~×東西460~	南北370~×東西350~	南北350~×東西220~
主軸方向	N-23°-W	N-2°-E	N-20°-W	N-42°-E	N-45°-W	N-28°-E
覆土						
壁						
床(確認面からの深さ)	平坦		平坦	平坦	平坦	平坦
貼床土	にぶい黄褐色 粘質シルト	にぶい黄褐色 粘質シルト	にぶい黄褐色 粘質シルト	褐色 粘質シルト	褐色 粘質シルト	褐色 粘質シルト
炉灰化層(cm) : E L			北壁中央部隣 炭化層 南北180× 東西260× 深さ1			
貯藏穴(cm) : E K	中央部北東寄り E K(底面:炭化層) 南北70× 東西86× 深さ12					
主柱穴・小ビット(cm) : E P				E P 1 南北25× 東西26× 深さ12		E P 1~3 南北20~26× 東西20~28× 深さ20~24
周溝(cm) : E D	E D(底面:炭化層) 長さ176× 幅22× 深さ14					
床面出土遺物						
備考	E K・E Dの底面に部分的に炭化層有り。		北壁際に薄い炭化層分布。			
挿図	第14図	第14図	第14図	第15図	第15図	第15図

表5 壁穴住居跡観察表(5)

S T番号	S T271	S T282	S T278	S T274	S T275	S T21新
検出位置	A区D-66	A区C-67	A区A-72	A区A-71	A区A-72	B区B-62
重複関係	東側が調査区	S T247→S T282 中央部に旧水路	S T274・275 →S T278	S T275→S T 274→S T278 西側、調査区外	S T275→S T 274→S T278	S T21古→22・ 25→S T21新
遺存状況	上部削平 床面検出	良好	上部削平 ほぼ床面検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面・貼床検出
平面形	方形	長方形	方形	方形	方形	方形
規模(cm)	南北290×東西190~	南北536×東西600	南北400×東西190~	南北380×東西360~	南北570×東西350~	南北550×東西570
主軸方向	N-20°-W	N-8°-E	N-20°-W	N-24°-W	N-16°-W	N-18°-E
覆土		にぶい黄褐色 粘質シルト	にぶい黄褐色 粘質シルト	にぶい黄褐色 シルト		灰黄褐色シルト
壁		急傾。南側にテス状の張り出し	ほぼ垂直	急斜		ほぼ垂直
床(確認面からの深さ)	平坦	平坦 確認面から24cm	平坦 確認面から12cm	平坦	平坦	平坦 確認面から4cm
貼床土	褐灰色 粘質シルト	灰青褐色 粘質シルト	にぶい黄褐色 粘質シルト	灰黄褐色 粘質シルト	灰黄褐色 粘質シルト	灰黄褐色 粘質シルト
炉跡炭化層(cm) : E L	北壁東寄り E L (地床炉) 南北30×東西90×深さ3	東壁南寄り E L (地床炉) 南北32× 東西30× 深さ2				中央部北寄り E L 2 (地床炉) 南北60× 東西50× 深さ10
貯藏穴(cm) : E K						中央部北寄り E K 3 (覆土:炭化層) 南北48× 東西48× 深さ24
柱穴・ 小ピット (cm) : E P			E P 1 (主柱穴) 南北76× 東西62× 深さ50			
周溝(cm) : E D						E P 4 南北52× 東西60× 深さ16
床面出土遺物		E L : R P 208 床面: R P 193- 194・209	E L 周辺: R P 140			E L 周辺: R P 44・45・48 床面: R P 78- 79・80
備考		炭化材等から焼失家屋の可能性有り。 E Lも焼失の際の焼土の可能性有り。	E P 1 埋没後、 R P 140正位設置。			E L 1は焼土塊で、 焼失家屋の可能性有り。 E L 2周辺に南北440×東西190cmで炭化層分布。 E K 3に炭化層充満。
説明	第15図	第15図	第16図	第16図	第16図	第12図

表6 穴住居跡観察表(6)

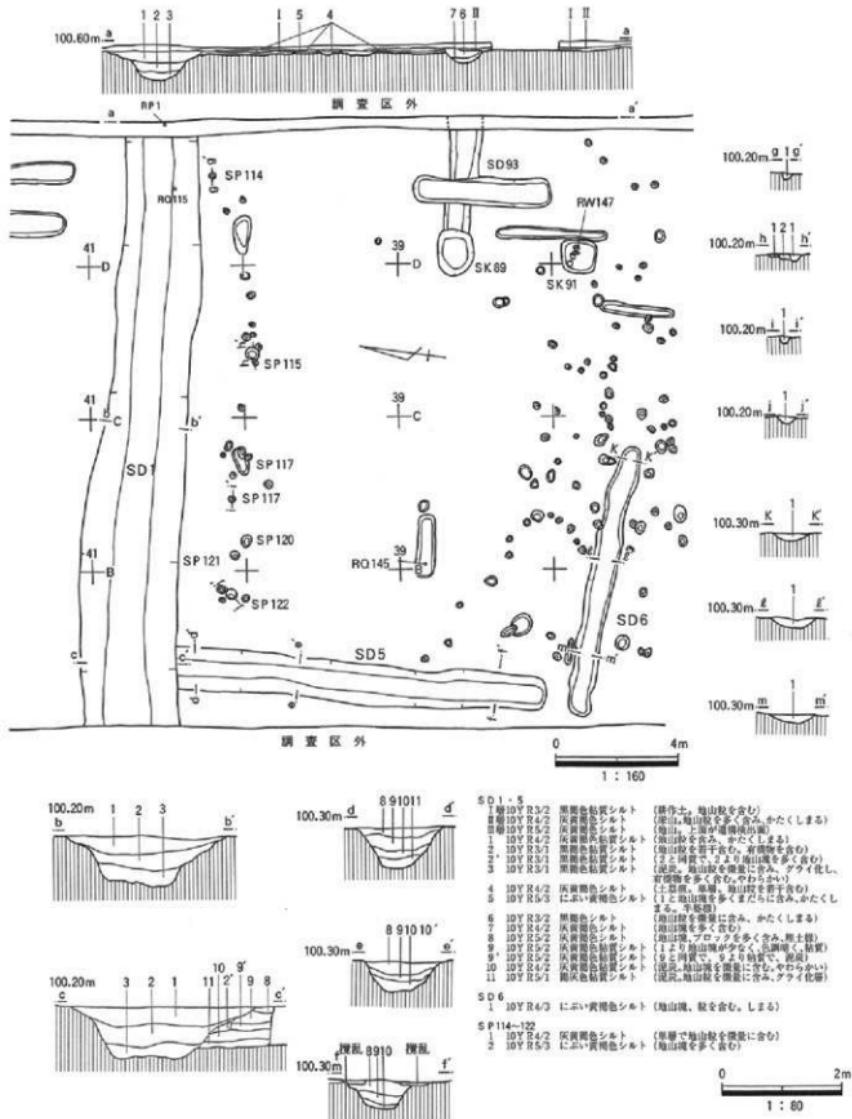
S T番号	S T21古	S T22	S T23新	S T23古	S T24	S T25
検出位置	B区A-63	B区A~B-61	B区A-61	B区A-62	B区A-62	B区B-63
重複関係	S T21古→S T22・24・25→S T21新	S T23古・23 新・24→S T22 →S T21新	S T23古・37→S T23新→S T24 西側、調査区外	S T23古・24・ S T23新・24・ 西側、調査区外	S T23古・21古 →S T24 西側、調査区外	S T25→ S T21古・新 中央部にS D62
遺存状況	上部削平 床面検出	上部削平 床面・貼床検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面・貼床検出	上部削平 床面検出
平面形	方形	方形	方形	不明	方形	長方形
規模(cm)	南北370~× 東西480~	南北450× 東西530	南北490~× 東西300~	南北330~× 東西160~	南北380~× 東西190~	南北430× 東西580
主軸方向	N-0°	N-4°-E	N-30°-W	不明	N-18°-W	N-4°-W
覆土	にぶい黄褐色 シルト	にぶい黄褐色 シルト	黒褐色シルト	黒褐色シルト	黒褐色シルト	
壁	急斜		急斜	未検出	ほぼ垂直	
床(確認面からの深さ)	平坦 確認面から4cm	平坦	平坦 確認面から14cm	平坦 確認面から12cm	平坦 確認面から12cm	平坦
貼床土	灰黄褐色 粘質シルト	にぶい黄褐色 粘質シルト	にぶい黄褐色 粘質シルト	灰黄褐色 粘質シルト	暗褐色シルト	にぶい黄褐色 粘質シルト
炉炭化層(cm) : E L		中央部南西寄り 炭化層 南北160× 東西120× 深さ2				中央部西寄り 炭化層 南北126~× 東西190~× 深さ1
貯藏穴(cm) : E K			中央部南東寄り E K(覆土:黒褐色土) 東西16× 南北48× 深さ24			
主柱穴・ 小柱穴(cm) : E P			E P 1~3 南北20~40× 東西30~40×			
周溝(cm) : E D						
床面出土遺物	床面: R P 39・ 40・41・42		E K周辺: R P 73・76			
備考	床面一括土器出土。	西壁際~中央に薄く炭化層が分布。	E P 3は貼床を切るが、S T23古との重複は不明。			床面中央西寄りに薄く炭化層が分布。
挿図	第12図	第12図	第12図	第12図	第12図	第12図

表7 壁穴住居跡観察表(7)

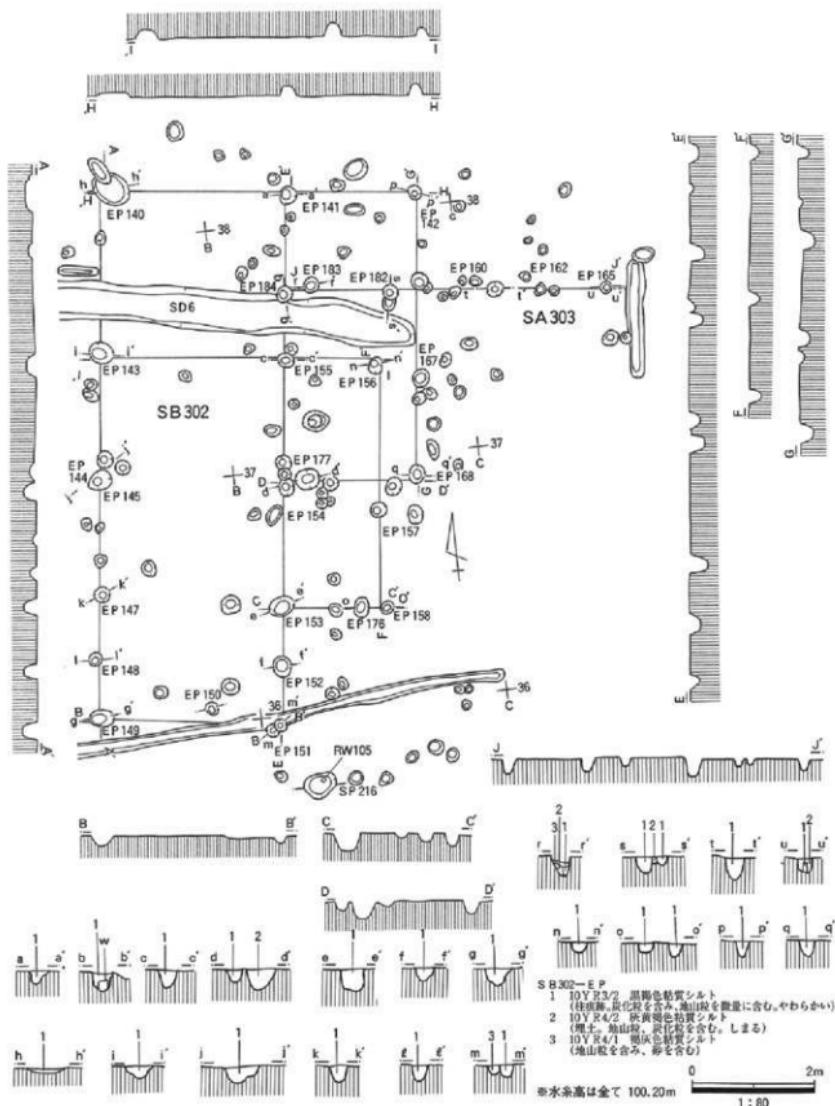
S T番号	S T37	S T20	S T39	S T11	S T19
検出位置	B区A-61	B区D-55	B区D-55	B区D-56	B区C-55~56
重複関係	S T23新→ S T37 東側にSK3	S T39→S T20 →S T19	S T39→S T20	S T19・S B300→S T11 中央に旧水路	S T20→S T19→S T11 西側に旧水路
遺存状況	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出	上部削平 床面検出
平面形	方形	長方形	方形	長方形	方形
規模(cm)	南北300×東西250~	南北330×東西400	南北450×東西530	南北560×東西600	南北670×東西580
主軸方向	N-36°-W	N-31°-W	N-1°-W	N-30°-W	N-31°-W
覆土					
壁					
床(確認 面からの 深さ)	平坦	平坦	平坦	平坦	平坦
貼床土	灰質褐色 粘質シルト	灰質褐色 粘質シルト	にぶい灰褐色 粘質シルト	灰質褐色 粘質シルト	灰質褐色 粘質シルト
炉跡炭化層 (cm) : E L				中央 炭化層 南北130× 東西146× 深さ1	中央北寄り 炭化層 南北260× 東西170× 深さ1
貯藏穴 (cm) : E K				南壁西隅 E K 6(底面:黒褐色土) 南北56×東西64×深さ16	南壁西隅 E K 9(底面:黒褐色土) 南北70×東西66×深さ16
				南壁西隅 E K 5 南北62×東西50×深さ8	南壁西隅 E K 12 南北100×東西70×深さ48
主柱穴・ 小ピット (cm) : E P	E P 1~2 南北20× 東西20~22× 深さ8	E P 1 南北24× 東西24× 深さ6	E P 1~2 南北20× 東西20~22× 深さ8	E P 1~4(主柱穴) 南北30~80× 東西40~70× 深さ32~76	E P 1~4(主柱穴) 南北90× 東西76~100× 深さ42~84
周溝 (cm) : E D					E D 6(底面:炭化層) 南北184×東西48×深さ16
					E D 8(開仕切り溝) 南北174×東西30×深さ16
床面 出土遺物	床面: R P 93-94			E K 5: R Q 182 E K 6: R P 214 E P 1~4: 柱根出土	北壁床面: R P 54-52-53- 65-55-56-57-58-59 床面: R P 60-66-146-61- 62-63 E K 12: R P 173-174 E P 2: 柱根出土
備考				E P 4がS B 300 E P 295を 切る。 中央部に薄く炭化層が分布。 南壁西隅にE K 5~6並ぶ。	E D 8は壁に直交し、開仕 切り等を推定。 北壁際→中央部に薄く炭化 層分布。 E D 6の底面に炭化材出土。 南壁西隅にE K 9~12並ぶ。
挿図	第12図	第8図	第8図	第8図	第8図

表8 C・E区主要土坑・井戸跡観察表

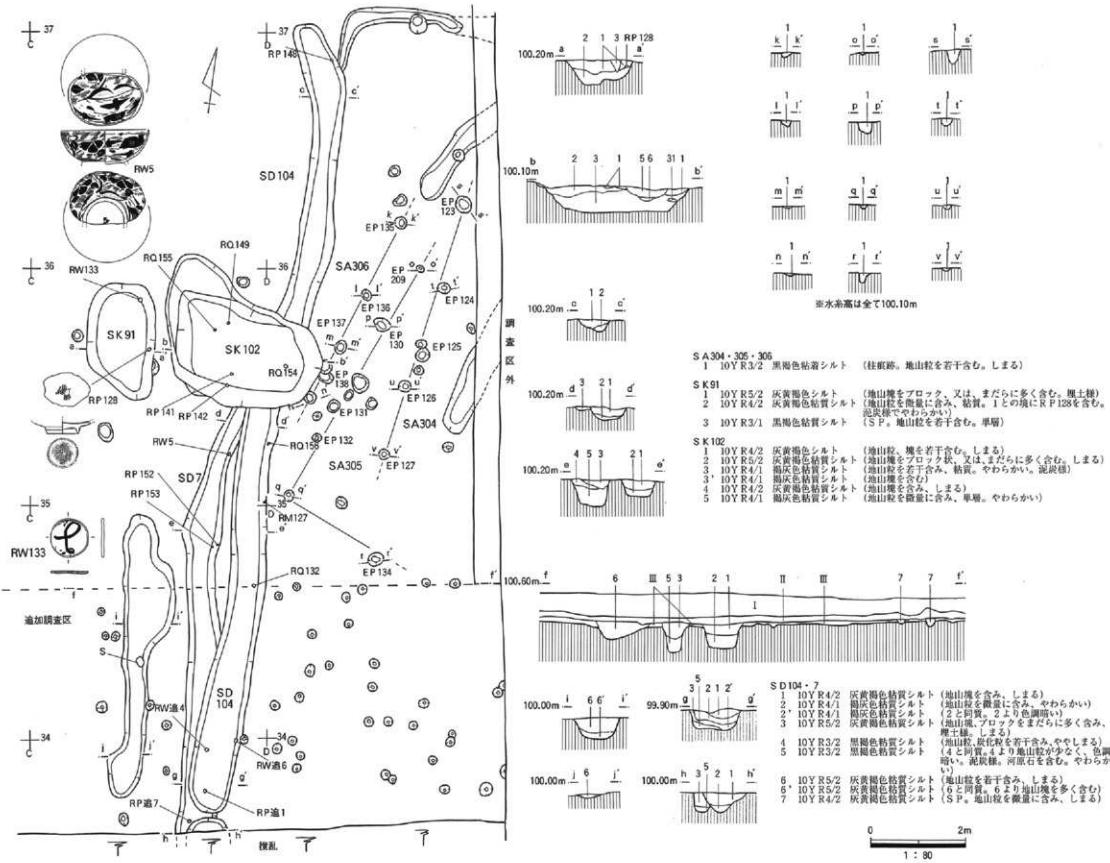
遺構No.	検出位置	平面形	壁	規模(cm)	深さ	覆土	出土遺物
S E89	C区C-39	梢円形	急斜	156×118	87	褐灰色 粘着シルト	
S K90	C区C-38	隅丸方形	急斜	138×110	16	黒褐色 粘着シルト	R P147
S K91	C区C-36	不整方形	急斜	254×144	42	灰黄褐色 シルト	R P128・R W133
S K102	C区D-36	不整方形	急斜	324×220	56	灰黄褐色 粘着シルト	R P141・142・R Q149・154・155
S K216	C区B-36	円形	急斜	68×52	5	黒褐色 粘着シルト	R W165
S K2	E区A-2	梢円形	急斜	320×180	31	黒褐色 シルト	R P1・2
S K4	E区C-4	円形	急斜	72×90	27	黒褐色 シルト	
S E75	E区B-3	円形	垂直	216×160	54	灰黄褐色 粘着シルト	R P164・198
S E76	E区B-4	梢円形	垂直	122×100	51	黒褐色 シルト	R P160・161
S K78	E区B-3	梢円形	垂直	216×132	17	灰黄褐色 粘着シルト	
S E81	E区B-2	梢円形	垂直	180×140	44	黒褐色 シルト	
S K82	E区B-1	円形	垂直	80×90	47	黒褐色 シルト	
S K85	E区B-2	梢円形	急斜	186×90	17	黒褐色 シルト	
S K86	E区A-3	梢円形	急斜	140×120	27	黒褐色 シルト	
S K94	E区B-2	梢円形	急斜	184×142	10	黒褐色 シルト	
S K210	E区A-4	円形	垂直	60×60	28	黒褐色 粘着シルト	
S K97	E区B-4	円形	垂直	104×88	18	黒褐色 粘着シルト	R P134・135



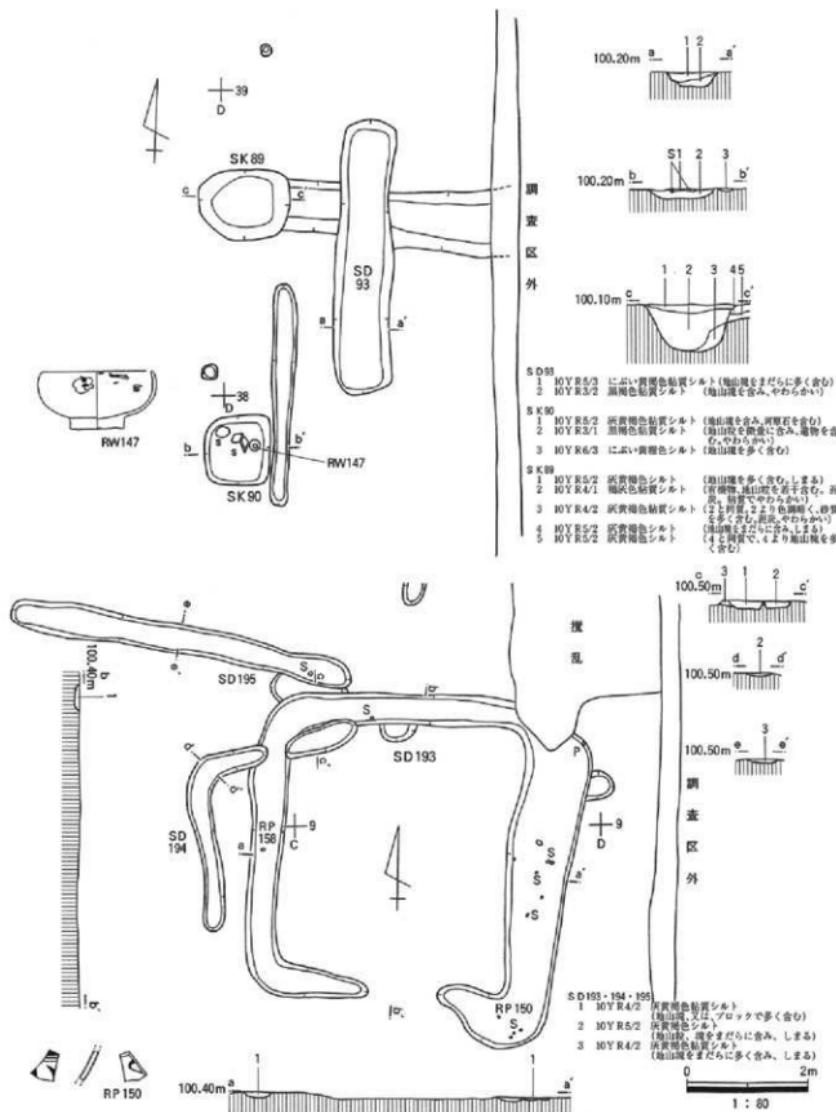
第17図 SD1 堀跡・SD5・6溝跡・SP114~122ピット群



第18図 S B 302掘立柱建物跡・S A 303柱穴列

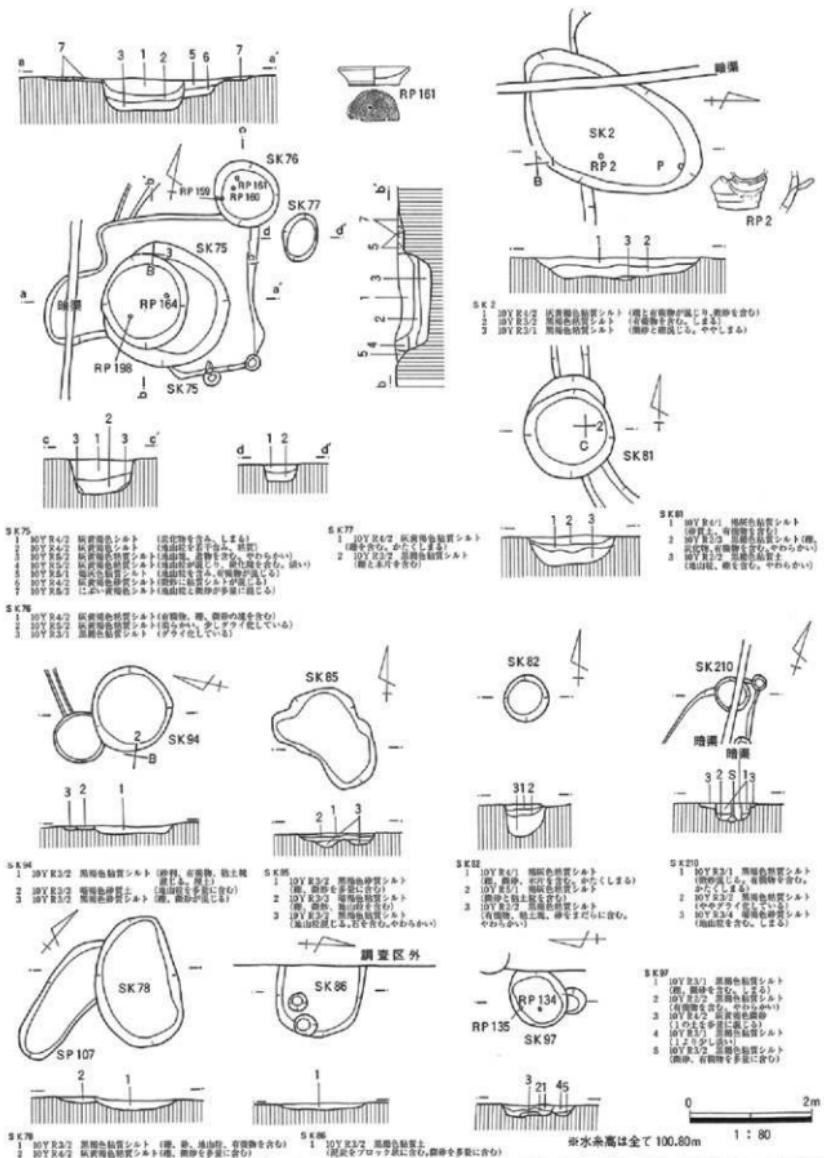


第19図 SD 7・104区画溝跡・SK 91・102土坑跡



第20図 S K 89井戸跡・90土坑跡・S D 193周溝跡

検出遺構



第21図 S K 2 • 75 • 78 • 81 • 82 • 85 • 86 • 94 • 97 • 210井戸・土坑跡

## V 出土遺物

本遺跡から出土した遺物は整理箱にして約52箱である。古墳時代前期を主に土師器等の土器、管玉や砥石の石製品、礎板等の木製品が出土し、中世がかわらけや株洲系陶器、青磁等の中世陶磁器、茶白や砥石等の石製品、柄杓や漆器等の木製品が若干出土した。他に古代の須恵器も散見された。以下に時代毎に分け、遺構毎にまとまりのある遺物群について概述する。

1 古墳時代の遺物 A・B区の竪穴住居跡を主に出土したが、床面の削平等が著しく全体に一括遺物は少ない。以下に竪穴住居跡を主に床面の一括遺物等があるものを遺構毎に列記する。

S T 8 竪穴住居跡（第22図） 床面より土師器の壺、甕類を中心に出土した。壺（22-1）は屈曲の弱い二重口縁様で、体部は球形を呈する中型品である。内外面とも丁寧なミガキを施し赤彩される。甕（22-2）は口縁部のみの出土で、内外面にハケメ調整を施す。時期的には22-1の弱体化した口縁部形態から前期後半と推測される。

S T 9 新一竪穴住居跡（第22図） 床面から土師器壺・鉢・甕等が出土した。壺（22-7）は「く」の字状に開く口縁部で、やや扁平な体部を呈し、平底風の窪み底である。内外面に丁寧なミガキを施し赤彩する。鉢（22-3）は口唇部を横に強く引き出し、下半部を欠損する。甕（22-6）は「く」の字口縁部で、22-4は甕の高台と推測される。時期は22-7が後述するS T 19の鉢形の壺類が扁平化する後出の段階の形態と判断され、前期中～後葉でも古い段階であろう。また、S T 9新に切られるS T 9古-E Kからは丸底風の壺（22-8）片が出土した。

S T 12 竪穴住居跡（第22図） E Kとその周辺の床面から土師器の壺、壺、甕等が出土した。床面の壺（22-13）は「く」の字状に開く口縁部で、体部がやや肩が張る器形である。口縁部は大きく直線的に外傾し、外面はミガキよりやや幅広の木口等で丁寧な調整を施し、内面はケズリやミガキを施す。E K新の壺（22-12）はやや胴張りの器形で、外面はミガキ、内面は段状のケズリを施す。E P 1の壺（22-15）・甕（22-16）は、中～大型で両者体部は球形を呈する。22-15は外面をハケメ後、幅広のミガキを散発的に施す。大振りな22-13が「く」の字口縁形態の壺類の古いタイプと推測され、壺の体部形態等からも前期中～後葉の古い段階と考えられる。

S T 14 竪穴住居跡（第23図） E Kを主に土師器の壺、壺、壺、甕が出土した。壺（23-1・2・7）は3点出土し、23-1は小型で体部扁平な壺で赤彩する。23-2は体部から口縁部にかけて下端に弱い括れを有し、扁平な体部を呈する。口縁～頸部は内外面ハケメの後、口縁部上半を横ナデし、外面体部下端はケズリ調整する。23-7も口縁～頸部外面は同様な調整を施し、体部はミガキを施す。壺（23-3）は口縁部が段を有しながらやや短く外反し、体部胴張りのやや扁平する器形である。調整は口縁部が横ナデとハケメ、体部上半はミガキを施す。

壺・甕類は口縁部が複合口縁（23-5）や「く」の字口縁（23-4）で、体部は球形（23-5・6）を呈する中～大型品で、内外面ハケメを施す。甕（23-8）は鉢状で、底部は単孔、内外面ハケメを施す。時期は23-2の下端括れの弱体化と粗雑な調整、小型で扁平な壺形態等から前期後葉と推測される。また、S T 14に切られるS T 41床面からやや大振りの高壺（24-1）壺部が出土し、近接するS T 16 E P 2からも緩やかな椀状の高壺（24-4）壺部が出土し

た。両者はラッパ状か棒状の脚部と推測され、前期中～後葉頃と推測され、大振りなものが新相であろう。

**S T19堅穴住居跡（第25図）** 主に北側の壁際から床面にかけて一括して土器群が出土した。土師器の壙、器台、壺、鉢、壺、甕が出土した。壙は小型（25-1）で、内外面ミガキを施し赤彩される。器台（25-6・7）は脚部に円孔が穿たれ、脚部が「ハ」の字状に短く開く器形である。壺（25-3・4・5・8）は、頸部の屈曲が緩やかでやや深身の鉢状のもの（25-8）、口縁部が短く外反する形態で、体部が扁平でやや肩で張るもの（25-3・5）がある。調整は両者とも内外面にミガキ、外面体部下端～底部にヘラケズリを施す。他に「く」の字状に開く口縁部形態のもの（25-4）があり、外面はミガキ調整を主とするようである。鉢（25-2）は口縁部内面が肥厚し緩やかな椀状の器形で、外面ミガキ調整する。

壺（25-10～13）は体部が球形のものが多く、長く外反・外傾する口縁部（25-10・12）や頸部に帯状の貼り付け（25-13）をもつものがある。甕（25-14）は「く」の字口縁で体部球形である。壺・甕類は全体に小～中型品が多い。甕（25-19）は鉢形の複合口縁で、底部に単孔を穿つ。外面下半にハケメ後、ミガキを施し、内面ケズリを施す。時期的には丸底の壙や器台脚部の形態等から前期前～中葉頃と推定される。また、S T19を切るS T11 E K 5からは大振りの高壺（22-10）の壺部や、直徑約1cmの碧玉製の管玉（22-11）が出土した。

**S T21古～堅穴住居跡（第26図）** 床面にまとまって土師器の壺、器台、壺等が出土した。壺（26-1～3）は、口縁部が「く」の字状に開くものや短く外傾する形態と推測され、小型で深身のもの（26-2・3）と中型（26-1）がある。調整は外面ミガキを主とするが、26-3の体部外面にヘラケズリも施す。器台（26-4）は「ハ」の字状に開く短い脚部形態で、円孔を穿つ。外面にミガキを施す。壺（26-5）は二重口縁状に強く外反する形態である。器台脚部の形態や、深身の26-2等の壺形態や調整から前期中～後葉でもやや古い段階に比定されよう。

また、S T21古を切るS T21新-E L周辺の床面から甕と甕が1対で出土した。甕（26-8）は口縁部が「く」の字口縁の体部球形の中型品である。甕（26-7）は鉢形で、口縁部は複合口縁で、底部に単孔を穿つ。両者は内外面ハケメ調整を施す。更にS T21古と近接するS T23新-E Pからは、頸部に指頭圧痕を付す突堤のあるやや古相の壺（26-9）が出土した。

**S T27b堅穴住居跡（第26図）** E KやE P、貼床土から土師器の高壺、壺、壺、小型土器が出土した。E P 4のはば完形の高壺（26-11）は、脚部がラッパ状で裾がやや大きく開く形態で、脚部に小さな3つの円孔を穿つ。内外面丁寧なミガキを施し、壺部外面はヘラケズリを施す。壺は、E P 3より口縁部内面にハケメ調整もの（26-15）やE Kより複合口縁の壺（26-17）片が出土する。貼床土からは口縁部が直口縁の壺（26-16）が確認された。壺（26-10）は「く」の字状に開く口縁部形態で、不明瞭ながら内外面にミガキを施す。他にS T27 a・b貼床から小型土器（26-12・13）が出土した。高壺脚部の形態等から前期前葉と推定される。

**S T27c堅穴住居跡（第27図）** E L周辺の床面より甕（27-10）が正位で出土し、「く」の字口縁の体部球形を呈する。内外面ハケメを施す。体部形態等から前期中葉を前後する頃であろう。

**S T282堅穴住居跡（第27図）** 炭化層や周辺床面より高壺、壺等が出土した。高壺（27-

4・5)は柱実棒状の脚部形態で、外面にミガキを施す。壺(27-6)は小～中型の体部がやや下彫れを呈する器形で、外面にミガキとハケメ、内面にナテ調整する。他に円盤状の小碟に刻みのある砥石も出土した。時期は高坏の脚部形態から前期後葉と推定される。

S B 301棟持柱建物跡(第24図5) E P 296覆土中の複合口縁の壺片で、口縁部に2本1対の刻目を付す棒状浮文があり、下端にも刻目を連続して加える。前期前葉と推測される。

S G 34河川跡(第27図12) S G 34 F 1の口縁部が短く外反する坏で、調整は磨滅し不明瞭である。短い口縁形態等は新相の一つと考えられ、前期後葉～中期的な様相が窺える。

グリッド出土土器・土製品(第27図7・15・16) 全て単体で出土した。27-15は器高の低い丸底風の坏で、口唇部が屈曲し短く直立する形態である。内外面ミガキで、外面体～底部にヘラケズリを施す。27-12と同様に短い口縁形態は次代的で、中期的な様相も窺える。27-16は高坏で、脚部が中空棒状のやや粗雑な作りで、内外面にやや幅広のミガキを施す。前期末～中期の時期であろう。27-7は土製の紡錘車で、断面形は台形状を呈し、直径5cm内外を測る。

2 木製品 本遺跡からは古墳時代の棟持柱建物跡や堅穴住居跡から、礎板や柱根が検出された。以下に構構毎に出土木製品を列記する。樹種は観察表に記す。

S B 300棟持柱建物跡(第28～30図) S B 300は東西に3基の柱穴が並び6本柱を基調とし、梁間東面北からE P 289・295・290、梁間西面北からE P 237・287・288とした。中央のE P 287・295が棟持柱を構成する。全ての柱穴から礎板が出土し、E P 237からは上下に礎板が重なる。礎板は鼠返しや板材を転用し、表裏面全てに面取り等の加工がある。更に柱を固定するのに板材では柱の設置部分に凹部を作り出し、鼠返しでは弯曲した内側を表面に使う等が行われる。樹種はコナラ材が多い。以下にE P毎に礎板の特徴を記す。挿図は上方が北で表面を図示した。

E P 237上部礎板(30-1)は、鼠返しの転用材である。平面形は正方形を呈し、長さ約50cmを測る。断面形は緩やかに内弯する。下部礎板(28-1)は、板材を裁断して利用しており、平面形は細長い長方形を呈し、長さ約71cmを測る。断面形は長方形で、凹部等の加工はない。

E P 287礎板(28-2)は、板材を裁断し平面形は細長い長方形を呈し、長さ約87cmを測る。断面形は台形状で幅の広い方を表面にし、表面中央北側に平面形がほぼ長方形の凹部の加工を内側に向けて施す。凹部の断面形は逆台形状で、長さ約30cm、幅約17cm、深さ約4cmを測る。礎板の中で最も厚さのある9cmの板材を使用しており棟持柱を支えるためと考えられる。

E P 288礎板(28-3)は、板材を裁断し利用し、平面形は長方形を呈し、長さ約57cmを測る。断面形は長方形である。表面中央南側に平面形が半円形の凹部の加工を施す。凹部の断面形は緩やかなスロープ状で、長さ約30cm、幅約15cm、深さ約1cmを測る。

E P 289礎板(29-1)は、鼠返しの転用材で、平面形は長方形を呈し、長さ約50cmを測る。断面形は緩やかに内弯する。他の鼠返しより平面が細長い形態である。

E P 295礎板(29-2)は、板材を裁断し、平面形はほぼ長方形を呈し、長さ約69cmを測る。断面形は長方形である。表面中央部に平面形が橢円形の凹部の加工を施す。凹部の断面形は緩やかなU字状で、長さ約20cm、幅約15cm、深さ約1cm弱を測る。2番目に厚い材を使用する。

E P 290礎板(29-3)は、鼠返しの転用材で、平面形は隅丸方形を呈し、長さ約52cmを測る。断面形は長方形である。また、鼠返し中央の柱穴は正方形で、長さ約14cm、幅約13cmを測る。

S B 301棟持柱建物跡（第31図） S B 301では南北に4基の柱穴が並び、6本柱を基調とするであろう建物で、梁間南面西からE P 292・296、梁間北面西からE P 234・293で、E P 293・296が棟持柱にあたる。全ての柱穴から礎板や板片が出土し、礎板は板材を使用し表裏面全てに面取り加工がある。以下にE P毎に礎板や板片の特徴を記す。

E P 292礎板（31-1・2）は、板片で柱の抜き取りの際に破壊された礎板の一部であろう。

E P 293礎板（31-4）は、板材を裁断し平面形は長方形を呈し、長さ約31cmを測る。断面形は長方形である。礎板の中で最も厚い6cmの板材で、棟持柱を支えるための工夫であろう。

E P 296礎板（31-3）は、板材を裁断し、平面形は細長い長方形を呈し、長さ約34cmを測る。断面形は長方形である。他にE P 234は細片のため実測困難で、図示しなかった。

S T 11・19堅穴住居跡（第30図） S T 11 E P 1（30-2）・4（30-3）、S T 19 E P 2（30-4）より柱根が出土した。三者は残存長60cm前後で、底面及び側面に面取りの加工を施す。断面形は、30-1が楕円形で長軸17cm、短軸8cmを測る。30-2は円形で径15cmを測る。30-3は一部平坦面もあるが、楕円形で長軸14cm、短軸10cmを測る。全てコナラ材である。

S G 34旧河川跡出土木製品（第31図） S G 34 F 2層より自然木と共に2点の木製品が出土し、両者はやや厚身で表裏を面取り加工する。31-5は長方形の板材で、31-6は裏面に縦に把手状の張り出しがあり、張り出しの横に直径3cm程の円孔を穿つ。

3 中世の土器・陶磁器 本遺跡からはC～E区の土坑や溝跡を主に中世に属する土器、陶器類が散見される。種別はかわらけ、珠洲系陶器の壺、擂鉢、片口鉢、瓷器系陶器の擂鉢、青磁の碗が出土する。小破片が多い事から時期等が判別可能なものを主に種別毎に列記する。

かわらけ（34-2～4）は、小型の皿状を呈し、ロクロ成形で底部の切り離しは全て回転糸切りである。34-4は口縁部に面を持つ形態で、13世紀頃の所産と考えられる。

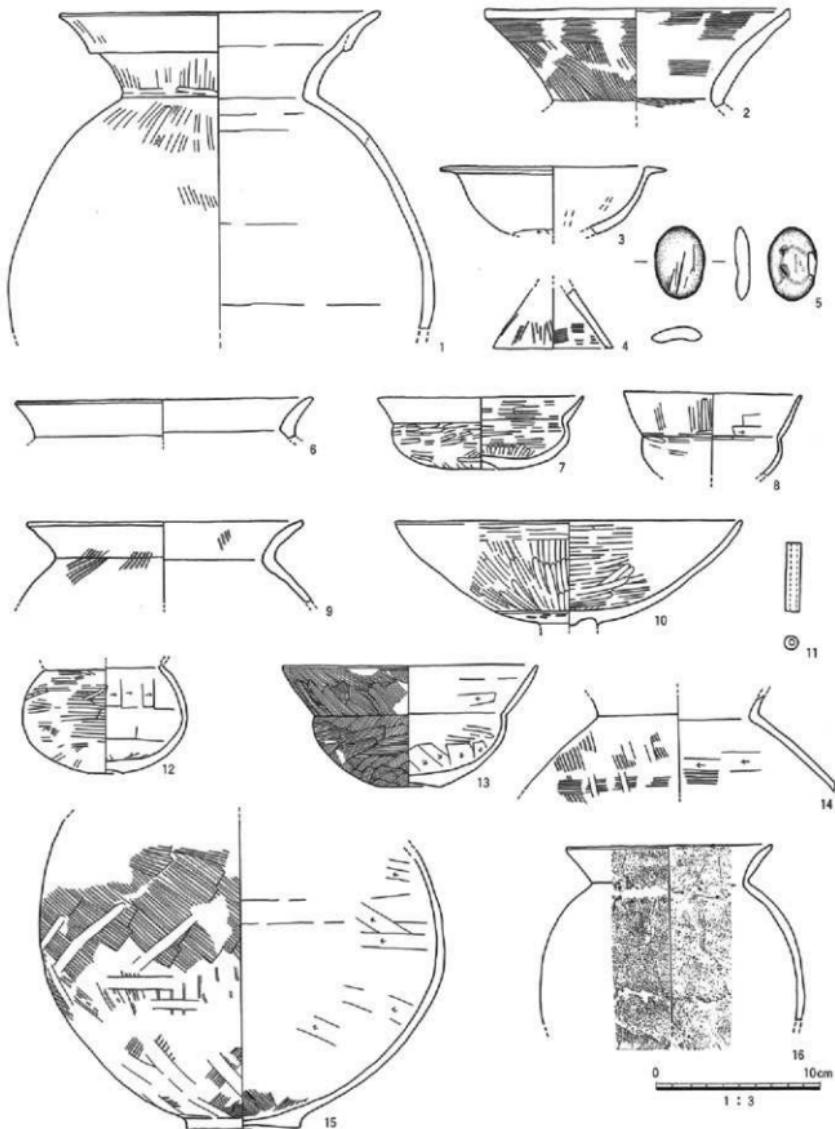
珠洲系陶器（32-1・34-1・5・7～11）は、片口鉢や擂鉢の破片が出土し、御目は細密なもの（32-1・34-7・8）が多く、1単位の御目は約12～16条である。御目の形態や粗の単位等から13世紀後半頃と推測され、一部34-11の曲線的文様もあり時期が遅る事も考えられる。

青磁（32-3・10）は2点の碗で、32-3は内面見込みに花文がスタンプされ、竹の節高台を呈する。32-10は雷文蒂蓮弁文の小破片である。両者は14～15世紀代の時期が推定される。

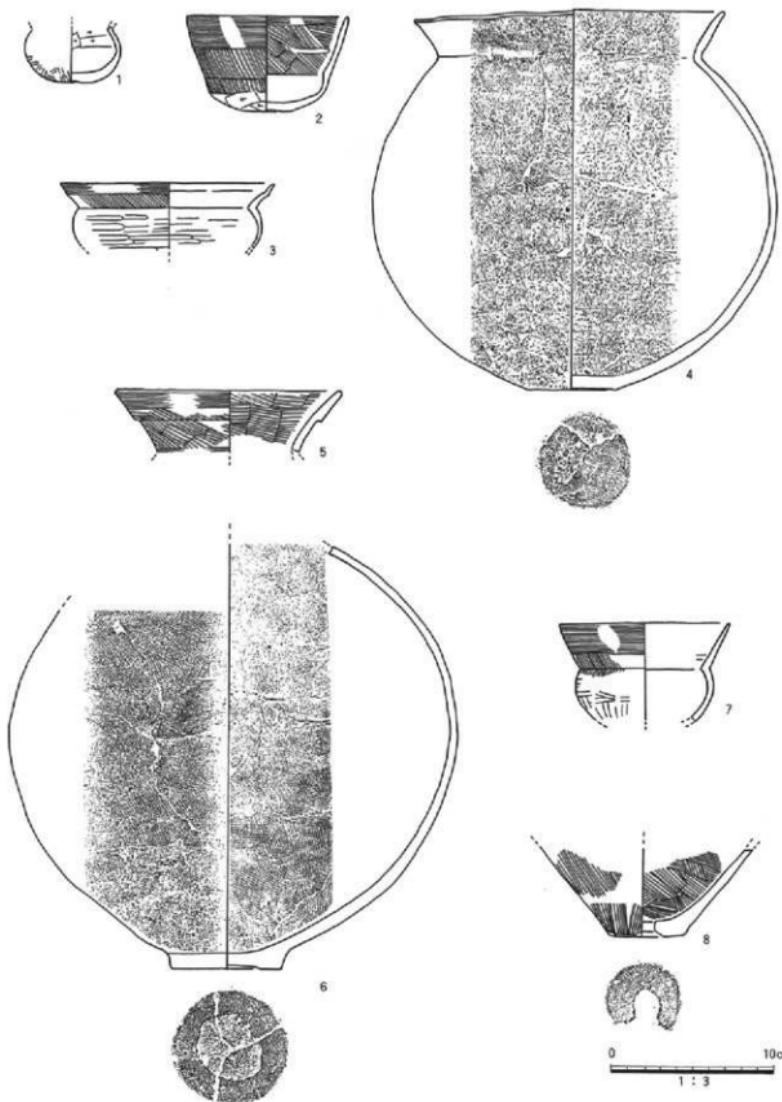
4 漆器 漆器は碗が3点出土した。33-5は内外面に黒の下地に二種類の赤漆で鶴と亀等からなる蓬莱紋を描く。高台裏には「三つ鱗」状の紋様も描く。14世紀前後と推測される。33-6は内外面の一部に僅かに黒と赤漆が付着している。厚い高台から15世紀代と考えられる。その他に小形の皿状を呈する赤漆の漆膜のみが出土した。（図版18）

5 木製品 S B 302 E P 165（31-7）・184（31-8）より柱根が出土した。残存長28cmで直径は前者が8.5cm、後者が15cmを測る。底面や側面下半を面取り加工する。その他に墨書のある柄杓底板（33-8）、先端が炭化するヘラ状製品（33-7・34-14）、物差（34-15）、織器（34-13）、棒状製品（34-16・17）、瓢箪（34-12）が出土した。

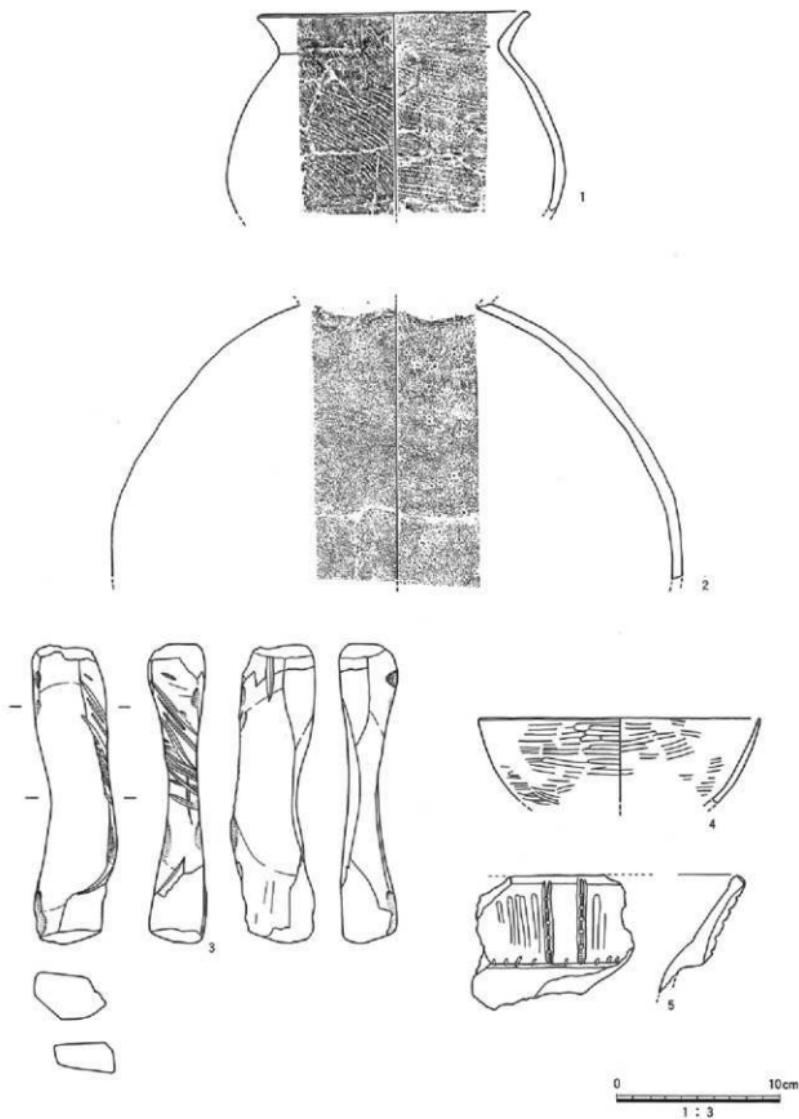
6 石製品 本遺跡では砥石、茶臼等の石製品が出土する。砥石（32-2・4・6・8・9・34-6）は直径10cm前後の川原石の2面及び3面に摺り面が認められ、凝灰岩及び流紋岩製のものが大半である。茶臼（33-1～4）は破片で、全て安山岩製である。



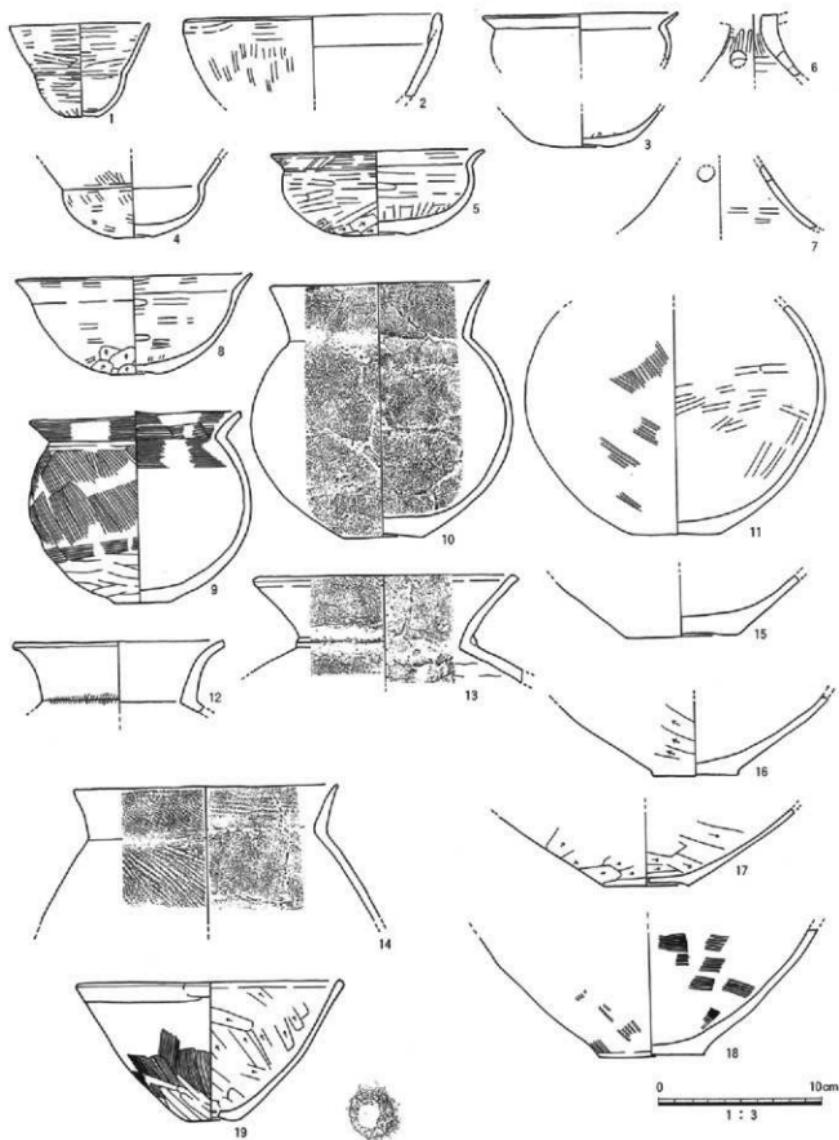
第22図 遺物実測図(1)



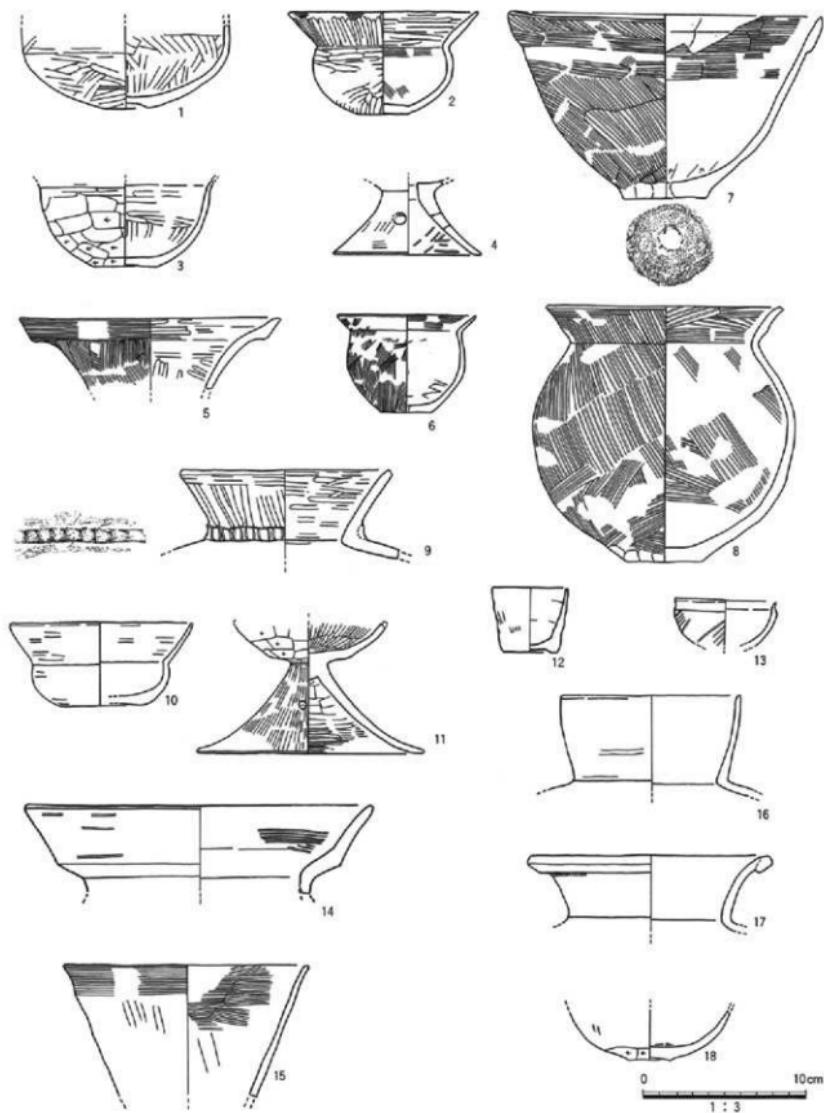
第23図 遺物実測図(2)



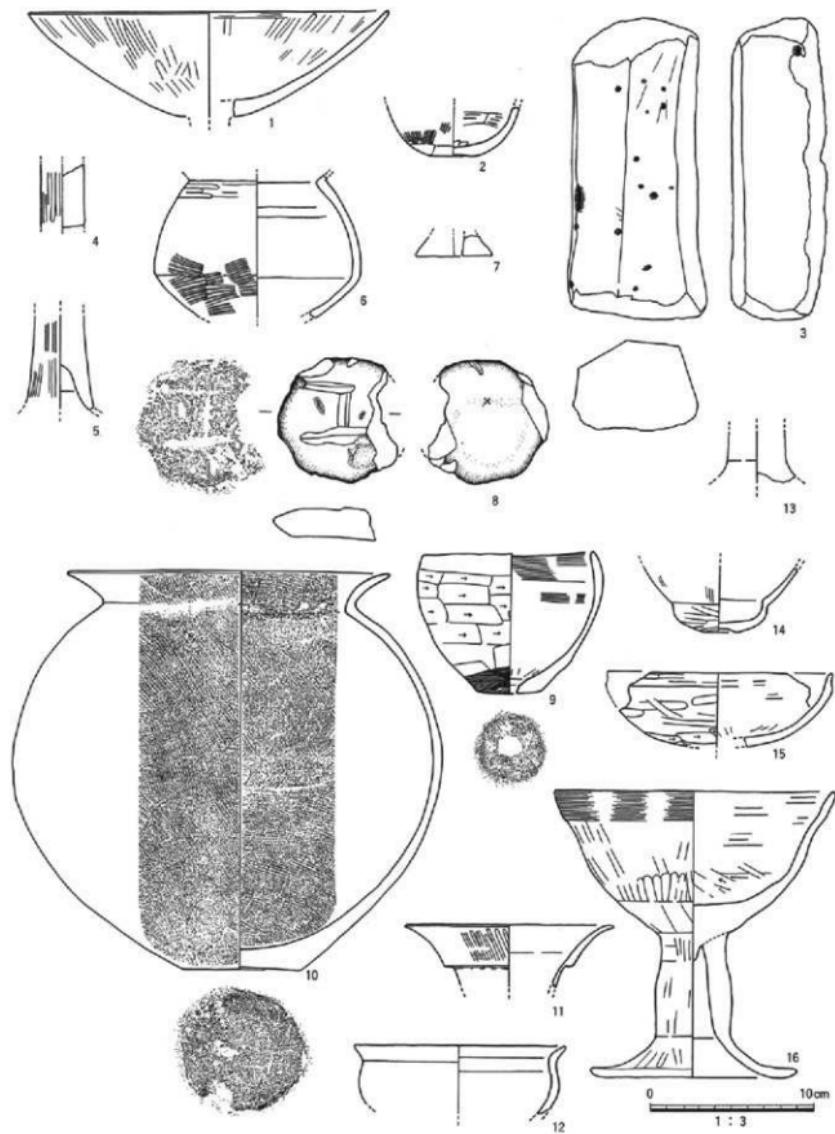
第24図 遺物実測図(3)



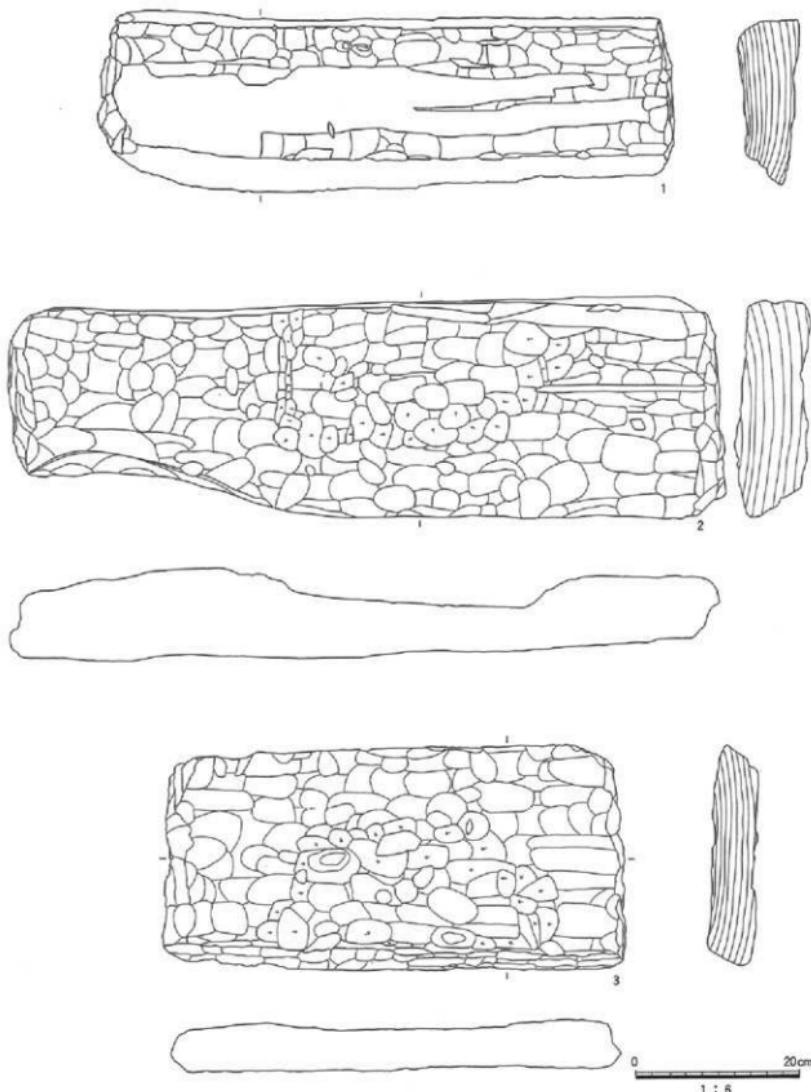
第25図 遺物実測図(4)



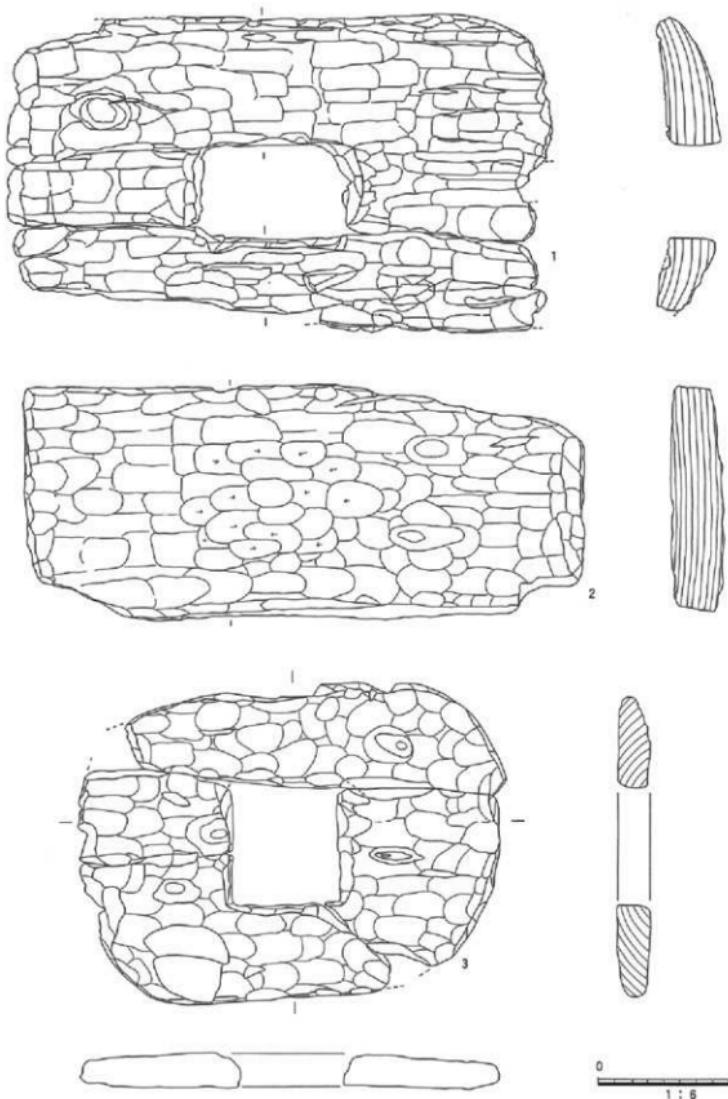
第26図 遺物実測図(5)



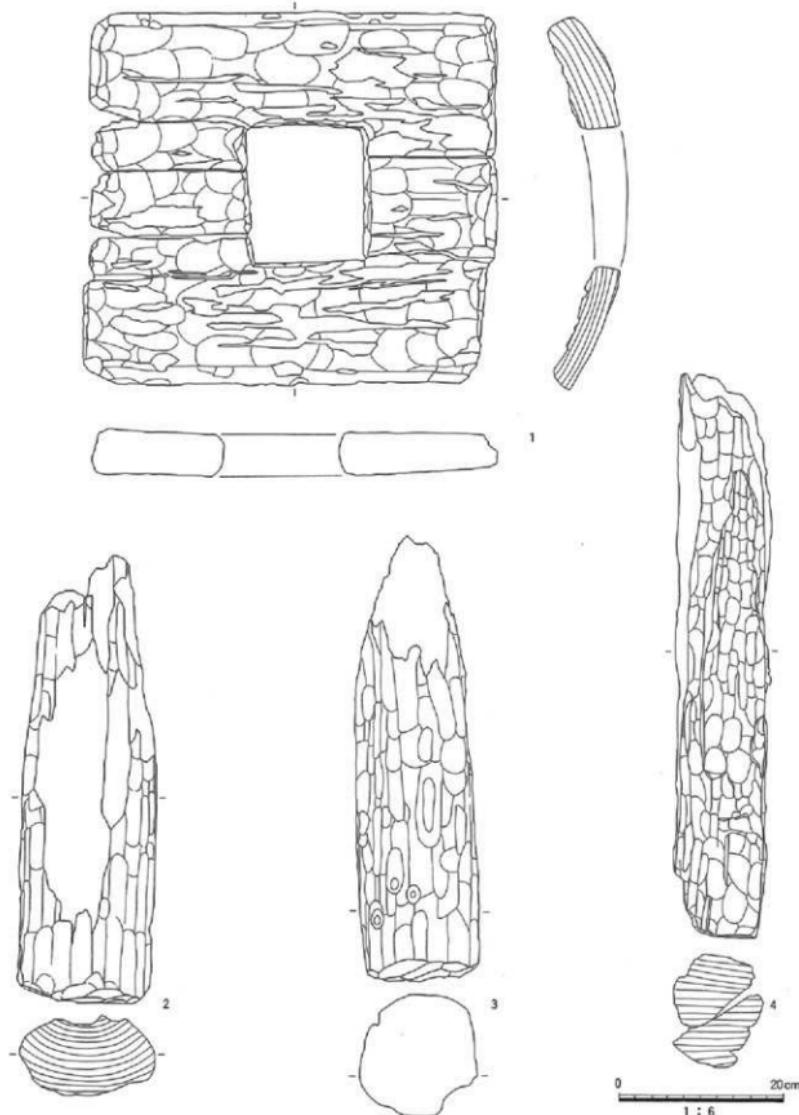
第27図 遺物実測図(6)



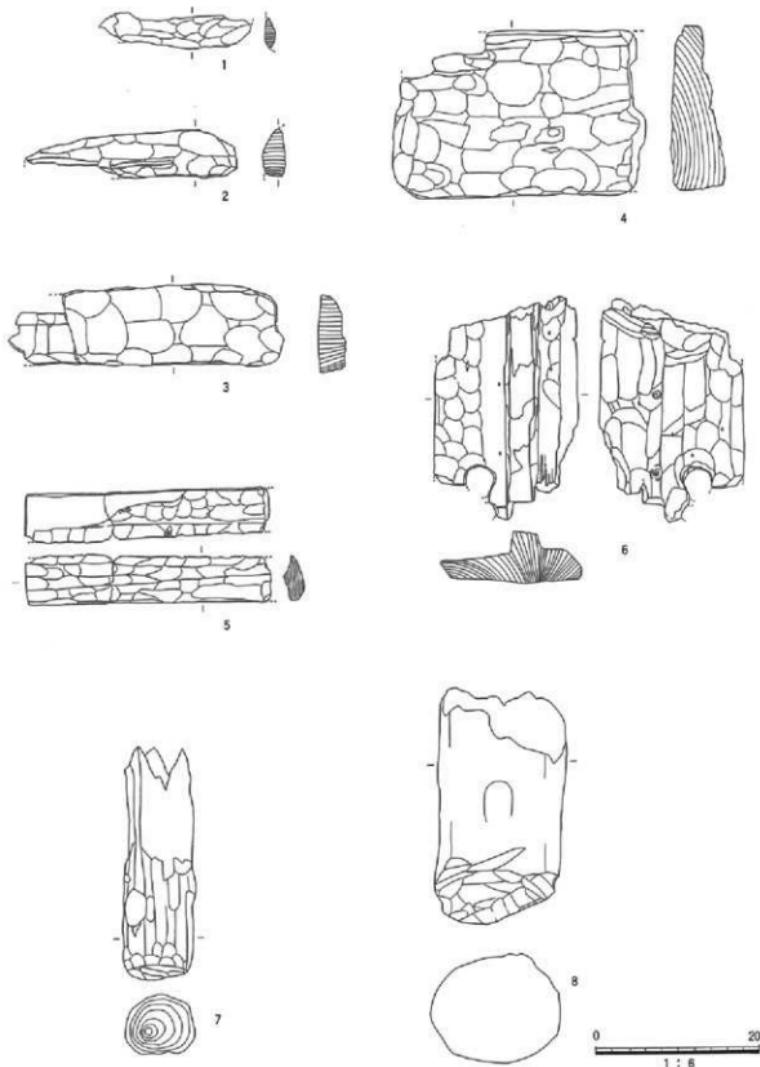
第28図 遺物実測図(7)



第29図 遺物実測図(8)



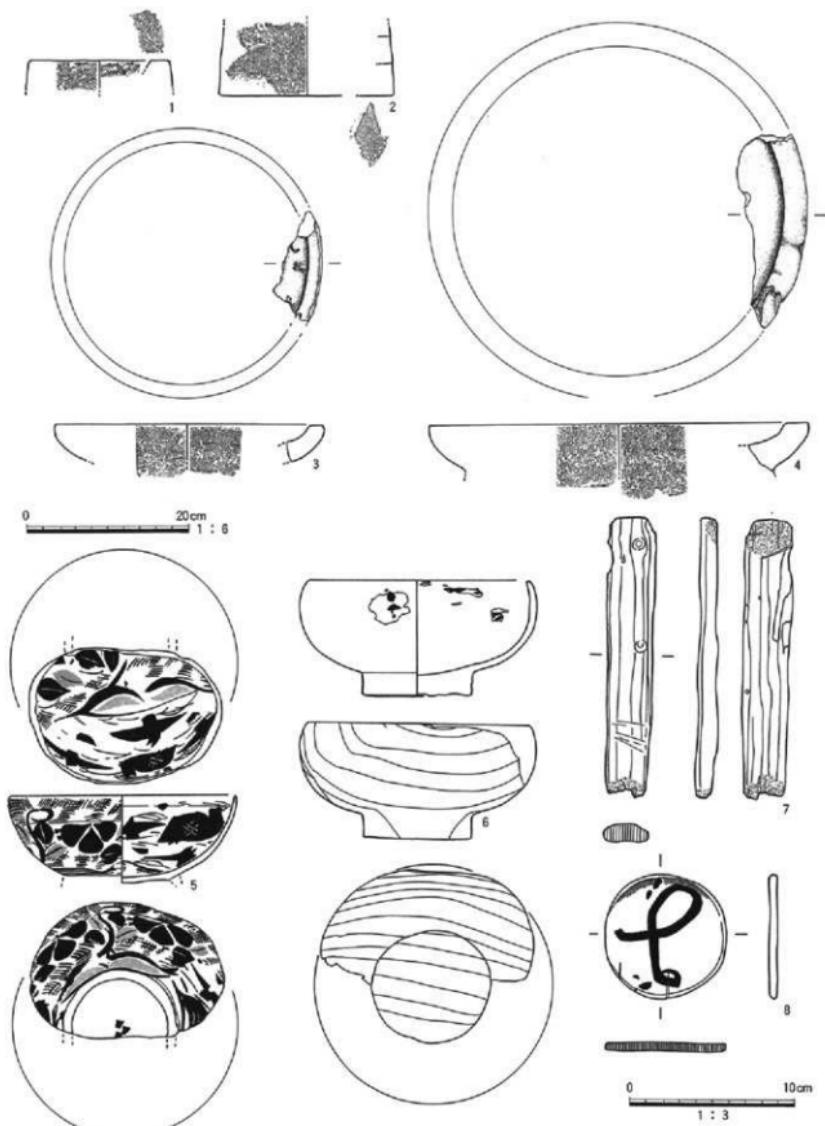
第30図 遺物実測図(9)



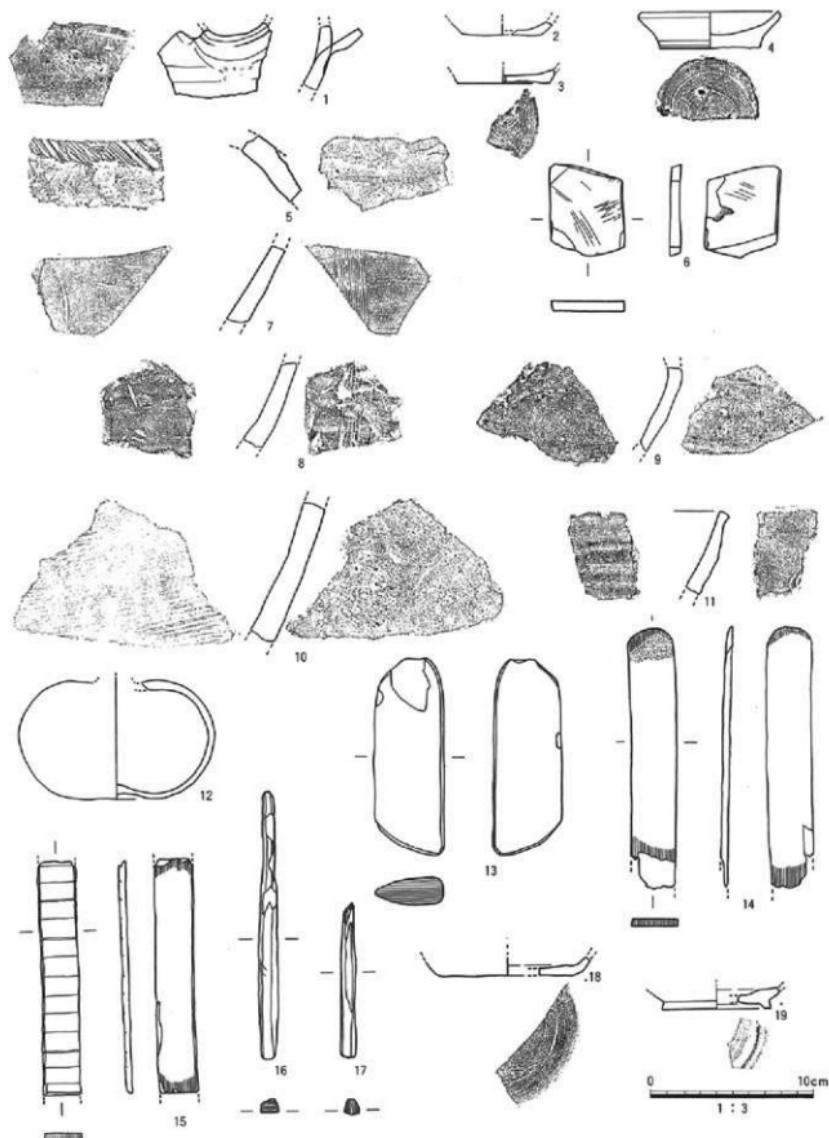
第31図 遺物実測図(10)



第32図 遺物実測図(11)



第33図 遺物実測図(12)



第34図 遺物実測図(13)

表9 遺物観察表(1)

辨識番号	遺物番号	種別	器種	計測値 (mm)		調査技法		出土地點	登録番号	備考・樹種	
				口径	底径	高さ	外面				
第22回	1	土器部	壺	(97)	(97)	ミガキ	磨光面	B ST 8 Y	R P 6	漆影	
	2	土器部	壺	(188)	(57)	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	B ST 8 Y	R P 10		
	3	土器部	壺	(140)	(42)	ハケメ	ミガキ	B ST 9 Y	R P 24-b		
	4	土器部	台付甕		(74)	(57)	ハケメ	B ST 9 Y	R P 25		
	5	石製品	砥石	45	30			B ST 9 Y		灰灰石	
	6	土器部	甕	(182)	(24)	ナデ	ナデ	B ST 9 Y	R P 23		
	7	土器部	壺	125	45	44	ミガキ	B ST 9 Y	R P 68	凹底・漆影	
	8	土器部	壺	(110)	(49)	1 世紀	ケメリ・ミガキ	B ST 9 E K	R P 176		
	9	土器部	甕	(70)	(56)	ハケメ	ハケメ	B ST 10 F			
	10	土器部	高环	(211)	(33)	(64)	ミガキ	ミガキ	B ST 11 E K 5		
第23回	11	石製品	管玉	42	9			B ST 11 E K 5	R Q 182	碧玉類	
	12	土器部	甕		20	(65)	1 世紀・ハケメ	ケメリ・ミガキ	B ST 12 E K 新	R P 29	凹底
	13	土器部	壺	156	36	74	口付・ミガキ	B ST 12 Y	R P 207	凹底	
	14	土器部	甕	(105)	(60)	1 世紀	ハケメ・ハケメ	B ST 12 M E	R P 210-A		
	15	土器部	甕	(69)	(19)	ミガキ・ハケメ	ハケメ・ケメリ	B ST 12 E P 1	R P 32		
	16	土器部	甕	125	(109)	ハケメ	ハケメ	B ST 12 E P 1	R P 30-31-32		
	1	土器部	壺	19	(25)	ミガキ	ミガキ・ミガキ	B ST 14 Y	R P 167		
	2	土器部	壺	(100)	22	60	ハケメ・ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	B ST 14 E KY		
	3	土器部	壺	(130)	(40)	ミガキ・ハケメ・ナデ	ミガキ・ナデ	B ST 14 E KY			
	4	土器部	甕	190	(56)	234	ハケメ	B ST 14 E K	R P 206 A - 28	武付番	
第24回	5	土器部	甕	(140)	(29)	ハケメ・ナデ	ハケメ	B ST 14 E	R P 27	23-6同一個体	
	6	土器部	甕	68	(20)	ハケメ	ハケメ	B ST 14 E K	R P 206 B - 27	武付番	
	7	土器部	壺	(101)	(59)	ミガキ・ハケメ・ナデ	ミガキ	B ST 14 E KY			
	8	土器部	甕	(130)	(45)	53	ハケメ	B ST 14 Y	R P 28	单孔	
	9	土器部	甕		(169)			B ST 15	R P 37		
	1	土器部	甕	155	(122)	ハケメ	ハケメ	B ST 15			
	2	土器部	甕		(169)			B ST 15 M E R	R P 215		
	3	石製品	砥石	183	30			B ST 15 E P 2	R P 171		
	4	土器部	高环	(172)	(51)	ミガキ	ミガキ	B ST 16 E P 2	R P 170	削目標準浮子	
	5	土器部	甕		(72)	ミガキ	ミガキ	B S 30 E F 296	R P 170		
第25回	1	土器部	壺	85	20	57	ミガキ	ミガキ	B ST 19 Y	R P 52	凹底・漆影
	2	土器部	甕	156	(51)	ミガキ	ミガキ	B ST 19 Y	R P 55		
	3	土器部	壺	(120)	30	(31)	ミガキ	B ST 19 Y	R P 61	凹底	
	4	土器部	壺	(108)	24	(48)	ミガキ	B ST 19 Y	R P 62	凹底	
	5	土器部	甕	(129)	(35)	51	ケメリ・ミガキ	B ST 19 Y	R P 63	凹底	
	6	土器部	甕	(58)	(38)	ミガキ	ミガキ	B ST 19 Y	R P 146		
	7	土器部	壺台	(118)	(39)		ミガキ	B ST 19 Y	R P 57		
	8	土器部	壺	150	(46)	64	ハケメ・ミガキ	ミガキ	B ST 19 E K 12	R P 181	凹底
	9	土器部	甕	130	35	177	ミガキ・ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	B ST 19 Y	R P 58	
	10	土器部	甕	134	48	158	ハケメ	B ST 19 Y	R P 52		
第26回	11	土器部	甕	51	(140)	ハケメ	ミガキ	B ST 19 Y	R P 65		
	12	土器部	甕	130	(44)	ハケメ	ハケメ	B ST 19 E K 12	R P 173		
	13	土器部	甕	162	(67)	ミガキ・ミガキ・ナデ	ミガキ	B ST 19 Y	R P 53	頭部突起	
	14	土器部	甕	(162)	(64)	ミガキ・ナデ	ミガキ	B ST 19 Y	R P 54		
	15	土器部	甕	66	(35)			B ST 19 Y	R P 56		
	16	土器部	甕	52	(46)	ハケメ	ミガキ	B ST 19 Y	R P 54		
	17	土器部	甕	(50)	(46)	ハケメ	ケメリ	B ST 19 E K 2		武付番	
	18	土器部	甕	64	(75)	ハケメ・ミガキ	ハケメ	B ST 19 E K 12	R P 173		
	19	土器部	甕	165	30	85	ミガキ・ハケメ	ハケメ	B ST 19 Y	R P 52	
	20	土器部	壺	22	56	ミガキ	ミガキ	B ST 21 G Y	R P 39	凹底	
第27回	2	土器部	壺	(115)	27	63	ミガキ・ナデ	ミガキ	B ST 21 E Y	R P 79	凹底
	3	土器部	壺	(105)	36	(53)	ハケメ・ミガキ	ミガキ	B ST 21 E Y	R P 41	
	4	土器部	壺台	90	(44)	1 世紀	ハケメ	B ST 21 E Y	R P 39		
	5	土器部	甕	(160)	(44)	ナデ・ハケメ	ミガキ	B ST 21 E Y	R P 42		
	6	土器部	小型土器	84	30	60	ハケメ・ナデ	ケメリ・ハケメ	B ST 21 E Y	R P 78	
	7	土器部	甕	192	51	114	ハケメ	ケメリ・ハケメ	B ST 21 E Y	R P 44	单孔
	8	土器部	甕	(144)	46	196	ハケメ・ミガキ	ハケメ	B ST 21 E Y	R P 97	
	9	土器部	甕	127	(54)	ミガキ	ミガキ	B ST 23 E P 3	R P 76	指輪押突先	
	10	土器部	壺	(112)	(46)	51	ミガキ	ミガキ	B ST 22 E Y	R P 39	
	11	土器部	壺	140	(82)	ミガキ・ミガキ	ミガキ	B ST 22-b E P 4	R P 204		
第28回	12	土器部	小型土器	50	(34)	40	ハケメ・ナデ	ハケメ	B ST 22-a E Y		
	13	土器部	甕	63	(28)	ハケメ	ミガキ	B ST 22 E Y			
	14	土器部	甕	(214)	53	ミガキ	ミガキ	B ST 22-a	R P 86		
	15	土器部	甕	(150)	(86)	ナデ・ミガキ	ミガキ	B ST 22-b E P 3			
	16	土器部	甕	110	(62)	ミガキ	ミガキ	B ST 22-b E Y	R P 87		
	17	土器部	甕	(150)	98	26	ケメリ・ハケメ	ハケメ	B ST 22-b	R P 107	
	18	土器部	壺		(46)	ハケメ	ミガキ	B ST 22 E	R P 49	凹底	
	19	土器部	甕	219	(30)	65	ミガキ	ミガキ・ナデ	B ST 41	R P 96	
第29回	2	土器部	壺	(28)	(31)	ケメリ・ハケメ	ケメリ・ハケメ	A S T 220	R P 182	凹底	
	3	石製品	砥石	185	83	57		A S T 226 E P 1	R P 182	泥岩類	

表10 遺物觀察表（2）

探査番号	遺物番号	種別	器種	計測値 (mm)		調査技法		出土土地点	登録番号	備考・樹種
				口径	底径	最高	外面			
第1群	4	土師器	高杯			(39)	ミガキ		A S T282Y	
	5	土師器	高杯		(46)	(57)	ミガキ		A S T282Y	R P194
	6	土師器	盤			9	ミガキ・ハケヌ		A S T282Y	R P209
	7	土師器	網陳車	(31)	46	12			A A -72	
	8	石製品	硯石	(75)	(68)	18			A S T282F	R Q190
	9	土陶器	甌	104	40	89	ケズリ・ハケヌ・ナデ	A S P308	R P121	
第2群	10	土陶器	甌	(195)	70	243	ハケヌ		A S T278Y	R P140
	11	土陶器	甌	(128)		(37)	ミガキ		B S D29	R P75
	12	土陶器	甌	130		(41)			C S G34F 1	中央トレス
	13	土陶器	高杯		(47)	(31)			A S T276	R P188
	14	土陶器	甌	(94)	30	(40)	ミガキ		A 中央東	巴底
	15	土陶器	甌	(140)	(36)	(46)	ケズリ・ミガキ		A B -67	
第3群	16	土陶器	高杯	(172)	(126)	175	ミガキ・ナデ		B 海端	
	1	木製品	箆板	710	220	80	ケズリ		B S B300E P 237T	コナラ材
	2	木製品	箆板	860	220	90	ケズリ		B S B300E P 287	白樺有り・コナラ材
	3	木製品	箆板	570	220	60	ケズリ		B S B300E P 288	白樺有り・コナラ材
	4	木製品	箆板	660	390	65	ケズリ		B S B300E P 289	白樺有り・コナラ材
	5	木製品	箆板	520	360	30	ケズリ		B S B300E P 295	白樺有り・コナラ材
第4群	1	木製品	箆板	500	460	(6)	ケズリ		B S B300E P 290	白樺有り・コナラ材
	2	木製品	柱板	550	170		ケズリ		B S B300E P 237上	白樺有り・ナシナ材
	3	木製品	柱板	550	150		ケズリ		B S T11E P 4	コナラ材
	4	木製品	柱板	600	160		ケズリ		B S T11E P 2	コナラ材
	5	木製品	箆板	180	30	10	ケズリ		B S B301E P 292	コナラ材
	6	木製品	箆板	260	50	30	ケズリ		B S B301E P 292	コナラ材
第5群	3	木製品	箆板	310	100	30	ケズリ		B S B301E P 296	R W172
	4	木製品	箆板	310	200	60	ケズリ		B S B301E P 293	西トレ・ウルシ材
	5	木製品	板状製品	300	60	30	ケズリ		B S G34F 2	コナラ材
	6	木製品	板状製品	250	180	60	ケズリ		B S G34F 2	コナラ材
	7	木製品	柱板	280	80		ケズリ		C S B302E P 165	クリ材
	8	木製品	柱板	280	160		ケズリ		C S B302E P 184	ヤマギ材
第6群	1	漆油器・陶器	漆耳杯	(45)		15	ロクロ		C S D1	R P 4
	2	石製品	硯石	148	71	62			C S D1 F 2	R Q115
	3	青銅	鏡		(50)	(19)	見出部: 花文		C S K91	R P91
	4	石製品	硯石	127	61	52			C S K89	竹の筋高台
	5	石製品	硯石	85	50	41			C S D104	追加調査記Q 1
	6	石製品	硯石	111	60	55			C S D104	追加調査記Q 3
第7群	7	石製品	硯石	80	87	47			C S D110	追加調査記Q 145
	8	石製品	硯石	(89)	(76)	43			C S K102	追加調査記Q 155
	9	石製品	硯石	(74)	43	41			C S K104	追加調査記Q 154
	10	青銅	鏡	(25)		(20)	墨文書・青文		C S D193	R P150
	11	石製品	茶臼	(180)	174	(305)			C S D129	R Q143
	12	石製品	茶臼	(224)	(34)				C S D104	安山岩
第8群	3	石製品	茶臼	(330)		45			C S D104	R Q148
	4	石製品	茶臼	465		60			C S D104	R Q156
	5	漆器	椀	140		52	墨文書		C S D7	漆器2種・底部、三つ脚底紋・ブナ材
	6	漆器	椀	(136)	66	71			C S K90	R W147
	7	木製品	板状製品	170	28	9			C S D104	R W6
	8	木製品	柄杓底板	74		4			C S K91	R W133
第9群	1	陶器系器物	片口斧	(156)	(34)	ロクロ			E S K2	R P 2
	2	かわらけ	瓶	48		ロクロ	底: 回転余切り		E S K25	
	3	かわらけ	瓶	(54)	(9)	ロクロ	底: 回転余切り		E S D109	R P139
	4	かわらけ	瓶	(86)	(61)	(22)	ロクロ		E S K76	R P161
	5	珠洲系高台	甌	(44)	タキ		アテ板		E S K75 F 2	R P198
	6	石製品	硯石	56	44	7			E S K81	貝岩
第10群	7	珠洲系高台	甌	(49)	11	ロクロ	脚目		E S K105	R P138
	8	珠洲系高台	甌		50	ロクロ	脚目		E S K105	
	9	愛媛系高台	甌	(51)					E	
	10	珠洲系高台	甌	83	タキ		アテ板		C S D7	追加調査記P 7
	11	珠洲系高台	甌		50	ロクロ	脚目文跡		E 勝手	
	12	瓢箪		74					E S K76	ユウガオ材
第11群	13	木製品	板状製品	120	41	16			E S K75	ブナ材
	14	木製品	板状製品	158	27	4			E S K75	先端根付番・アスカロ材
	15	木製品	粧正	143	23	4			E S K89	アスカロ材
	16	木製品	板状製品	165	11	6			E S K75	スギ材
	17	木製品	板状製品	95	8	8			E S K75	スギ材
	18	第3層	甌	80	10	ロクロ	底: 回転余切り		C D -36	
第12群	19	漆串器	高台付坪	67	12	ロクロ	底: 回転余切り		A 北平	

## VII まとめ

今調査では、遺跡範囲を縦断するように設定された調査区の中央部C区の旧河川跡を境に、北側A・B区では古墳時代前期を主とする棟持柱建物跡2棟、竪穴住居跡41棟が確認され、南側のC・D・E区では鎌倉～室町時代の堀跡1条、掘立柱建物跡1棟、柱穴列4列、溝跡17条、土坑や井戸跡17基、周溝跡1基、多数のピット等が検出される複合遺跡である事が分かった。

遺物は、古墳時代が竪穴住居跡を主に古墳時代前期を中心とした土師器や管玉、砥石、礎板等が出土し、中世では溝跡や土坑からかわらけや珠洲系陶器、青磁等の中世陶磁器、漆器や砥石、茶臼等が散見された。以下に古墳時代と中世に分けて、遺構と遺物を整理しまとめとする。

本遺跡の主体となる古墳時代前期は、調査区北側のA・B区を中心に多数の竪穴住居跡が確認され、重複関係から少なくとも4時期以上の変遷が窺えた。出土土器からも概ね古墳時代前期全般とやや新相の土器群が認められ、時期幅のある多様な土器形態が出土している。

これは炉跡や貯蔵穴、主柱穴等の竪穴住居構造にも認められ、特に炉跡と貯蔵穴は、床面等が削平を受けるため限られた資料ではあるが、両者併せて41棟中18棟26ヶ所を確認した。

炉跡としては古墳時代前期に一般的な床面で焼土が検出される地床炉が、床面中央付近(S T 8・21新)で検出されるものと、壁際(S T 278)で検出されるもの等があった。一方、炭化層が薄く床面に長軸1.5m前後の楕円形や円形を基調とする範囲に堆積し広がるものもあり、当初焼失家屋等の可能性も考えられたが、炭化層周辺や炭化層下の床面に全く焼土や炭化材が認められない事、炭化層の大半が床面の中央部(S T 11・25)や壁際(S T 9新・19・22・27a・42・291)の一部に限定される事等から、何らかの上部構造がある炉跡に関わる炭化層であろうと判断された。

貯蔵穴は、概ね竪穴住居の壁際隅や地床炉周辺を中心に、平面をほぼ円形に掘り込み、覆土や底面に焼土層と炭化層(A類:S T 12E L新・14)や、炭化層(B類:S T 9古・27b・241新・)、炭化物の影響であろう黒褐色土(C類:S T 11E L 6・12E L古・19E L 9・23)が堆積する形態である。これらの一帯は当初、A類の焼土やB類の浅い掘り方等から、上記の炉形態の一部とも考えたが、全体には壁際隅の設置位置の類似や、用途の相異による規模や覆土の違いも推測され、概ね貯蔵穴や床面削平による貯蔵穴の下部と判断した。

両者は時期的変遷等は判然としないが、中～大型の竪穴住居跡に設置される傾向が窺えた。

柱穴等は大型の竪穴住居跡でのみ4本の主柱穴や柱根(S T 11・19・27b・278)が検出され、特にS T 11・19は2基の貯蔵穴、周溝の一部や壁に直交する間仕切り(S T 19)が認められる。

また、特記事項として棟持柱建物跡(S B 300・301)が上げられる。B区中央のS T 11・19・16等の貼床下で2棟検出され、ほぼ主軸を直交させる。S B 301は調査区外に延びるが、両者とも全体に6本の柱で構成されると考えられ、1×1間の桁行より梁行が長い特異な構造である。全ての柱穴底面から礎板や端材が確認される。廻返し等も転用材と利用する事から棟持柱建物以前の倉庫等の存在も窺える。遺構間の重複関係やL字形の配置、柱穴の出土土器等からほぼ同時期と判断され、前期前葉頃と推測される。

一般に県内の古墳時代の集落は、掘建柱建物自体が少なく、竪穴住居群で構成される事が多

い。棟持柱建物跡は未検出で、周辺地域でも古墳時代前期の宮城県迫町の佐沼城跡や、福島県いわき市の菅原B遺跡で各1棟が散見される程である。両遺跡とも溝跡や柱列(佐沼城跡)・柵列(菅原B遺跡)の区画や大型建物跡の存在等から「首長居宅」や「豪族居館」の可能性を指摘する。

一方、遺物相では、耕作や土取り等により大半の竪穴住居跡が床面直上や床面が削平されて検出され、床面等の一括資料は限られるが、古墳時代前期全般を中心とする土器群が出土した。

近接する今塚遺跡は焼失家屋等の一括土器群が古墳時代前期中～後葉に比定され、本遺跡の一部もほぼ同時期の所産と考えられた。しかし、本遺跡には今塚遺跡の土器組成や形態に含まれない土器群も出土し、全体に今塚遺跡より古相や祖形と推測される一群(ST 9・12・19・21古・23新・27b・SB 301)と、粗雑・簡略した調整等のやや後出か新相の一群(ST 14・SG 34・包含層)が散見され、前者は壺の複合口縁や頸部、高环の脚部形態等から更に細分される。

これらを基に主な遺構の変遷は、I期：ST 27b・SB 300・301（前期前葉）、II期：ST 9古・19・23新（前期前～中葉）、III期：ST 9新・11・12・16・21古・41・278（前期中～後葉）、IV期：ST 8・14・21新・282（前期後葉）、V期：SG 34（前期後葉～中期）に比定されよう。上記から概観されるのは、「当初、河川に囲まれた集落は特異な棟持柱建物や大型の竪穴住居を主として展開し、前期全般を通じて存続する大型の竪穴住居を中心的建物（SB 300→ST 19→ST 11）とし、その周辺に主軸等をほぼ合わせた小・中型の竪穴住居群が概ね数棟単位のブロックで建て替えを行いながら、集落を構成する」様相が看取られる。集落の最終段階は判然としないが、集落を区画する旧河川上層の洪水層等が集落の廃絶や移転の要因の一つであろう。

中世では、C区中央部に東西に走行する幅約2.5mの堀跡が検出され、堀跡南側に遺構群が集中する。堀跡の最内側には土留めの柱穴群や土壙の痕跡も認められ、その南側に建て替えが認められる張り出しのある1×5間の小規模な掘立柱建物跡や土坑、溝跡等が確認された。

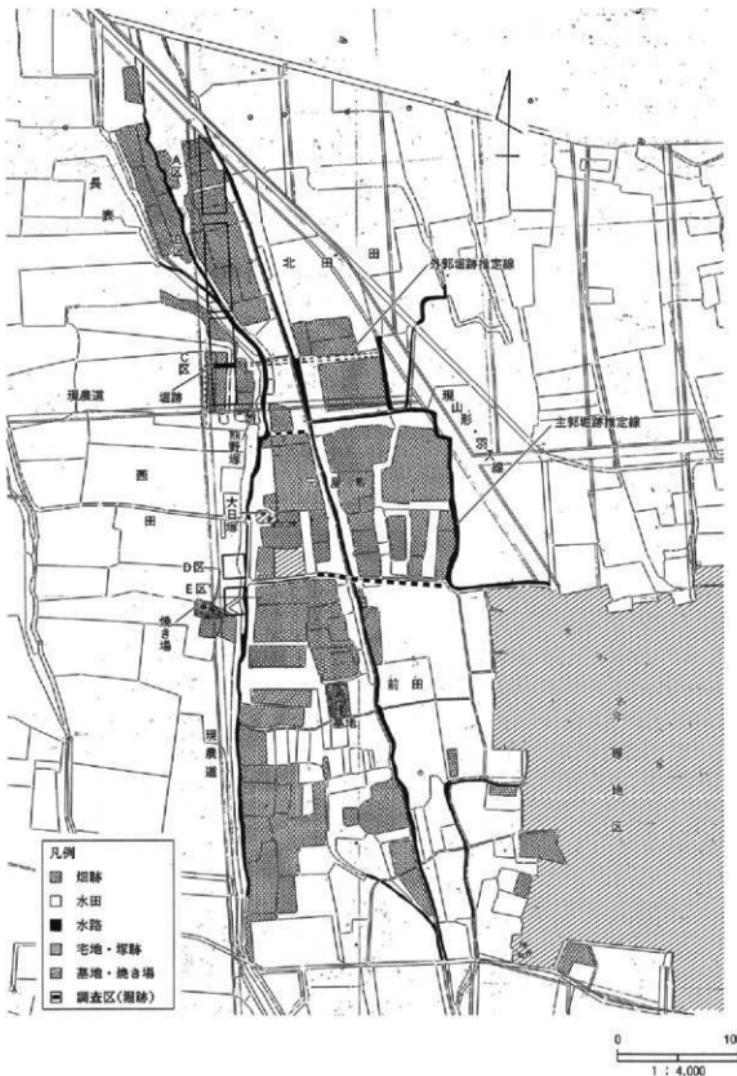
調査区の東南には「元屋敷」の小字名があり、耕地整理前の字切図からも方形状に東西150m、南北120mの水路等に囲まれた周囲より一段高い畠地等が認められ、約1町半四方の方形城館の様相を示す。地元民によれば現今塚地区の以前の集落があった場所と伝えられており、周囲の「西田」、「北田」、「前田」の小字名も元屋敷を基準とした水田の名称であるといふ。

今調査区はこれら字切図や地形等から判断すれば方形城館外側の北西にあたり、堀跡の主軸が元屋敷（主郭）の北辺水路と併走する事から、主郭に併走対する北側外郭部の堀跡と推定される。堀跡の東側延長線上の畠地に現在も凹部が認められ、少なくとも140m以上を測る。

これらの状況を概括すれば、本遺跡は二重の堀跡に囲まれた約1町半四方の方形城館跡である。C区は外郭部の北西角の一部にあたり、外郭北辺の堀跡と土壙の内側に小規模な建物跡が配置され、磁石や鉄滓が出土する事から作業場的な場の使用が窺え、遺構覆土から人為的な埋土が最終段階に多く認められる。D区の堀跡と推測された方形状の周溝跡や、E区の井戸跡群等は主郭外と推測されるが、遺物等から概ねこの方形城館に関わる遺構群と推測される。

遺物相からは概ね鎌倉～室町時代（13～15世紀）で、C・D区は14～15世紀前後、E区は13世紀代を主とし時期幅が若干異なる。領主不明な大山庄～斯波（最上）氏の時期が比定される。

特記事項として北条氏の「三つ鱗」状の紋様がある14世紀前後の漆器が出土したこと付す。



第35図 今塚地区字切概要図(昭和36年耕地整理前の現況図に加筆)

## 報告書抄録

ふりがな 書名	ながおもていせきはくつちょうさほうこくしょ 長表遺跡発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第87集
編集者名	植松晚彦・高柳健一
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
発行年月日	西暦2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおもていせき 長表遺跡	やまとたけん 山形県 やまとたけん 山形市 おおあざいそく 大字今塙 あがおもていせき 字長表	6201	平成3年度 登録	38度 17分 32秒	140度 11分 49秒	20000508 ~ 20000908	5,340	特定主要 地方道山形 羽入線道路 改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長表遺跡	集落跡	古墳時代	棟持柱建物2 竪穴住居 41	土師器 (堵・坏・高坏・器台・壺・甕・瓶)	古墳時代前期の特異な 棟持柱建物跡を2棟検出。
		鎌倉・ 室町時代	掘立柱建物1 堀 溝 土坑 井戸 周溝	かわらけ・中世陶磁器・ 漆器・茶臼・砥石	中世では約150m四方 の方形居館の外郭部を 検出。幅約2.5mの堀 跡と建物跡1棟を確認。  (総出土箱数: 52箱)

図 版



A区南半遺構検出状況(↑ S E)



B区北半遺構検出状況(↑ S E)



B区南半遺構検出状況(↑ N E)



B区南半遺構検出状況(↑ S)



B区南半完掘状況(↑ S E)



B区北・中央完掘状況(↑ E)



A区完掘状況(↑ 上)



B区完掘状況(↑ 上)

图版 2



S T 8 床面検出状況(↑ S)



S T 8 完掘状況(↑ S)



S T 8 炭化層遺物出土状況(↑ W)



S T 8 E L・炭化層土層断面(↑ S)



S T 9 古・新完掘状況(↑ W)



S T 9 新一炭化層・遺物出土状況(↑ SW)



S T 9 古-E K 炭化層土層断面(↑ S)



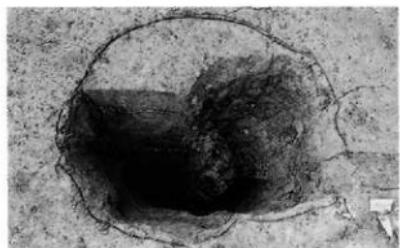
S T 10 完掘状況(↑ S)



S T11床面・炭化層検出状況(↑ E)



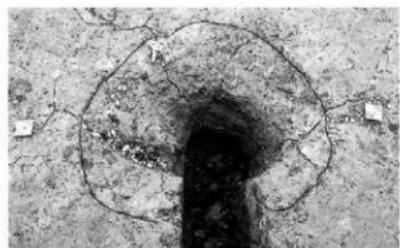
S T11完掘状況(↑ S)



S T11柱根出土状況(↑ S)



S T11 E P 2 完掘状況(↑ S)



S T11 E P 3 完掘状況(↑ S)



S T11 E P 4 柱根出土状況(↑ S)



S T11 E K 5 土層断面(↑ W)

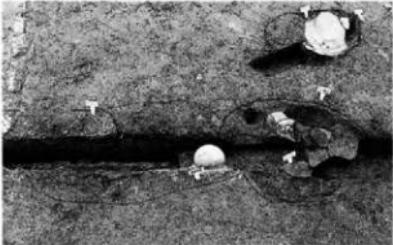


S T11 E K 6 土層断面(↑ W)

圖版 4



S T12床面検出状況(↑W)



S T12 E K 古・新土層断面(↑W)



S T14 E K 検出状況(↑S)



S T14 E K 焼土・炭化層土層断面(↑W)



S T14 E K 下層遺物出土状況(↑W)



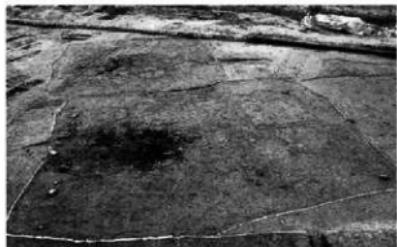
S T15完掘状況(↑S)



S T15南半貼床土層断面(↑W)



S T16 + 41完掘状況(↑S)



S T19 床面・炭化層検出状況(↑ W)



S T19 完掘状況(↑ S)



S T19 炭化層・遺物出土状況(↑ E)



S T19 遺物出土状況(↑ SW)



S T19 E P 1 土層断面(↑ S)



S T11 E P 2 柱根出土状況(↑ S)



S T19 E P 3 完掘状況(↑ S)



S T19 E P 4 完掘状況(↑ S)

圖版 6



S T 19 E K 9 黑褐色土層斷面(↑W)



S T 19 E K 12 土層斷面(↑W)



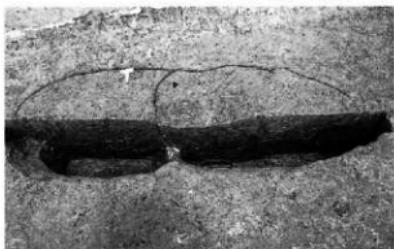
S T 19 E K 12 下層遺物出土狀況(↑W)



S T 19 E D 6 土層斷面(↑S)



S T 19 E D 8 土層斷面(↑S)



S T 19 E K 5 土層斷面(↑S)



S T 20・39 床面検出状況(↑W)



S D 227~230 畝状溝跡群土層断面(↑S)



S T 21古・新・22完掘状況(↑ E)



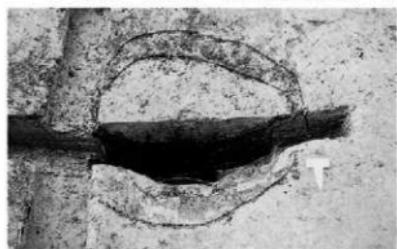
S T 21新-EL-EK・炭化層検出状況(↑ E)



S T 21新-EL2-EK完掘状況(↑ S)



S T 21新-EL2 土層断面(↑ S)



S T 21新-EK 土層断面(↑ S)



S T 21新-焼土塊(EL1) 土層断面(↑ S)



S T 21新-遺物出土状況(↑ E)



S T 21古-遺物出土状況(↑ E)

図版 8



S T 22 炭化層土層断面(↑ W)



S T 23・37 精査状況(↑ S)



S T 23 E K 土層断面(↑ E)



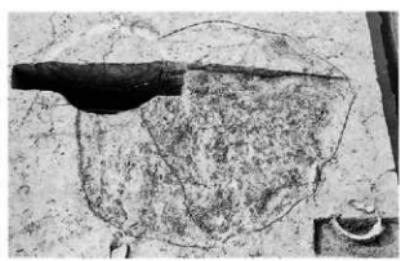
S T 25 完掘状況(↑ S E)



S T 27 古・新完掘状況(↑ S)



S T 27 新一炭化層検出状況(↑ NW)



S T 27 古-E P 2・E K 土層断面(↑ S)



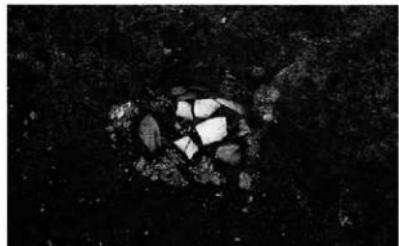
S T 27 古-E P 4 土層断面(↑ N)



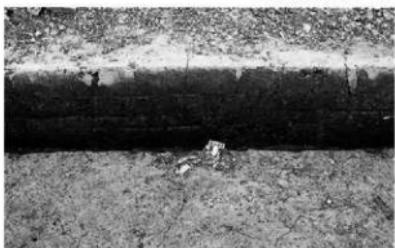
S T 28 贴床土層断面 (↑ N)



S T 14・41・42 完掘状況 (↑ S)



S T 41 遺物出土状況 (↑ S)



S T 42 遺物出土状況 (↑ W)



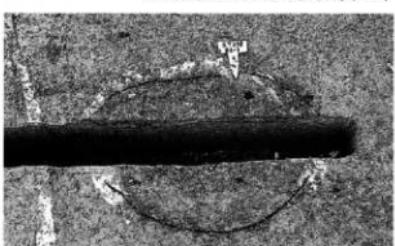
S T 45 完堀状況 (↑ S E)



S T 246・247 完堀状況 (↑ W)



S T 274・275・278 精査状況 (↑ S)

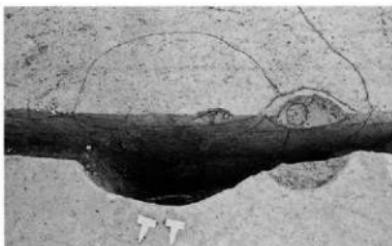


S T 278 E L 土層断面 (↑ S)

図版10



S T 278 E P 1・遺物出土状況(↑ S)



同左土層断面(↑ S)



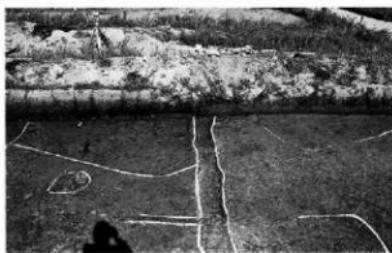
S T 282精査状況(↑ S)



S T 282 E L 土層断面(↑ W)



S T 286貼床土層断面(↑ S)



S T 270・271床面検出状況(↑ W)



S T 241完掘状況(↑ W)



S T 241 E L・E K 土層断面(↑ W)



S T 291炭化層検出状況(↑ S)



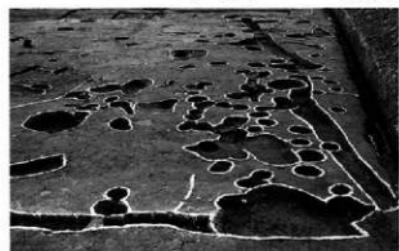
S T 71完掘状況(↑ W)



B区中央 S D 307土層断面



S D 233完掘状況(↑ S)



A区東半ピット群完掘状況(↑ S)



A区 S P 308遺物出土状況(↑ S)

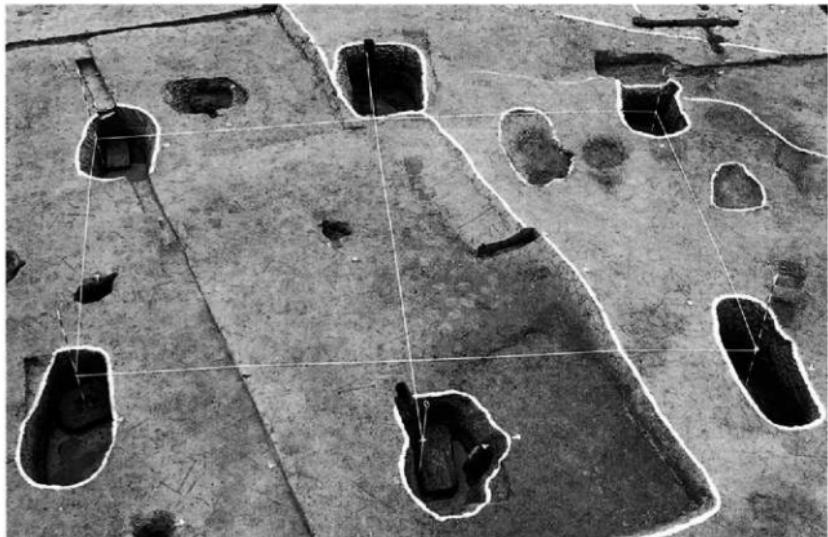


S G 34中央土層断面(↑ W)



S G 34西半土層断面(↑ N E)

図版12



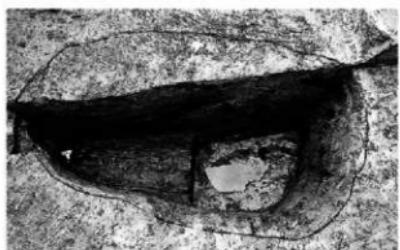
S B 300完掘状況(↑ E)



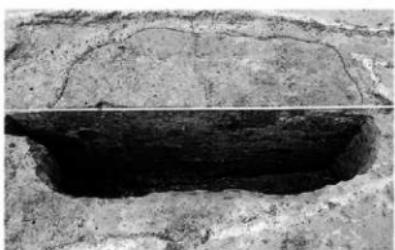
S B 300 E P 290検出状況(↑ W)



同左土層断面(↑ S)



S B 300 E P 288土層断面(↑ S)



S B 300 E P 295土層断面(↑ S)



SB 300 E P 237下層礎板出土状況(↑ S)



SB 300 E P 289土層断面(↑ S)



同上上層礎板出土状況(↑ S)



同上礎板出土状況(↑ S)



SB 300 E P 287礎板出土状況(↑ S)



SB 300 E P 295礎板出土状況(↑ S)

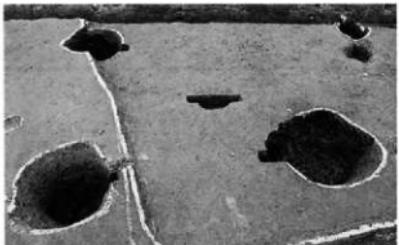


SB 300 E P 288礎板出土状況(↑ S)

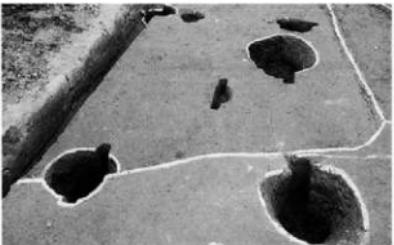


SB 300 E P 290礎板出土状況(↑ S)

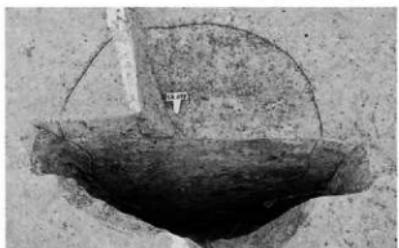
図版14



S B 301 完掘状況(↑ W)



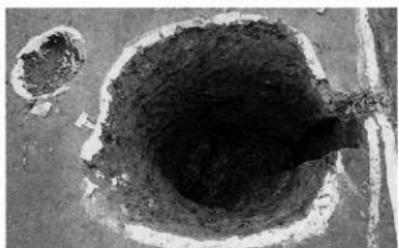
同左完掘状況(↑ N)



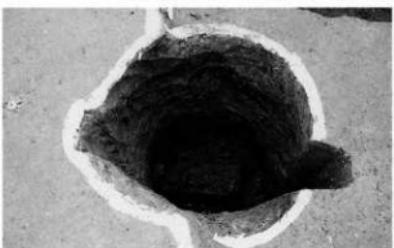
S B 301 E P 293 土層断面(↑ W)



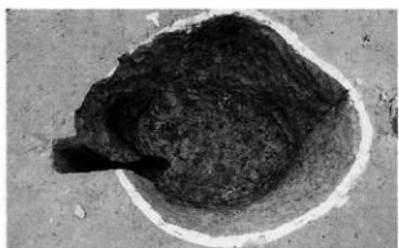
S B 301 E P 296 土層断面(↑ W)



S B 301 E P 234 磁板片出土状況(↑ W)



S B 301 E P 293 磁板出土状況(↑ W)



S B 301 E P 292 磁板片出土状況(↑ W)



S B 301 E P 296 磁板出土状況(↑ S)



C区遺構検出状況(↑S)



C区完掘状況(↑上から)



C区(字元屋敷地内)近景・堀跡推定線(↑NW)



SD 1 堀跡中央土層断面(↑W)



SD 1 堀跡東半土層断面(↑W)



SD 1 堀跡・SD 5 土層断面(↑E)



SD 1 堀跡遺物出土状況(↑SW)



土壘跡土層断面(↑W)

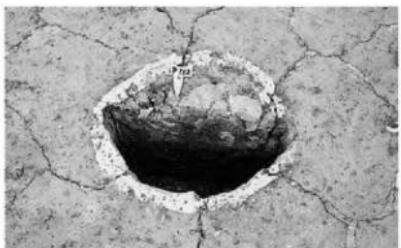
図版16



C区完掘状況(↑ S)



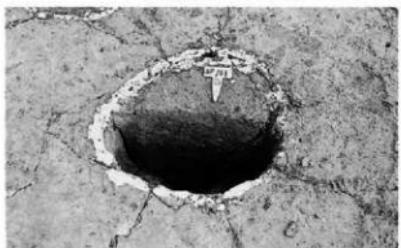
S B 302精査状況(↑ S)



S B 302 E P 152土層断面(↑ S)



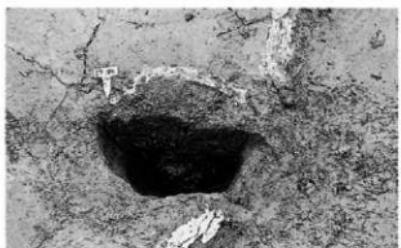
S B 302 E P 153土層断面(↑ S)



S B 302 E P 141土層断面(↑ S)



S B 302 E P 155完掘状況(↑ S)



S B 302 E P 184木根出土状況(↑ S)



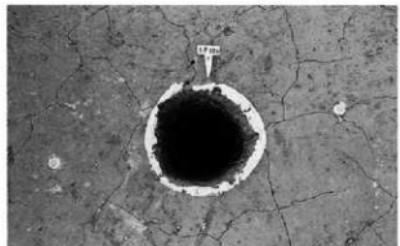
S A 303 E P 165木根出土状況(↑ S)



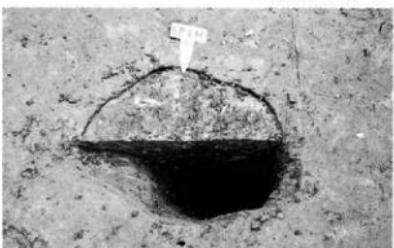
S A 304 • 305 • 306完掘状況(↑ S)



S A 304 E P 123土層断面(↑ S)



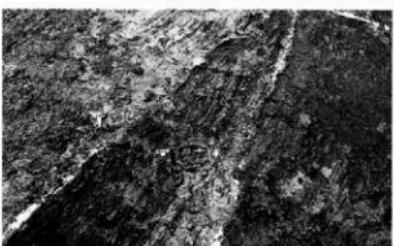
S A 304 E P 124完掘状況(↑ S)



S A 305 E P 134土層断面(↑ S)



S D 7 • 104精査状況(↑ N)



S D 7 上層漆器出土状況(↑ S)



S D 7 • 104土層断面(↑ N)



S D 104遺物出土状況(↑ N)

图版18



S E 89土層断面(↑ N)



S K 90漆器出土状況(↑ S)



S K 91土層断面(↑ S)



S K 102土層断面(↑ S)



S K 216漆器出土状況(↑ S)



D区 S D 193検出状況(↑ S)



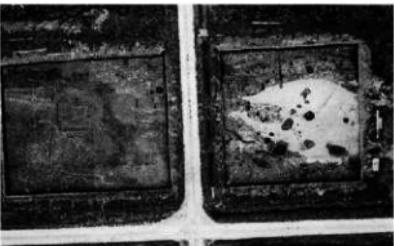
S D 193土層断面(↑ S)



S D 193完掘状況(↑ S)



E区遺構検出状況(↑S)



D・E区完掘状況(↑上から)



E区遺構精査状況(↑S)



S-E 75土層断面(↑E)



S-E 75完掘状況(↑E)



S-E 76完掘状況(↑S)

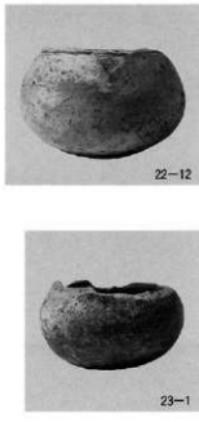
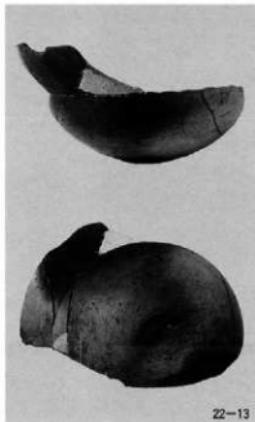
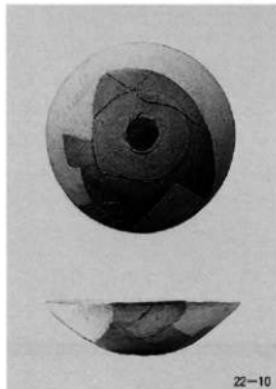
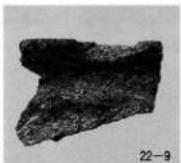
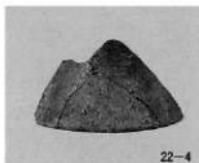
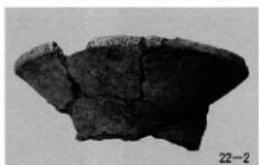


S-E 81土層断面(↑S)



S-E 81完掘状況(↑S)

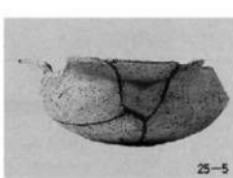
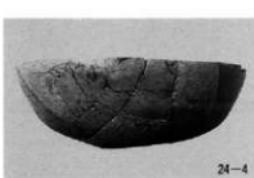
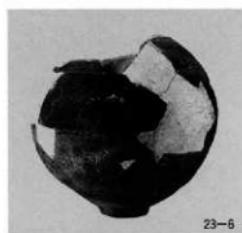
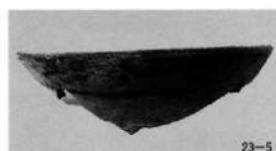
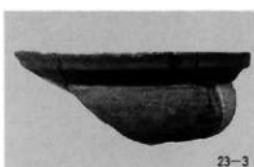
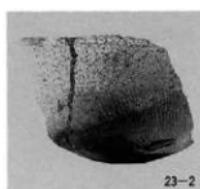
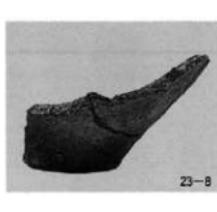
図版20



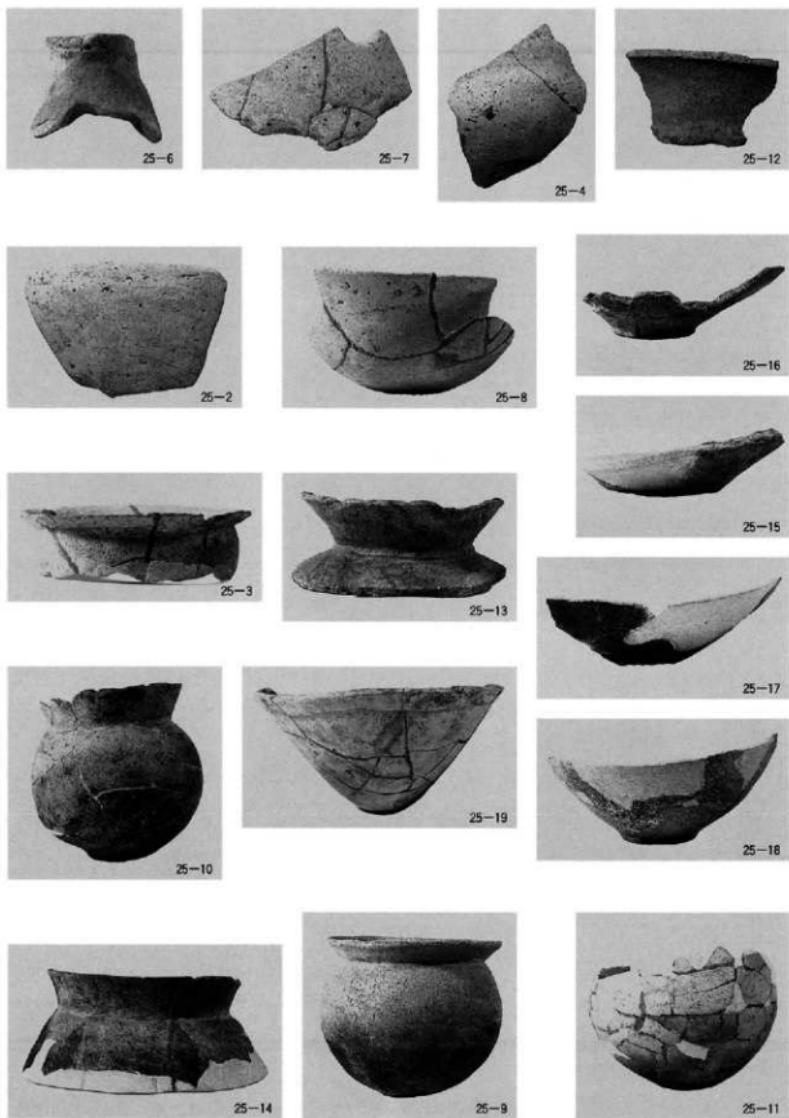
22-4

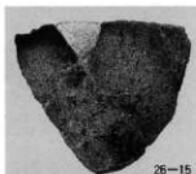
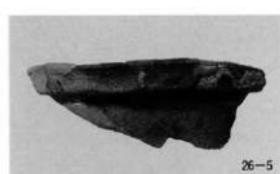
22-12

22-1

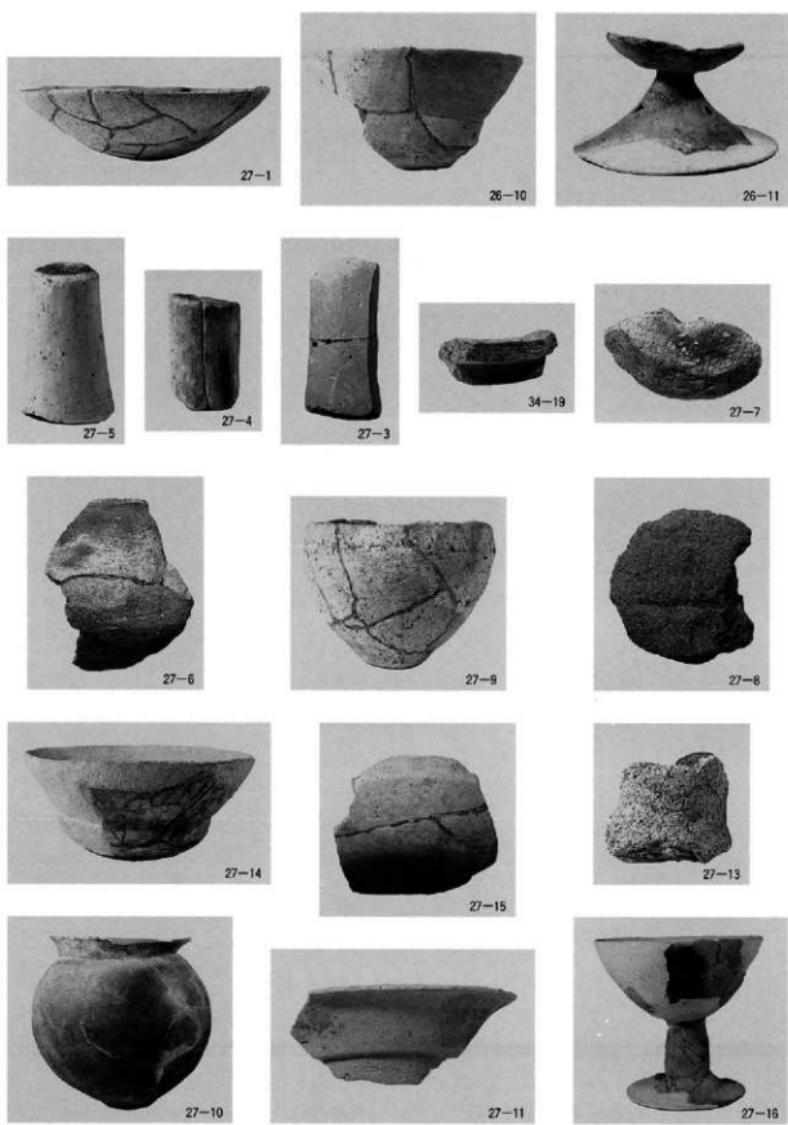


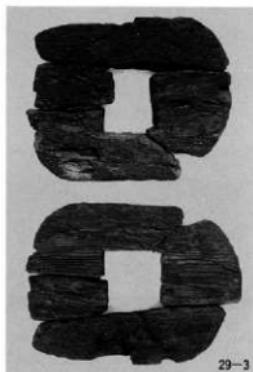
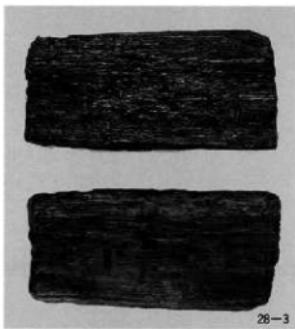
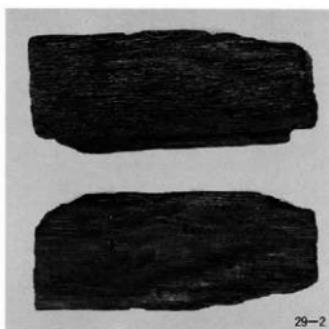
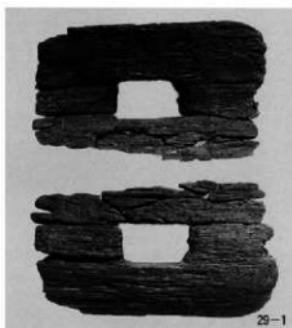
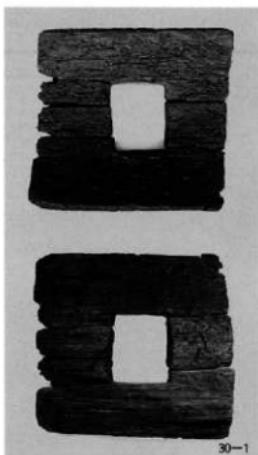
図版22





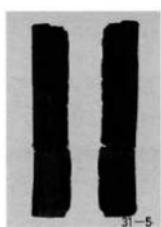
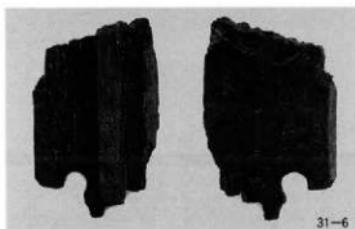
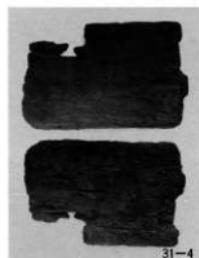
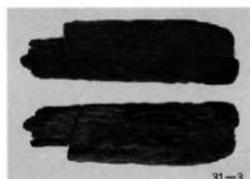
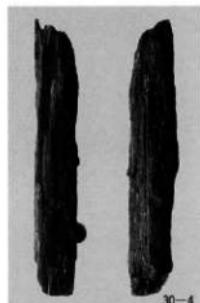
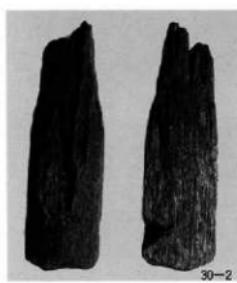
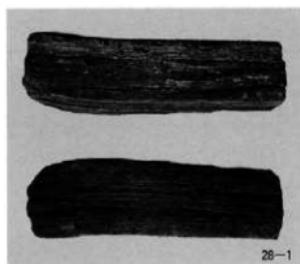
図版24



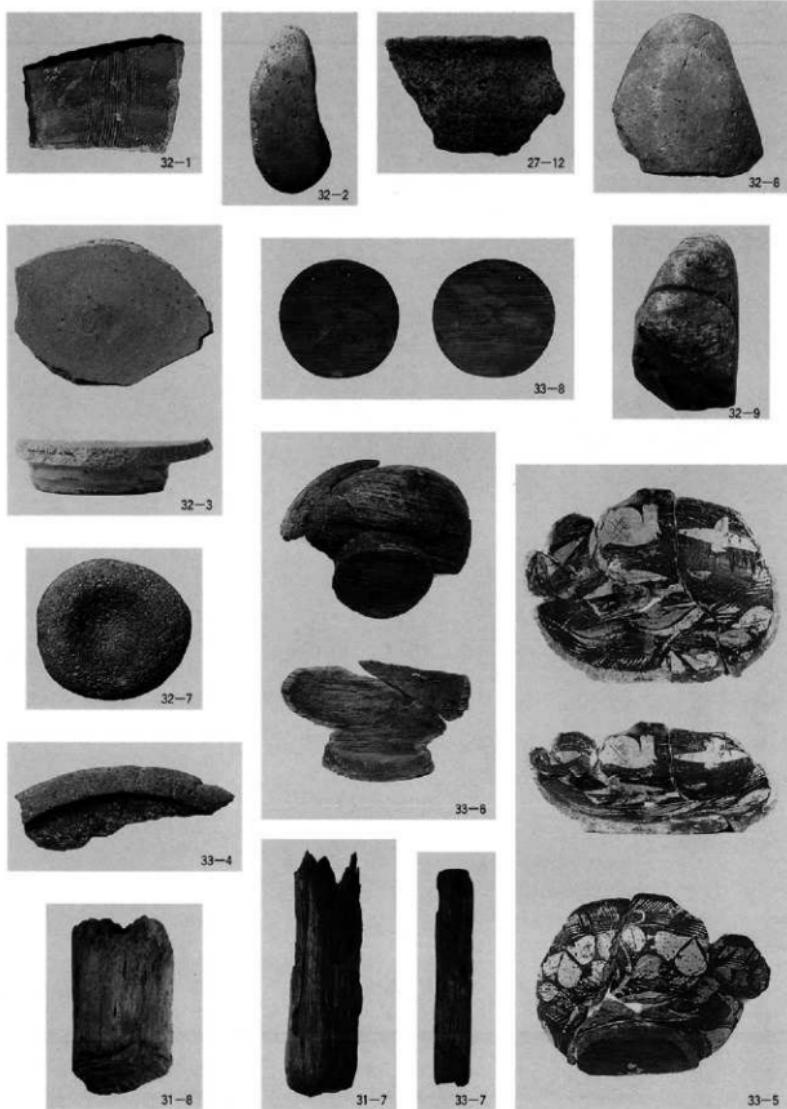


※全て上が表面、下が裏面。

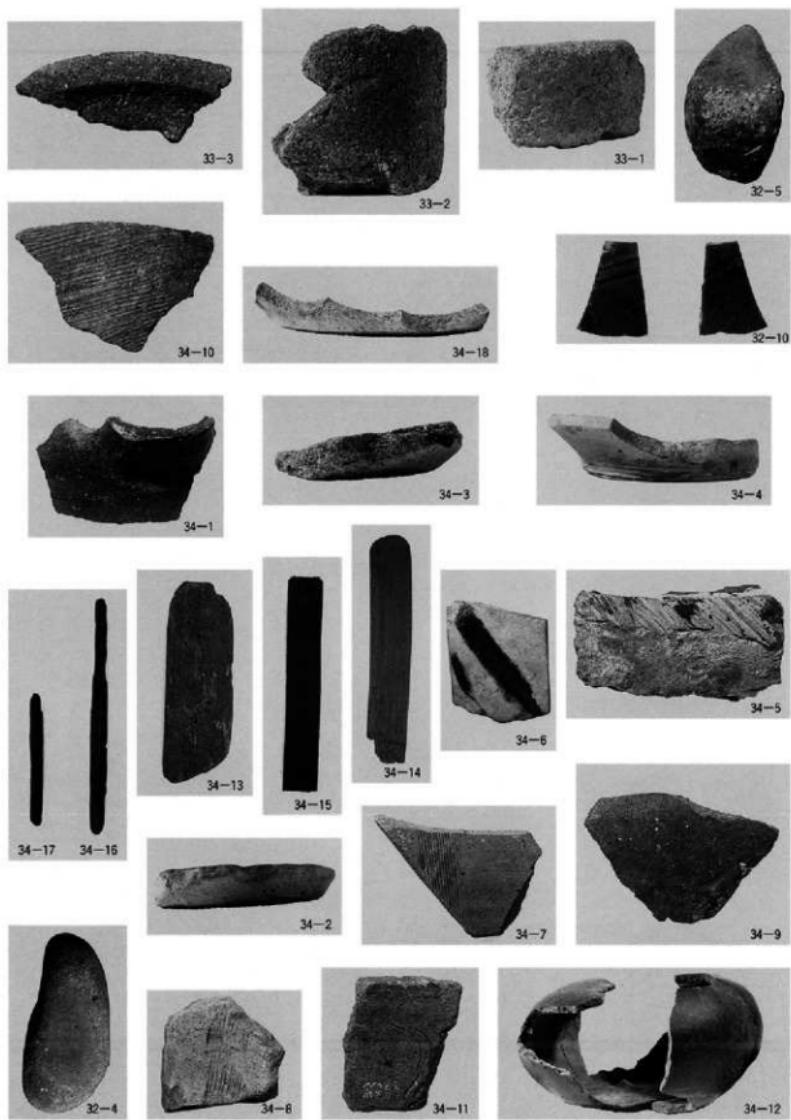
図版26



※全て上が表面、下が裏面。



図版28



付編

## はじめに

長表遺跡は、馬見ヶ崎川扇状地の扇端部に立地する。発掘調査により、調査区中央の旧河川跡を境に、北側（A・B区）に古墳時代の堅穴住居跡、南側（C・D・E区）に鎌倉～室町時代の堀跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡など2つの時代の集落跡が検出されている。この中でC区旧河川跡については、その断面の層相から少なくとも4回の流路変更が確認されている。

本報告では、旧河川跡の時期を知るために、テフラ分析を行う。また、旧河川跡や堀の堆積環境と当時の周辺の古植生を知るため、珪藻分析、花粉分析、樹種同定を実施する。さらに、古墳時代の住居跡内土坑の性格を検証するために、植物珪酸体分析と土壤理化学分析をそれぞれ実施する。

## I. C区旧河川跡のテフラ分析

### ○試料

旧河川跡において、断面観察により火山噴出物（テフラ）の可能性が考えられた試料番号5の計1点についてテフラ分析を実施する。

### ○結果

洗い出された試料には、テフラに由来する物質であるスコリア・火山ガラス・軽石は全く認められず、ガラスの屈折率測定も行うことができなかった。砂分には石英や長石、白色の石質岩片などが多く認められた。全体的に淡い色調の砂分が多いために、土層断面ではテフラのように観察されたものと考えられる。したがって、今回の結果から旧河川跡の年代についてはよくわからない。

## II. C区旧河川跡と中世堀の堆積環境と古植生

### ○試料

#### (1) 硅藻分析・花粉分析

試料は、旧河川跡より採取された試料番号8・11・13と、中世堀より採取された試料番号1～4の計7点である。この中で、中世堀試料番号4は堀底面直下から採取された試料である。

#### (2) 樹種同定

S G34河川跡から出土した自然木12点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表4に記した。

### ○結果

#### (1) 硅藻分析

結果を表1、図1に示す。旧河川跡、中世堀とも珪藻化石が豊富に産出する。各地点の完形殻の出現率は、いずれも70%前後であった。地点別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

##### a) 旧河川跡

3 試料とも淡水生種のなかでも水域に生育する水生珪藻が優占する。その生態性の特徴は、貧塩不定性種（多少の塩分があつても耐えられる種）、真+好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域に生育する種）、流水不定性種（流水域にも止水域にも生育する種）と真+好流水性種（流水域に生育する種）が優占あるいは多産する。珪藻化石群集の特徴は、試料番号8・11・13とも近似しており、好流水性で中～下流性河川指標種群（河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、その環境を指標することができる種）の *Cymbella sinuata*、*Achnanthes lanceolata*、*A.rostrata*、流水不定性の *Gomphonema parvulum*、*Fragilaria pinnata var.lanceolata*、*Aulacoseira alpigena*などが数%～10%産出する。

#### b) 中世堀

珪藻化石群集は、試料番号4、試料番号3、試料番号2・1で違いがある。試料番号4は、淡水生種の生態性の特徴や珪藻化石群集が旧河川跡に似ている。貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、流水不定性種と真+好流水性種が優占あるいは多産する。産出種の特徴は、*Cymbella sinuata*、*Achnanthes lanceolata*、*Gomphonema parvulum*、*Aulacoseira alpigena*などが産出する。

試料番号3になると、淡水生種の生態性では真+好流水性種が減少し、流水不定性種が優占するようになる。流水不定性の *Achnanthes minutissima*、

表2 C区における花粉分析結果

種類	試料番号	旧河川跡			中世堀			
		8	11	13	1	2	3	4
大本花粉								
モミジ	1	—	—	—	—	—	—	—
モミジ属	2	1	—	—	—	—	2	3
ツクシノ属	1	—	1	—	1	1	—	2
マツノ属	—	2	—	—	2	12	13	25
マツノ属東北属	14	2	24	7	12	13	13	44
マツノ属東北属	27	9	33	20	14	13	8	66
マツノ属(不明)	8	46	38	16	10	8	—	—
コウヤマキ属	—	—	—	—	—	—	—	—
スギ属	6	2	6	2	5	4	4	4
イチイ科イヌガサ科ヒノキ科	1	—	—	—	1	4	3	1
ヤナギモ属	—	—	2	2	—	1	—	1
ヤマモモ属	2	—	—	—	—	—	2	6
サワダモ属	7	1	1	—	—	—	1	4
クルミ属	4	1	1	2	1	3	7	—
クマツノ属アサガ属	10	—	2	4	3	—	—	—
ハシバミ属	2	—	2	2	1	—	—	1
カバノキ属	2	1	5	11	7	9	—	—
ハンノキ属	14	5	14	7	14	26	10	—
ブナ属	68	8	22	78	85	133	19	—
コナラ属コナラ属	22	4	15	26	16	11	46	—
コナラ属カガシ属	2	—	1	—	—	—	—	1
クリ属	1	1	1	—	—	1	1	—
ニレ科ケヤキ属	36	15	26	15	7	16	15	—
エノキ属ムクノキ属	1	—	—	1	3	—	—	—
ウルシ属	—	2	—	4	5	26	1	—
モミジ属	—	1	3	—	—	2	3	1
カエデ属	2	—	1	—	—	—	—	—
トチノキ属	1	—	—	2	—	1	—	—
ブドウ属	—	—	—	—	1	4	—	—
ノブドウ属	—	—	—	—	—	—	3	—
シナノキ属	1	2	4	1	—	—	—	—
ミズノキ属	—	—	—	6	2	—	—	—
ウコギ科	1	—	—	1	1	1	1	1
ツブツブ科	—	—	5	1	—	1	—	—
トネリコ属	—	—	—	—	—	—	2	—
ニワトコ属	—	—	—	—	—	—	—	—
タニウツギ属	—	—	1	—	—	—	—	—
スイカズラ属	—	—	—	—	—	1	10	—
草本花粉								
ガマ属	1	—	—	—	—	2	—	—
サジオモガカ属	—	—	—	—	1	—	—	—
オモガカ属	—	—	—	—	—	2	—	—
イネ科	158	29	37	200	259	318	72	—
カキツバタ科サボテン科	34	17	10	9	23	19	19	—
ミズアライ属	3	—	—	—	—	2	1	—
クワ科	4	—	—	19	16	11	—	—
ギンザシ属	—	—	—	—	—	—	—	—
サナエナシ属一ナギツカミ属	4	2	1	20	3	8	—	—
ソバ科	—	2	—	13	9	9	—	—
カカヤ科ヒユ科	4	—	—	7	13	9	—	—
ナシ科	4	—	—	—	20	8	5	1
カラマツノ属	—	—	—	—	1	—	—	—
キンボウロ属	—	—	—	—	—	—	—	—
アブラナ科	1	1	—	9	8	2	1	—
バラ科	—	2	—	11	10	63	2	—
メタ科	—	—	—	—	4	—	—	—
ミソハギ属	—	—	—	—	1	—	1	—
キカシグサ属	—	—	—	—	1	—	13	—
アリノトウガサ属	—	—	—	—	1	—	—	—
セリ科	1	—	—	16	1	3	—	—
ヒルガオ属	—	—	—	—	—	—	—	1
ミツガシワ属	—	—	—	—	—	—	3	—
ネナシカズラ属	—	—	—	—	1	1	—	—
シソ科	—	—	—	—	—	—	—	—
ゴマ属	—	—	—	—	—	—	—	—
オオバコ属	—	—	—	2	1	—	—	—
アカネ科	—	—	—	—	—	2	—	—
ゴキブリ属	—	—	—	—	1	—	—	1
ヨモギ属	20	1	6	263	57	36	—	—
オモモキ属	—	—	—	—	1	—	—	—
キク属	1	—	1	9	9	12	6	—
タンポポ属野菜科	—	—	5	5	5	5	1	—
不明花粉	11	7	12	11	15	21	—	—
シダ類孢子	152	342	268	87	139	82	366	—
苔本花粉	227	102	215	215	204	293	366	—
草本花粉	235	55	56	615	424	478	107	—
不明显花粉	11	7	12	11	18	21	13	—
シダ類孢子	152	342	268	87	130	82	366	—
藻類(不明を除く)	614	499	539	917	758	853	739	—

*Gomphonema parvulum*が15~17%と多産し、好止水性の*Eunotia bilunaris*を伴う。

試料番号2・1では、水生珪藻に代わって陸上の好気的環境に耐性のある陸生珪藻が多産するようになる。2試料とも珪藻化石群集が近似しており、陸生珪藻の中でも分布が陸域にはほぼ限られる耐乾性の強いA群（伊藤・堀内、1991）の*Navicula contenta fo.biceps*が10数%、水域にも陸域にも生育する陸生珪藻B群（伊藤・堀内、1991）の*Pinnularia schoenfelderi*が5~16%と多産し、同じくA群の*Amphora montana*、*Navicula mutica*を伴う。

## （2）花粉分析

結果を表2・図2に示す。旧河川跡では試料番号11・13ではシダ類胞子の割合が高く、木本花粉はマツ属が優占し、ブナ属・コナラ属コナラ亜属・ニレ属一ケヤキ属・ハンノキ属などを伴う。試料番号8では木本花粉・草本花粉の割合はほぼ同じで、木本花粉はブナ属が多く産出し、マツ属・コナラ亜属・ニレ属一ケヤキ属などが認められる。草本花粉についてはほぼイネ科により占められ、カヤツリグサ科・ヨモギ属などが認められる。

中世堀底面直下の試料番号4では木本花粉の割合が高く、マツ属が優占とともにコナラ亜属がみられる。試料番号3~1では草本花粉の割合が高く、木本花粉間ブナ属に多く認められ、マツ属・コナラ亜属・ニレ属一ケヤキ

表3 樹種同定結果

属などが認められる。草本花粉はイネ科が中心であるが、試料番号1においてのみヨモギ属の産出が上回る。

## （3）樹種同定

樹種同定結果を表3に示す。自然木は、針葉樹1種類（アスナロ）と広葉樹6種類（オニグルミ・ヤナギ属・ハンノキ属ハンノキ亜属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・ニレ属・キハダ）に同定された。

地区	遺構	地点	層位	樹種
C区	SC34河川跡	東部	F 1	オニグルミ
			F 2	キハダ
			F 3	ハンノキ属
		中央部	F 1 Y	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			F 2 大	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			小	ハンノキ属ハンノキ亜属
C区	SC34河川跡	西部	F 1	ヤナギ属
			F 1 下	ニレ属
			F 2	ヤナギ属
			F 2 下	アスナロ
			F 3 大	ハンノキ属ハンノキ亜属
			小	ハンノキ属ハンノキ亜属

## 考察

### （1）旧河川跡および堀内の堆積環境

珪藻分析の結果、試料番号8・11・13からは中～下流性河川指標種群を含む流水性種が多産し、池沼などの安定した止水域に生育する浮遊性種や止水性種は少なかった。また、多産する流水不定性種は、流水性種と共に流水域に生育した種と考えられる。これらの3試料は、層相を含めて考慮すれば、洪水などによって河道が埋められた際に、流域に生育していた珪藻が堆積物中に取り込まれたことが推定される。断面には少なくとも4回の流路変更が認められるが、分析を行った試料では珪藻化石群集に大きな変化は認められなかった。そのため、ほぼ同様な水質環境および流水環境が推定される。

一方、中世堀では、珪藻化石群集の特徴から、試料番号4、試料番号3、試料番号2~1の

3 時期に大別できる。試料番号 4 では、中～下流性河川指標種群を含む流水性種が多産し、旧河川跡の試料番号 13 に類似する。ただし、本試料は中世堀の底面直下から採取されている砂礫で、本遺跡が立地する微高地を形成する堆積物と考えられる。これらのことから、馬見ヶ崎川の氾濫により本遺跡が立地する微高地が形成した後も、本遺跡周辺は引き続き馬見ヶ崎川の氾濫の影響を受けていたことがうかがえる。

試料番号 3 は、堀内の最下位の埋積物で腐植の認められるシルトからなり、流水不定性種が優占する。また、湿地～沼沢地などに生育する種類も産出する。この結果から、試料番号 3 が堆積した頃の堀内は、流れの少ない停滞水域であり、シルトなどが堆積しやすい環境であったことが推定される。さらに、試料番号 2～1 では、陸生珪藻が水生珪藻を上回って産出する。この結果から、堀内には水はほとんど認められず、乾いた環境になったことが考えられる。おそらく、堀の機能を失い埋積が進んだと考えられる。

#### (2) 遺跡周辺の古植生

旧河川跡の花粉分析結果では、試料番号 11・13 ではマツ属の優占とともにシダ類胞子が多く産出している。シダ類胞子やマツ属などの針葉樹花粉は酸化に対する抵抗力が高いことから(中村, 1967)、試料番号 11・13 でのマツ属の優占は分解に強い花粉が選択的に残された可能性が高い。試料番号 8 ではブナ属が優占し、マツ属・コナラ亜属・ハンノキ属・ニレ属-ケヤキ属などが産出している。コナラ亜属・ハンノキ属・ニレ属-ケヤキ属などは、試料番号 11・13 でも認められていることから、これらは当時の植生を反映していると思われる。また、河道内から出土した自然木では、オニグルミ、ヤナギ属、コナラ節、ニレ属、ハンノキ亜属、キハダ、アスナロが認められた。

ブナ属は、ミズナラなどのコナラ亜属や林床のササ類などを伴って冷温帯林を構成することから、当時の後背地にはコナラ亜属などを伴うブナ林が広がっていたと推測される。また、ハンノキ属・ニレ属-ケヤキ属は低湿地や渓谷沿いの斜面などによく見られる。また、自然木に認められたオニグルミ、ヤナギ属等も渓谷沿いに生育する。これらの結果から、ハンノキ属(ハンノキ亜属)、ニレ属-ケヤキ属(ニレ属)、オニグルミ、ヤナギ属等の落葉広葉樹が河川沿いに生育していたことが推定される。また、試料番号 8 では、草本類の花粉化石も同じ程度の割合で産出することから、低地には木本類と共にイネ科などの草本が繁茂していたと推測される。

一方、中世堀の花粉分析結果では、試料番号 3～1 で花粉群集に変化は認められず、ブナ属が優占し、マツ属・コナラ亜属・ハンノキ属・ニレ属-ケヤキ属などが認められている。これから旧河川跡と同様にコナラ亜属などを伴うブナ林が広がっていたと推測される。群集組成をみると草本類の占める割合が高いことから、当時の遺跡周辺は比較的開けた環境であったと思われる。草本類はイネ科が中心であり、ハンノキ属やニレ属-ケヤキ属を伴うことから、比較的開けた低地ではイネ科などとともにハンノキ属・ニレ属-ケヤキ属などが生育していたと考えられる。また、試料番号 1 ではヨモギ属の産出がイネ科を上回る。ヨモギ属は比較的乾いた草地などにみられる。珪藻分析結果でも陸生珪藻が産出することから、下位層準の時期に比べ周辺が乾燥していったことが推定される。

### III. B区堅穴住居跡の分析

#### ○試料

試料は、堅穴住居跡T S 27のE L 2内から採取された炭化土壌と、E P 3の外の炭化物集中の計2点である。この2点について、植物珪酸体分析と土壤理化学分析を実施する。なお、遺体埋納の可能性を検証するため、土壤理化学分析の分析項目は遺体成分として多量に含有されるリン酸・カルシウム（骨の主成分）および腐植含量を選択した。

#### ○結果

##### （1）植物珪酸体分析

結果を表4に示す。E L 2内の炭化土壌とE P 3の外の炭化物集中からは、いずれも多数の珪化組織片が認められる。そのほとんどは、特徴的な形態の植物珪酸体を含まない不明組織片であるが、他には稲穀殻に形成されるイネ属穎珪酸体やイネ属の葉部に形成される短細胞列がわずかに認められる。

珪化組織片の他には、単体のイネ属やヨシ属がわずかに検出される。

表4 B区S T27における植物珪酸体分析結果

種類	遺構名 試料番号	E L 2内 炭化土壌	E P 3の外 炭化物集中
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属	1	1	
ヨシ属	7	2	
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属	5	2	
ヨシ属	5	3	
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	8	3	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	10	5	
総計	18	8	
組織片			
イネ属穎珪酸体	1	2	
イネ属短細胞列	1	1	
不明組織片	多数	多数	

##### （2）土壤理化学分析

分析結果を表5に示す。いずれの試料も土性はC L（埴壤土）に区分され、比較的粘質な土壤であり、土色はN 2/0と黒色を呈することから、腐植を多く含有することが予想される。

腐植含量はS T27 E L 2内炭化土壌では6.46%、E P 3の外炭化物集中では5.89%と土色と比べて低い腐植含量であることが指摘される。一方、リン酸含量についてはS T27 E L 2内炭化土壌では1.29P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g、E P 3の外炭化物集中では1.09P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gと著しく低い特徴を示した。また、カルシウム含量についてはS T27 E L 2内炭化土壌では8.52CaOmg/g、E P 3の外炭化物集中では8.05CaOmg/gとやや高い傾向が認められた。

表5 B区S T27における土壤理化学分析結果

試料名	土性	土色		腐植含量(%)	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg/g)	CaO(mg/g)
E L 2内 炭化土壌	C L	N2/0	黒	6.46	1.29	8.52
E P 3の内 炭化物集中	C L	N2/0	黒	5.89	1.09	8.05

注。（1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

（2）土性：土壤調査ハンドブック（ペトロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。

C L…埴壤土（粘土15~25%、シルト20~45%、砂3~65%）

## 考察

植物珪酸体分析の結果、S T 27のE L 2内から採取された炭化土壌と、E P 3の外の炭化物集中からは、多数の珪化組織片が検出された。この中には、イネ属穎珪酸体やイネ属の葉部に形成される短細胞列も認められる。この結果から、イネ属の初穀や稻藁を含む植物が燃焼した後の灰が残存していると考えられる。ただし、珪化組織片は特徴的な形態の植物珪酸体を含んでいないため、初穀や稻藁以外に利用された植物については、詳細が不明である。

一方、土壤理化学分析の結果では、リン酸含量がS T 27 E L 2内炭化土壌では $1.29 \text{P}_2\text{O}_{5\text{mg}}/\text{g}$ 、E P 3の外炭化物集中では $1.09 \text{P}_2\text{O}_{5\text{mg}}/\text{g}$ と著しく低い特徴を示した。土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例がある(Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)。これらの調査から推定される天然賦存量の上限は約 $3.0 \text{P}_2\text{O}_{5\text{mg}}/\text{g}$ 程度であり、今回の結果は天然賦存量の範囲内といえる。また、カルシウムの天然賦存量は普通 $1\sim50 \text{CaOmg}/\text{g}$ (藤貫, 1979)といわれ、含量幅がリン酸よりも大きいことからここでは補助的なものとして考えたほうがよい。今回、本遺跡周辺土壌におけるリン酸の天然賦存量が不明であるため、リン酸が富化された可能性を指摘するための基準がやや曖昧ではある。しかし、得られた値はいずれも天然賦存量を越えるものではないことから、リン酸の富化は認められないといえる。試料中のリン酸は、主に前述の燃焼した植物体などに由来するものと考えられる。したがって、今回の結果から見る限り、動物遺体の痕跡は認められないといえる。

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第87集

ながおもて  
長表 遺跡発掘調査報告書

2001年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161

山形県上山市弁天二丁目15番1号

☎023-672-5301

印刷 大場印刷株式会社

---